

長い間其處に滞在してゐる中に、其の地方の人々の嗜好や好尚なごを熟知して商人が販路擴張の指導者となつてゐる。又一面には南洋各地の雜貨店は皆なこの「日本の姉さん」を主なる顧客としてゐる。現に南洋各地に於て多少の資産をつくるに至つた日本人中には醜業婦によるものは甚だ多く、馬來半島の護謨園等の中にもこれらの娘子軍の貯蓄を借りて資金としてゐるものが少くない。或は流浪して衣食に窮した驅込者の面倒を見て相當の男に立てゝやる俠氣な女も多い。

その二に彼女等は日常殆んど無意識に外人に接してはゐるが、彼女等が何気なしに見聞する外人の事情が我が邦の軍事探偵の有力なる資料となり、それが參謀本部の牒報課へ這入つて、時には力強い作戰計畫の基礎となる場合が多い。日清、日露の戦争に朝鮮、支那に於ける醜業婦が軍隊に與へた便宜は尠少なものではなかつたに聞く。

其の三は彼等は家郷を出る時の當初の目的を遂行するために金が手に這入りさへすれば必ず送金する。國家の經濟的發展に影響する。今南洋に假に六千人居るとする(事實は六千人以上である)一年に各人が故郷へ送金する額を二百圓とするも(實際は二百圓位ではあるまい)總計百二十萬圓になる。而して彼女等が歸國に際して大抵一二千圓を懐にして來る。假に一人平均一千五百圓として歸國者は一年七百人を概算すれば其の金額總計百五萬圓に達する。合計して二百二十五萬圓である。實に莫大な金ではあるまいか。而もそれが事實よりも遙かに少ないのである。

南洋に於ける娘子軍の發展は必ずしも日本國民の誇るべきことではない。然し彼女等の勢力もまた侮るべからざるものがあるのである。

一三馬 來 情 話

一、蕃人と寝た女

ピナンのセンタラ花街何番の某女將、今は某店の主婦何子と一夜瓦斯の光りの淡い旗亭の卓を圍んで話し合つたここがあつた。話が過去に移るに、女將は思ひ出し思ひ出しこんな話を始めた。根の高い丸鬚に結つて、キリツミ結んだ唇、黒眼勝な睫毛の長い眼。——人から聞いてはるだが、成程はやかな美しい顔である。女はかう言つて話した。——

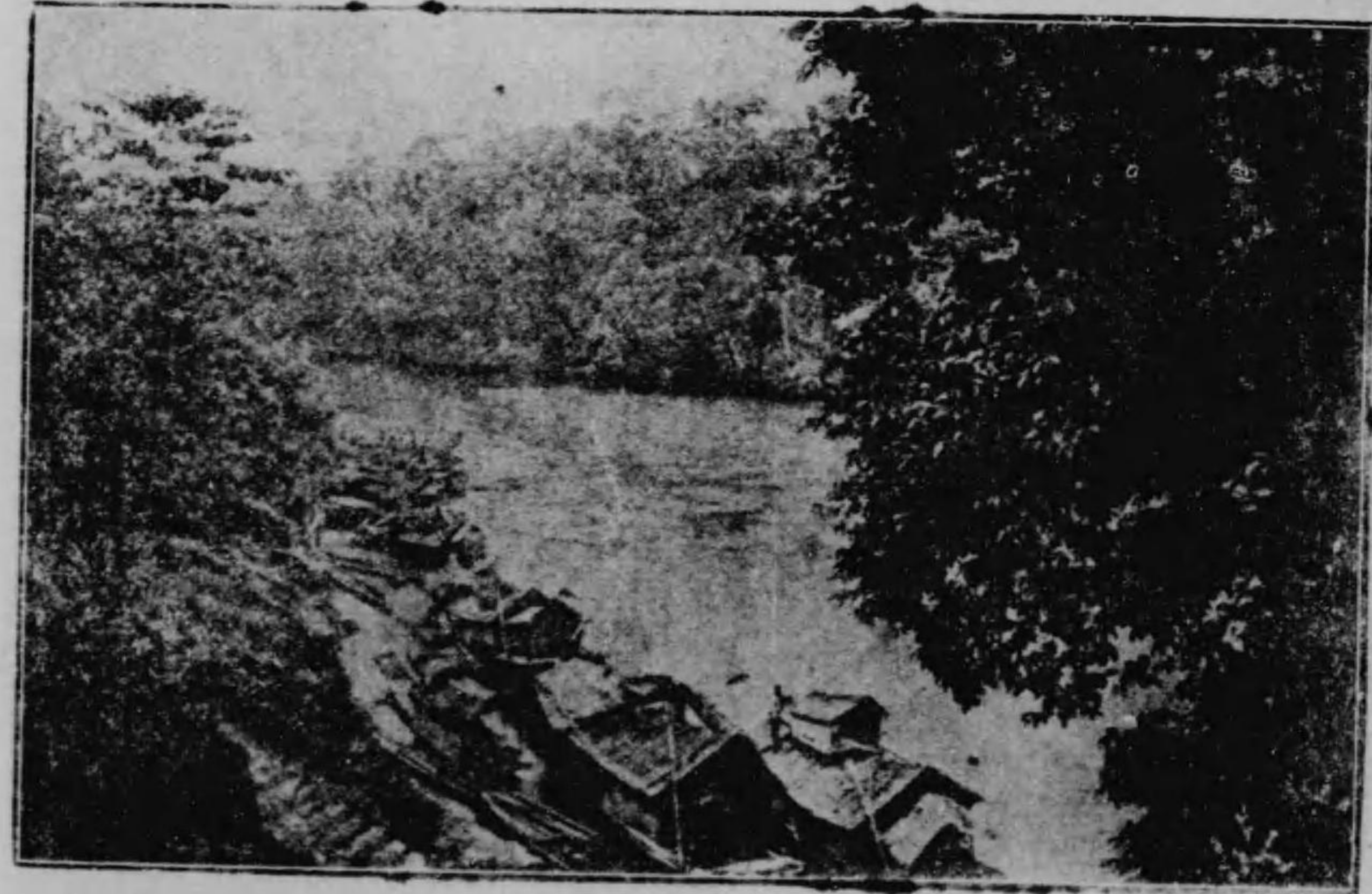
「もう十四五年も以前の秋のこので御座いました。お若いおいふの、お鶴おいふの三人でバハン州ミトレンガン州との山境の食人種の部落——サカイの住む山中へ稼ぎに參つたことが御座いました。三日三晩かゝつてバハン河を獨木舟で上りました。何しろ鱈魚なんごは私達の船の後から跟けて來るごいふ有様です。その恐怖さつたらありません。なぜそんな冒險をしたかご申しますご、何しろあの邊は無人の境でせう。食人種が長い間蓄めてゐた財産を目當てに行つた譯です。そこでうんご占め込んで二人の妓共も日本へ歸りたいご申してゐましたので、二人に改めて五百圓を前借して連れて來た

のでした。金のためだこは申せ今から考へるに随分向ふ先見すをしたものだと思ひます。いくら食人種でも此方が色氣を見せれば大低命に危害を加へないさい自信もいくらかありました。私はその時は三十でしたかと思ひます。

三日目にゲナグイカンボンさいふ小さな村へ着きました。そこを基點にしてそれから密林をぬけ山路を越えて、虎や象の出没する奥山までも稼ぎ廻るさいふ考へでした。随分苦茶なここをやつたものですね。」

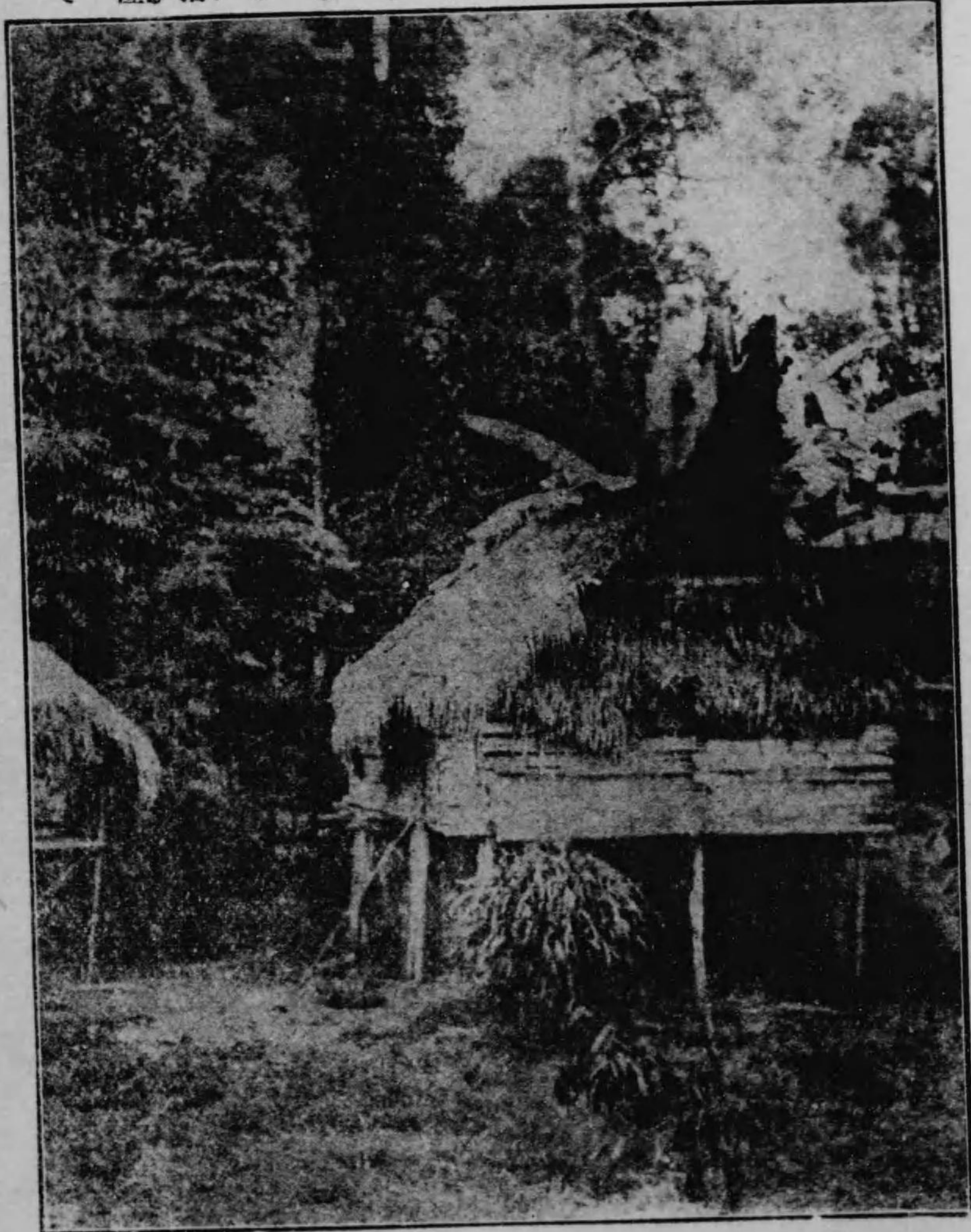
かう言つて心持赤い顔をほてらし、笑ひ笑ひコップの酒をのみ乾して語り續けました。

「私達はそのダイヤ族のカンボンに一軒の小屋を貸りて、三人はアンベラの上に赤毛布を敷いて、枕を三つ拵へ種々工夫をこらして陣容を張つた



流上の河ンハバ

のです。食物はサカイから買ふここゝにしました。深山中にあるものですから知れずてゐますわね。まあ果物、鹿や山猪の肉、位なもので



家住の族蠻イカサ

す。初めの中は山男が十人二十人ほぎつゝ来て、一週間ばかりは氣前よく金を費つて行きましたが、その中に金はつきる。もごく未開な蕃人のこゝです。金が無ければ無理を言ふのは知れたこと。夜は私共ばかりですから物凄くて遠くで猿の啼く聲を聞いたり、虎の吼える聲をきいたりする。三人は抱き合つて慄へてゐたものです。何時蕃人の夜襲をうけるか解らないので、重い銀貨などは運びが悪いので、土地にゐた一人の白人に依頼して紙幣に換へて貰ひました。三千弗は確にありましたねえ、随分稼いだものでせう。その金を巡查に預けて、そこらの村々を甲から乙へ稼ぎ廻つたものです。三十哩近くも歩きましたでせうね。」

「ある村へ着いた時でした。其處でも相變らず獸のやうな奴を相手にしてやつてゐます。その中に若い酋長の息子がごく私に惚れて來ましたね。ホホ、一乃公の妻になれい」といつて挑んで來るんでせう。「家には山も、財産もある。不自由をさせないからなつて呉れ」つて子供のやうに無邪氣なこゝを言つて、毎日のやうにやつて來るのでせう。もごく金が欲しさにやつた仕事ですもの蕃人の唄になどは眞平ですあね。言つて、そんな顔でもしやうものなら、何をするか知れない。いよいよ向ふも堪らなくなつた見えて、強談判を持ちかけて來ましてね。サアさうなるに、少々無氣味になつて來た。で、二人のもの相談して有金残らず身につけて逃げるこゝに致しました。女手で舟を漕ぐのは容易な業ぢやありません。まごくしてゐるに、後から追ひつかれるので、二日ばかり例の

雑草や灌木の茂つた中に鰐魚がボカンボカンミ口を開いてゐるこゝろを漕ぎ廻りましたね。さうにも力が盡きたので、三人は密林の中に細い道を見出したのを幸ひ方向も知らずに辿り出したのです。足も手も創だらけです。茨や雑草に着物が纏はつて裂け裂けになるこゝいふ仕末です。幾千年の大樹が風にも物凄く呻つてゐるのが、後から食人種にも追かけられてゐるやうで脅え脅えて路を急ぎました。無論方角などは解りませぬ。其内に私も考へましたね、もしさうかするに、また彼奴らの搜索隊に打突るかもしれない。さうしたら三人連でゐるに逃けたこゝいふ痕跡が十分ある。それよりも私一人になつて(旁々二人の妓共と一緒に殺さすのも氣の毒ですから)ゐれば、もこも惚れ込んでゐるのだから、危害を加へても大したこゝもあるまい。殺されるにしても一人であるし、又いくらか遁辭が見當らないこゝもないと考へましたのでね。」

「二人をさきに歸しました。度胸をきめては居ましたもの、何時又會へるか分りませんの。一緒に逃げてくれさいふ妓共を一足さきにやりました。泣きなき密林の中を「姉さん、姉さん」と呼んで行くのを聞くに、私も胸がふさがりましたね。さうさう木魂すら聞えなくなつた時は何とも言へない淋しさでした。その日は夕方まで深林の中を歩き廻りましたが、何方へ行くかすら分らない。夕陽はもう陰つて參りますし、腹は空く。西を見ても東を見ても大きな樹ばかりでせう。人を呼んで見たつて、誰も來てくれるではなし、虎が來て餌にしてくれた方が結句氣骨が折れなくていゝとさへ考へま

したね。人間も行詰るこ、度胸がきまるものです。根も力もつきて大きな榎樹の下にベタンコをして泣いてゐましたよ。二人の妓共は今頃さうしてゐるだらうかこ考へたからです。西の方へ沈みかゝるお陽様が樹の葉の間から見えてせう。その日の入りの淋しさつたら、今だに覚えてゐますね。あゝ羽があつたら、小鳥であつたら、頭の上で小鳥が悲しい泣き聲をあけてゐるのですもの。」

「こ、私の後に不意に物の近づいた音がしました。驚いて見返るこ、さうでせう。二人連れのゲイヤ族が素裸體で毒矢ミ弓ミを持つて突立つてゐるではありませんか。脊中には鹿やキノワの血の滴るのを背負つてゐたのです。私がキヤツミ言ひますこ、向ふも驚いたの驚いたのつて。さうして樹の茂つた間から見え隠れにおづくこ覗いてゐます。尤もその筈でせう。私の形相も随分變つてゐましたからね。髪はザンバラに亂れてゐるのでせう。それに汗ミ垢ミ飢ミに顔は青白くなつて白地の浴衣は裂け裂けでせう。物に驚くやうな奴なら大したこもあるまいこ、度量をきめて手招きして呼びますこ、物陰から「お前は何處から来たか」こいふ。黒い顔に凄い眼を光らせて、私を凝視して睨めてゐるでせう。恐怖さを感じかかれてはこ思つて、心を緊張つて見ても後から慄へるこいふ仕末なのでせう。私は眼を瞑つて食人種にかう言つてたのみました。

「お前達は私を村まで連れて行けば、これをあげよう。」こ言つて金入を見せました。彼等も漸く安心して先導に立つて密林を案内してくれました。約五哩ほご歩いたこ思ひますこ、一

つの支那人の村へ出ました。それで土人等に一弗づゝやつて、酒を飲ませてやりました。喜んで土人等は歸つて行きました。」

でもね、その支那人の村こいふのが恐怖いこころでせう。巡查一人居るぢやありません、なまじつかに知識があるだけなほ恐怖いです。村中のものが謀し合せて私を何こかすれば、さうにでもなつたのですからね。」

「それから一二日して歸りました。全く恐怖かつたです。今思つても慄つこします。」
かう言つて彼女は美しい眉を曇らせて、矢繼早に杯を動してゐた。外には瓜哇人のサツテ（焼肉賣り）の呼賣の聲が更けて行く。

二、メリケンのお花さん

お初さんは横濱の野毛に宏壯な邸を拵へて安らかな夢を結んでゐるこいふ。新嘉坡の花街の角の十番、澁谷の店が繁昌してゐた頃のステレッツは、今から思へばたしかに全盛時代であつたこいふ。亞米利加お花は何時でも小瀟洒した洋装で、一晩たりこも友禪メリンスの店着なごは着たこごなかつた。

捉むこごも出来ぬほごの房なす黒い髪を、毛唐の女優のやうに無難作にたばねて、大理石のやうな

艶のある顔にほんのり頬紅をちらして、大きな黒眼に何時でも愛嬌を湛へてゐる。涙の浮いてゐるやうな露ひのある眼である。

お花はアメリカから渡つて来た。七百弗鏝一文缺けてもいやだし、彼女は直接に女將に會つて交渉した。人を人とも思はぬ、齒切れのいゝ彼女の交渉は先づ女將たちの膽を奪つた。きかぬ氣の轉法な肌は客をこるにきまつてゐると思はれたが、七百弗聞いて躊躇してゐた。

お花は鼻梁の強い女であつた。まご／＼してゐる女將たちの顔へ啖でもはきかけさうに見えた。十番の女將はその氣象にほれてボンミ七百弗耳を揃へてお花の前に出した。

お花は次の晩からお初さんの家で見世を張つた。そのすつきりした江戸前式の小股のきれた様子は通る嫖客をして垂涎三尺せしめた。アメリカ仕込みの英語は水のやうに流暢であつた。

またつき出しの其の晩から、名ざしてあがる客が多かつた。瞬く間に廓切つての賣れつ妓になつた。青龍樹のコンモリに茂つたコンノート路を、さうかするに崩した島田の豊かな小鬢に夕風を孕ませながら散歩することもあつた。政廳の名ある官吏、駐屯所の將校、さては商館の店員、會ふほどの男は皆心も魂も見てゐる中に奪はれて、お花は敏腕であるに廓切つて人の噂に諷はれた。支那人でもアラブ人でも懐を見たお花はいつかな逃がしはしなかつた。お花に合つては相當に賣れてゐる妓でも道をよけて通した。

新嘉坡名物の競馬會、輝く寶石、極樂島の華麗な羽根に飾られたお花の姿は恰かも女王のやうに四邊を睥睨するやうに必らず特等席の最も目立つ場席を占めてゐた。

さうしてゐる中にも、お花にも末を契つた情人が出来た。お花は情人をアングルチャイニス學校へ入れてセツセシ學費を貢いでゐた。聽て借金を拂ふたお花は旦那から資金を得て抱への四五人も居る店を張つたのだつた。チツテ(印度人の高利貸)から借れるだけの借財をした。更に又支那人の富豪に身を任せて小綺麗な雜貨店を出したのだ。そして又チツテから借れるだけの借金をした。その金全部を入り揚げるのである。さう／＼富豪は愛想をつかす、チツテも怒り出す、人は見かけによらぬものお花さんも案外ダラシのない人だし、世間が後指をさす。今迄人の口の端にか、つただけ、かうした際にもやはり嘲笑の的になる。その中に情人も無事に學校を卒業したのである。

「さうも御世話になりました」言つて、昨日までの辰巳言葉に反して、色氣のないこゝを言つて廻つたお花の頭髮は一番の丸鬢に結はれて、水も滴るやうな赤い手柄がか、つてゐたといふ。

お花は情人に手をこつて日本に目出度く歸つたのだ。今も神戸に繁昌してゐる貿易商、お花はその主婦になつて、新嘉坡の花街から特つて歸つた十萬圓以上で榮華をしてゐる。

「お花さんほぎズバぬけてすつきりした妓は後にも先きにもありませんでしたよ。」言つて語る女將の横鬢にも白髪が二筋三筋目立つてゐる。

一四 ス マ ト ラ 行

一、馬來を後に

出發の鐘が急遽しく鳴り響く。支那の物賣はドヤ／＼と船を降り、棧橋を渡つてピナンの街の方へ歸つて行く。大きなバスケットを持つてゐるもの、トランクを持つてゐるもの等が賑かに高聲で話して行く。遠いので、話聲はよく解らないが、大方賣行のこゝでも話し合つて行くのであらう。そのバスケットの中には各國の酒類や果物が這入つて居る。あの大きなトランクの中には紅白に輝いてゐるルビーや、ダイヤモンドや、青く輝くやサファイアなどが這入つてゐる。ケーキを賣るもの、曹達水を賣るもの、牛乳を賣るもの等である。乗客に御世辭を言つては上手に賣つて行く。買はない人があれば二度でも三度でも通り縋りに聲をかけては強請つて行く。——そして出帆の鐘の音に共に皆引き上げて行くのだ。

棧橋に立つてゐる人が一齊にフエア、ウエルを叫んだ時には、私の乗つてゐる船は呻くやうな聲をあけてピナンの山々を驚かした。——打振る帽子や、手巾が小さくなれば、なつて行くほゞピナンの町々は次第に一時の中へ纏つて来る。ピナン丘の緑林は傾いた日射を浴びて燃え立つやうである。僅かの滞在ではあつたが、私の心持はこの街へ来た時はいくらか變つてゐた。入港した時は行く手に

あつたものを見詰めて来たのであつたが、別れて行く今、後にあるものを見返つて懐かしむ心持である。私はスマトラのブラワンまでのデツキバスを二盾七十仙で買ったのである。

太陽は西にかゝつて、夕風の風が靜かに海の波を揺り動かしてゐる。遙か彼方にケダ州、ペラ州なごの半島の山々が遠く霧んでゐる。黝んだ波斯藍色の山々が西に落つる陽の歩みにつれて、山の肌も薔薇色となり、紅色となり、急に赤熱に燃えて蒼靄めてしまふ。見返れば西の空には太陽はなかつた。南洋到る所で猩紅に染まつたものゝみを見馴れた眼にこの碧い水の色、かの蒼い山の色、ほの白い夕暮の色は落着いた心持を旅人に與へる。落着いた心持には思出が伴ふ。遂に滅入つてしまつて涙ぐましくなる。海の悲哀はかうしたものはあるまいか。

突然私の肩を叩くものがある。顧みるにそれは例のピナンの税關で會つた桃中軒何右衛門ミか言つた浪花節語りの夫婦である。夫は紋のついた羽織を着てゐるし、女は鳥渡葎皮のむけた、かゝる社會の女にしては割合に人ずれのしてゐない、おつこりした女であつた。帯の間に金鎖なごをちらつかせてゐた。

「たつた一晚の航海ですので、テツキにしました。」

「女は金鎖の手前、かう言はなければならぬと言つた風で言つてゐた。」

星がボツ／＼見え始める頃、瓜哇船員がやつて来て一盾でテツキ専用のベツトを賣つて行く。別

に疲れてもるなかつたけれど、かなり慌しい目を見たの、少し落付いて見たくもなつたので私も買ふ。浪花節夫婦並んで寝ることにした。浪花節語りは私に誇らしげにこんな話をした。

「半島さいふころは素敵に人氣の悪いころですね。それに比べりあボルネオ、爪哇ミ来た日にあ、すばらしいものですあ、全くお金が落ちてるまさあね。私達や、向ふで一箱たらす拵へて半島へ渡つたのですが、さうく二百兩ばかり喰ひ込んでしまひましたわい。」

その尾につれて噂も何がボルネオや爪哇は隣國の話でも始めるやうな通ぶつた口吻でべちやくちや喋り出した。初めて會つた第一の印象は馬鹿におつりしたい、お神さんだと思はせたのに、少し馴れ染めて遠慮がいなくなる、泥水育ちの浅ましいところを見せる。私の頭はもうお神さんご呼んでるなかつた。鼻、鼻で澤山だ。

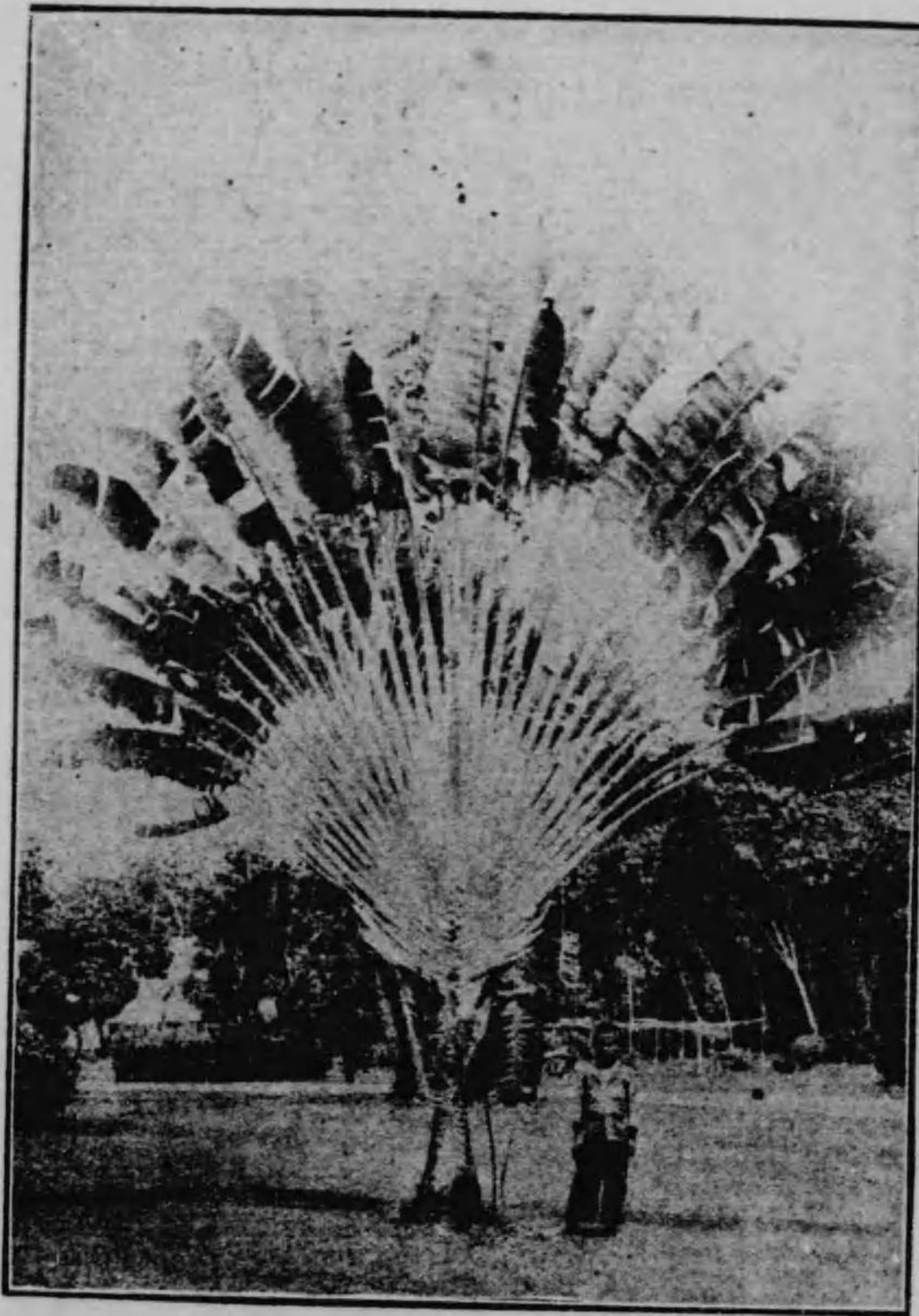
本氣になつて聞いてゐるのも馬鹿々々しいので、手廻りのものを盗まれてはと思つて仕末をして床へ這入つた。空に星が一つ流れた。

何時間寝たか知らない。隣の床にゲー、ゲーと言つてゐる聲で眼が覺めた。耳の傍で亂れたヴ井オロンの騒音を聞いてゐるやうだ。む、む、何程お隣の桃中軒何右衛門先生さうくお廣げあそばしたなあ。一箱の二本の大きなことを言つてゐるやがた癖に、その様あ何だ。俺の懐中にお鑑一文なくてもこれだ、これだ、ご胸を叩いて見る。

太平洋を幾万里渡つて来た海風を肺の奥まで吸ひ込んで、胸を叩いて見る。田舎あたりの温泉場の湯槽の中から這ひ出して、仰向けさま流し場に倒れて唄ふ気分である。そうして、私は胸を叩いて甘い心持に酔つてゐる中に、甘い心持が何時の間にか緊きしまつて、何とも言へない心持に變つて行つた。お、何とした静かな心持であらう。星は私を見て笑ひながら、天の詩を歌つてくれてゐる。波は私を見送つて地の讃歌をあけてくれてゐる。私の心は宇宙の外へ流れて出て行く。宇宙の心は私の心の中に凝り固まつて来る。私は宇宙の力を感じてベットの土へ立ち上つた。と同時に私の心は宇宙の中へ突通つて進んで行く——宇宙は我が心か、我が心が宇宙か。

俺は宿るべき家を持たない。その代り家を持つたもの、煩はしさが無い。慰さめてくれる妻を持たない。その代り妻を持つたもの、煩はしさが無い。——親もない、子もない、金銭もない、衣服もない——時には食ふに物もないことがある。この大海の眞只中、これが俺の家である。この大空の星辰こそは俺の妻である。日本——朝鮮——支那——ボルネオ——馬來半島それが現在の私の知情、意を生んだ母であり、親である。スマトラ——ビルマ——印度——アフリカ——歐羅巴——亞米利加——亞細亞——十萬哩踏破旅行——これが私の知情、意を未來につくる子であり、孫である。生命の續く限り、足の到る限り、馬來の食人種の住む山から、北極のエキスモアの居る濱まで、踏み破り、踏み破り、踏み破らなければならぬ。

朝の五時頃物凄く叩きをあけて船は灣内へ這入つて行つた。十月六日の朝、日が昇らんとする刹那であつた。海は遠浅でどころどころに目標や指標が浮鳥のやうに流れてゐて、一面に金砂を撒いたやうに輝いてゐた。朝霧は椰子の葉に縋つて眠り、漁船は黒い姿より眼覺めて朝霧を裂いて漂うてゐる。



蕉 芭 扇

遠くには長い棧橋が海を威壓して突き出してゐるかと思へば、港岸に並んでゐる白い倉庫の連りは磯波に戯れてゐる。

何とも言へない情趣である家をこり巻いて椰子が茂り、

椰子をこり巻いて家が並んでゐる。半島の積みの中に黒味を帯びた土の色に對して、この島のは黒味の中にや、積みを帯びてゐる。半島の椰子は枝葉を下にして茂つてゐるのが多いのに反して、島の椰子は枝葉を上にして廣つてゐるのが多い。即ち枝葉が扇に似てゐるので之を扇芭蕉といつてゐる。――それが船の中から見える。

朝霧は晴れる。太陽は昇る。船は進む。山々が見えて来る。闇が明るくなる。時間が進む。船は五時に着いたが、上陸は七時になつて許された。連れの男は桃中軒何右衛門氏である。税關を通る。バダヒヤ領事は二十五盾の見せ金が必要なき、言つてゐるたが、此處ではそんなものはいらない。唯黒い洋服を着た、素裸足の妙な風な印度巡査が署名を求め。浪花節は署名が出来ないので、私が代つてしてやる。

三弗出した浪花節のバス、ボートすらも檢閲しない。飄然と私は眞先にブラワンの停車場へ向つた。後から合乗の人々が来るやうであつた。

ニ、ブラワン港

ブラワンの停車場へ這入つて一二等待合室でウ井スキーを呻つてゐる。汽車が容易に出さうもない長閑なこゝ夥しい。メダンまで歩いて行かうか、それとも汽車にしようか感つてゐるたが、何しろ腹が出来てゐないので、土人の飲食店へ飛びこんで、種々なものを食つた。メダンまでは汽車でも一時間位だし、まごころして居る位、徒歩の方が早くなる位、街を一廻りして来ようと思つて出掛け

る。二百戸程の小さな町である。日本人は女郎屋二軒、珈琲屋二三軒ほゞしかない。汽車へ乗ることにして停車場へ来て見る。以前の汽車が矢張り停車したまゝでゐる。浪花節先生も二等一盾を奮發して威張つてゐる。私もシヤパンニイズの手前一盾を奮發する。

沿線に珈琲や椰子の栽培が多い。スマトラは半島の護謨に對して珈琲や椰子の栽培に適するのかなあと思はれる。併し後から人に聞けば、地味は椰子には不向であると言つてゐる。浪花節の鳴が獨りで何か喋言つてゐるのを蒼蠅がりながら、汽車はメダン市へ着く。

三、メダン市

停車場から後乗の馬車に乗る。日本人の宿屋へ案内しろと命ずる。一通り街内をひき歩いた上に、馬車を止めて分りませんミ馬來人の馭者が言ふ。政廳の時計臺が綠葉の間から見える。

馬車を降り棄て、自分で街中をぶらぶら歩いて見る。ホテルが一軒見當つたので、這入つて旅装を解いた。併し半島から行くさきくゞで紹介して貰つたが、新らしく來た島ではこの漂浪人には様子が見えない。日本人の家を訪ねる縁もない。テピンテンゲの竹下君の所へ落ち着いた上で、計畫を立てることにして竹下君に電話をかける。竹下君は幼少からの友達であつた。
「迎へにやらう。」

「それには及ばない、停車場へ出てくれ、ばい。」

かう言つて私は電話をきつた。其夜は外へは出なかつた。居處を定めず、昨日は東、今日は西と彷徨うて歩いてゐる身の卜を考へながら、スマトラの最初の一夜をホテルの床の中で泌々意味深く感ずるのであつた。

四、テピンテン

メダンの街からは鐵路三時間ほゞにある。附近の村々との間に行はれる購買市によつて出來た町である。人口千四百、支那人が大部分を占め、印度人は五分の一ほゞゐる。煙草、椰子の實、珈琲、チーク材を産する。日本人はこの町には六十人ほゞゐる。附近の椰子や護謨園に働いてゐる男や、洋妾を加へて二百名以上になる。床屋、ホテル、藥舗、珈琲店、雜貨商、女郎屋などを經營してゐる。

午前十一時頃テピンテンゲの停車場へ着いた。竹下君はこゝ見廻しても見當らないので、外へ出て馬來の後乗馬車に身を委す。椰子や檳榔樹やマンゴの深々茂つた並木路を通つて行く。土人の例のアダブ葺の家が並んでゐる。其の間に洋館もある。

汽車の中で山本齒科醫の書生に會つたので、竹下君の住所を知つてゐた。藥舗をしてゐる。十數年

以前に熊本を飛び出してこゝで薬舗を始めて以来、運が向いて来て、今では立派にやつてゐるさいふ。醫學の發達しない南洋は何處へ行つても醫師と薬舗とは非常に儲かるさ相場が極つてゐる。

竹下君は久しぶりの面會であつたので限なく喜んでくれる。取敢へず酒が出る。昔の話が出る。南洋の女の話が出る。濤波幾万里の外で舊知の席を共にするほゞ愉快を感じるものはない。友達は有難いものだと思ふ。

竹下君の紹介で長野雜貨商、アサヒ寫眞館を訪ねる。信用ある人の紹介だから、何處へ行つても丁重にされる。何處へ行つてもかういふ風だつたらミツク、と思ふ。

午後竹下君の所へ脊のすらつとした、襟足



圖 球 珈 近 附 ゲ ン テ ン ビ デ

の馬鹿に綺麗な美しい人が訊ねて来た。薄化粧なごも羽二重のお召合つて華美である。如何した人かと言へば、亞米利加人の妾で、麗子と言つてよく遊びに来るさいふ。時偶酒を飲みに来たり、花をひきに來たりするのだ。——三人で種々な話をする。美しい心の人である。

「外國はほんごうに面白う御座いますね。これで内地へ歸つたら鼻の先がつかへて、さても長くは居られますまい。」

こんなことを話して、彼女は歸つて行つた。それから私は二三の在留邦人を訪ねて来た。さうしてゐる中に種々な女の人が集まつて来た。濫皮のむけた美しい人ばかりである。スマトラへ行つて間もなくこんな有様を見たので、不思議でならない。やがて竹下君の妹のころへも電話をかける。私はよくその妹をも知つてゐた。「妹さんは如何してゐるのだ」ミ、竹下君に訊けば「うむ。」ミ唯鼻で笑つてゐる。妹は遂に來なかつた。

竹下君やTといふ人や女達が十二時近くまで花牌をひいてゐた。やがて私も加入した。當分竹下君の厄介になることにした。

三日目に再び私はメダンへ行つて見た。メダンの風俗や習慣なごも知つて置きたいと思つたからである。竹下君は、熊本の人で樋口といふ人に電話で紹介して置いてくれた。

五、再びメダンス市へ

樋口氏を訪ねた。樋口氏は人のい、如才のない人であつた。旅行談をしたり、旅行日記を讀んだりした。樋口氏の勸告で、こゝでも講演會をしては如何かと言つてくれたので、日本人協會長の横田氏と副會長の山崎氏を訪ねた。山崎氏は「先日浪花節が来たけれども、追ひ歸してしまつたから貴方もおやめになつては」このことであつた。俺を浪花節と同視してゐる。——むかつきましたが、黙つて其處を出た。

結局、横田氏、樋口氏の斡旋で講演會を開くことにして貰つた。

私の宿は幽蘭女史がかねて紹介狀を書いてくれたヤマトホテルといふのであつた。幽蘭の紹介狀は持つてゐながら出さずじまつた。永く滞留する譯でもなく、又一つは女の紹介でいふ負けず、魂も出たからである。其の晩は其處へこまつて方々の様子を觀て歩いた。

人口六万ほどのスマトラでの街である。日本人は二百人餘り居る。女郎屋も五六軒あるが、こゝは半島と違つて馬來の美人を圍つて商賣をさせて居る。和蘭政府は日本人の女郎には絶対に鑑札を下さない。新しく女郎屋をしようとしても鑑札を下さない。それで馬來女を圍つて一泊いくらいふ宿泊料をこつてやつてゐるのである。それでこゝへ來る女は大抵洋妾になつて好きなことをしてゐるのである。

るのである。

翌日午前中に横田會長が來て、今日の講演に就いて種々な打合せをした後で、メダン政廳に走つて私の爲に内地旅行證明書をこつて來てくれたりした。

講演はかなりの成功であつた。謝金として五十盾貰つた。

スマトラ、特にこのメダンからピンゼーあたりに限つて、賤業婦を根底にした商業が行はれてゐる。いふ忌はしい話を聞いた。スマトラでも土地豊饒な所に働いてゐる在留邦人にはそんなことはあるまいが、此の附近の在留邦人の多分の者は其處に經營されてゐる白人相手に、又はそれらに苦使されてゐる支那、馬來の苦力を相手に生計を立て、ゐるものが大部分である。別言せばチャニコロと黒奴相手の女郎と、所謂「旦那持ち」言はれてゐる外人の婢妾によつて生計を立て、ゐる。極言せば異境万里の外に身を放縱に持ち崩してゐる白人や女の血の血までも啜らうとする支那人の外妾となつて漸く食つて行く日本婦人を食ひ物として生計をしてゐるのである。

メダンはスマトラ嶋にこつても最も勢力のある町である。世界一と言はれてゐる州内の煙草栽培地に散在してゐる日本婦人は今日は七百の以上も居る。

それらの贅澤に暮らしてゐる日本婦人のみ相手にしても勿論堂々暖簾をかけて行くことが出来るのを、何を苦しんでか、不徳義なことをするのであらう。メダンの田舎に居る「旦那持ち」が月に

二三回はトワンに代つてその月給の大部分を持つて町へ買物に出て来る。食料日用品は勿論のこと、着物地や、バラソルや、帯やなご、いふ身の廻りのものを買つて行く。金で積れば大したものである。旦那から貰ふ金は月々三十盾乃至五十盾でも、元來が彼女等は金に慾目のある人間である。買物の上前を切つて着服するは知れたことである。零細な小使までを仕末して汲々貯蓄してゐる。そうして、その金は家に置けば「旦那」に嗅ぎつけられるので、殆ど全部馴染の商店に預けて置く。何のことはない、メダンの商人は「旦那持ち」が主客で、同時に無利息の金を貸す資金家なのである。それまでは何でもないにしてもそれ以上のことをやる悪辣さに至つては恕し難いものがある。それは彼女等のかくの如き金を巻き上げようとする策を講ずることである。それは店員で一才ハイカラで六百券といふ長崎あたりに流行する賭博の上手なものを置くことである。ハイカラに賭博によつて彼女等の臍線金を巻き上げやうとする。此の地方には家族は二三人でも五つも六つもの床を持つてゐるのはかゝる理由からである。

メダン在留の邦人の中でも相當の財産を蓄へてゐる某、某の如きはかうして産を増したといふ噂である。日本の洋妾はハイカラな店員が途中で會つたとする。彼等は長崎言葉でかう會話する。こゝへ来るよ、東京言葉が日本國內で幅をきかしてゐるよ同じい意味で、長崎、島原の言葉が幅を利かすこと夥しい。店員は先づかう言つて切り出す。

「お家あいで行くよへ。」

女はかう言つて返事をする。

「自分へ？活動へ行くよへ。」

「自分もつれて行かんよへ。」

「來んよへ。」

かう言つて晝の晝中でも二人で連れ立つて活動寫眞を覗きに行く。歸りには酒を飲んでホテルへでも繰り込む。これを見ても主人は何も言はない。自ら省れば思ひ當るからである。今はさういふ風習もいくらか少くなつたといふ。

一時スマトラの「女護の島」にいふ言葉が内地へまでも這入つて來たことを記憶する。それはかうであつた。

定期船が明日來るこいふ日、スマトラ附近の「旦那持ち」が若いのも、年老つたのも、華美な着物を着込んで、今日を晴化粧してメダンへ出て來る。就中金目のかつた風をしたのや、美しい女が多い。それが埠頭に集まつて定期船から降りて來る日本の男を鵜の目鷹の目で見ている。顔を見詰める。風を見詰める。さうして何か囁き合ふ。それは年上ものから年輩に合つた男に入札を始めるのである。二百盾三百盾五百盾——最も高入札のものが落札きまつて男を買ふことになるのである。中に

は一晚三十盾五十盾といふのすらある。以前はスマトラへ来る男はそれを當にして来たほごであるから、妥協はすぐ出来る。南洋は男も金儲に出稼ぐのが多いところであるから、ほんご投げ出された山吹色を見れば、蝙蝠安ではないけれど、すぐに手を出したくなる。それこそ資本いらすの金儲といふものである。

講演會も終つたので三日目にまたテレビンテングへ歸つて来て、竹下君の所へ宿る。

一五 流星光底に猛虎を逸す

確か十月十四日であつたと思ふ。朝早く竹下君が獵銃を一挺持つて歸つて来た。

「鳥井君、これから虎狩りに行かう。君も一緒に駆け。」

「面白い。行かう。」

さうしてゐる内に當地のキャブテン、チャイナの息子の王師珍君が家に使つてゐる支那人で獵に馴れた男十人、獵犬六尾連れて来る。王師珍君の顔にも竹下君の顔にも躍り上るやうな元氣が充ちてゐる。支那人も逞ましい顔をにこ〜と崩して、今日の快舉を喜んでゐる。獵犬は断えず其處いらを尾を振つて飛び歩いてゐる。誰も彼も愉悅の情の止むに止まれぬ色を見せてゐる。

二日の豫定の食料や、酒の用意も出来て、いよく出立つことになつた。王師珍君は獵に餘程馴れた人で、一隊のリーダーである。獵銃が三挺揃つてゐる。勇み勇んで町の裏から後の林の中へ別け入つて行く。見る人毎にこの壯舉を囁き合ふのであつた。

「トアン、うまくやつて来て下さい。」かう聲をかけて行き過ぎて行く馬來人もあつた。

林が次第に深くなつて行く。獨りで深林横断をする時は林の深くなるほご無氣味さが増したが、今日は同行十二人も居るし、手には得物がある。獵犬も居る。ボルネオの密林の中で迷つて膽を寒くした俺も今日は大威張りである。益々山が深くなる。途中で支那人の部落を通る。鐵道線路を通る。椰子園を通る。も早や七八哩も登攀して来た。人を壓迫するやうに林が蔽つかぶさつてゐる。午前十時頃一軒の土人の家へ着いた。豫ねて顔見知りの家を見て、土人は喜んで迎える。今夜お前の家へ止宿してくれよ、竹下君が交渉してゐる。皆は充分に身を繕ひ水筒に水を入れて、其處を出る。銃を二挺餘分に貸り受ける。

殆ど道の無い足も入れられないほごの雜草の中を辿り辿つて行く。支那人の勢子がかういふ路になれてゐるので、誠に輕々上手に歩くが、私達はまだ素人臭いところがある。さもするさ、前を急ぐ。その爲に直ぐ疲れてしまふ。大きな樹が其處にも此處にも林立してゐる。土人の家からはもう二哩半ばかり進む。見るさ、密林の行手の左方に當つて百米突以上の絶壁が峙つてゐる。上には雜草が一面に生えてゐる。其下は數十尺の谷で、彎曲である。密林が折れて谷の中へ落ちこんでゐる。足

キャン、キャン、キャン、クワン、クワン、オーイ、オーイ、オーイ。

その聲が細く長く響く。その聲の外には全山には何も聞えない。蛇の這ひ出る音すら聞えさうだ。緊張の極度に達してゐる。虎が出るか、獅子が出るか、野牛が出るか解らない。——と思ふに、銃を持つてゐる空もない。深い穴の中へ落ちこむ時、「今落ちる、今落ちる」意識しながら落ち込む心持である。得體の知れない恐怖、それが全身を支配してゐる。虎や獅子は敵意を示さなければ、餘程飢ゑてゐなければ、人を見ても大氣しく逃げて行くものである。併し今の場合はまるで場合が違ふ。敵意を示してゐるからである。人が敵意を示す時、彼等は猛然に人を襲ふ。大低の場合襟髪にかみつく。延髄をかむのである。虎にも獅子にもまだいくらか可愛い所がある。人を恐怖れるからである。これに反して、野牛は来たら見除しこはない。猛然とやつて来る。二本の角を厳しく磨いて、鬣をバツミ逆立て、爛々目眼を怒りて飛びつく。彼は虎、獅子のやうに噛みつかない代りに、彼の鋭い角で以て宙を見かけてはね上げる。五度——十度——二十度角ではね飛ばす。脳は碎ける。骨は折れる。内臓は四散する。人の身體がくちやくくに毀れるに、初めて食ひ始める。人を見たら、大低の場合其のまゝのがさない。——彼奴が恐怖しい。さう思ふに、私の眼の前にその襲はれる姿すら見えてくる。——かうなるに、生命がほしい。

突き裂くやうな鋭い犬の啼き聲、叩きつけるやうな鈍い人の呼び聲。それが獲物を——こいふより

も猛獸を俺に近よらしてゐるのだ。

後の方にガサツ草の音がする。それと思ふに、何にも見えない。突き裂くやうな聲、叩きつけるやうな聲。それをつきさしてウ、ウ、ウと呻る聲、將しく虎だ。獅子だ、いや、野牛かもしれない、私の心臓は急に亂れて来る。

ウ、ウ、ウ、キャン、キャン、キャン、突如そのキャン、キャンがワウ、ワウ、ワウと一齊に整つて来る。それはかねて獲物を見つけた時の犬の啼き聲である。ウ、ウ、ウと出た。野猪だ。ズドン火蓋を切つた。が手答えがない。竹下君は打ち損じたのだ。それ。こいふので、三本の銃が獲物を睨む。

——突然勢子の一人が銃のさきに現はれた。打つた。駄目だ。さうさう打洩してしまつた。

こ、自分の左方に當つて今一頭の野猪が現はれた。再び三人の銃先を向ける。と同時に左方に當つてズドン。確かに打ちこめたのだ。打ちこめた勢子は走つて来る。三人も寄り集まる。もんざり打つて荒れ狂つてゐる。勢子は今一發首元に打つて息の根を止めた。さうしてゐる中に勢子が野猪を中心にして集まる。打ちこめた勢子の顔には勝利者の誇が見える。オート言つて、皆歡呼をあげる。二人の勢子に持ち上げさせて見る。漸くあがる。四百五十斤は確かにある。第二回はかくして終つたのである。二人の勢子に荷はせて以前の土人の家へ届けさせる。後は一切り獲物についての噂で持ちきりである。打ちこめた勢子は噂の中心になつてゐた。

第三回の狩場を探す。その中に腹は空く。水筒には水もない。誰云ふもなく椰子の實、椰子の實といふ。いきなり二三人が椰子の樹に登る。蕃刀で叩き落す。大きな實がいくつもいくつも落ちる。下の男は蕃刀で外殻を破つて行く。中には美味さうな汁み實が一杯に詰まつてゐる。飢ゑたものに、湯いたものにはそれはみんな美味かつたであらう。アダムミイヴがエデンの園で喰つた智慧の樹の實よりは劣つてゐるは誰か言ひ得やう。樂園を神のために追はれてもかまはない。もう一度喰べて見たいと思ふ。其處で三十分ほゞ休んだ。一行はまた新しい獲物について語り始めるのであつた。この人達の口からは不斷ならば寝てゐる子供でも脅えて飛び上るやうな言葉が断えず繰り返されてゐた。曰く、虎。曰く、象。曰く、獅子。

野猪を打止めた男は昔自分の撃つた虎の話をしたり、また子供の折り親爺に連れられて狩りした話をしたりしてくれる。野牛を一發の下に打ち止めた話などは思はず一同をして快哉を叫ばしめた。成程この勢子は一行中では最も巧な射手らしかつた。獸の居る山へ這入るに、匂ひで解る言つた。それが雨さへ降らなければ四五日以前に通つた後でも嗅ぎ別ける言ひが出来る言ひも言つた。もう先天的に狩に對する一種の可能性を持つてゐた。野獸に近いこの勢子でも用ふる言ひによつて役立つ。人は各々其の天職を異にするものである。佛教徒やトルストイアンに言はすれば、それは善なる言ひに役立つてゐるのではない。惡に役立つものである。惡に役立つものには道德性は帯びない言ひか

しれない。何故かなれば生あるものを殺す言ひは悪い言ひだからである言ひ。併し季節によつて、食に乏しい彼等には道德、非道德を考へる前に、必要言ひ言ひを感じるのである。地球上のかゝる種族にまで行き渡り得る菜食料が供給される言ひ言ひが證明されて始めて、善、惡言ひ言ひ價值判断がされるのが順序である。——道德の標準、價值判断の意識は文化の程度によつて上下する。三十分の休憩時間の中にこんな言ひも考へて見る。併し彼等の言ひ言ひ意味は、私の意味とは異つてゐるのに氣着いて論理を追ふ頭は再び虎や野猪を追ふ言ひ變つてゐた。

第三回第四回も見事な失敗に終つた。さうして全山にはもう夜氣が襲つて來てゐた。夜の猛獸狩は危険が多くて効果が少ないので、足元の見える中に歸途を急いだ。午後六時頃であつたと思ふ。一同の頭には獲物に對する食欲が動いてゐたほゞ飢ゑてゐた。ほのかに青白く林を通して落ちてゐる夕陽を拾ひ拾ひ以前の土人の小屋へ歸つて來た。二人はもう腹を割つて内臓を出し、腹の中から肉を引き出して居る所であつた。外見をその儘にして家の土産にし、内部から肉を切り取る言ひ言ひの算段であつたからだ。

かなりの肉が用意したフライパンで焼かれた。支那料理にして食ふのである。油の燃える匂ひ、肉の焼ける音、それを肴にして一同はもうウ井スキーを飲み始めてゐた。料理は出來上る。酒は快よく全身に廻る。——生きてゐてよかつたと思ふ。

第二日の太陽は赤く靜かに密林の彼方に燃え上る頃、一行は再び山深くへ這入つて行つた。今日は是非とも虎を撃ちこめなければならぬといふ強い決心で。三十哩ほぎ、深林を別け這入つた。午前四時に土人小屋を出發して十一時に着いたのである。

密林の間に幅十餘間の河が流れてゐた。水が濁つて、鱒魚を住はせてゐた。時偶下流に水面へ頭をあけてゐるのを勢子が指さして見せたりした。一行は怖づ怖づ丸木橋を渡つた。下には鱒魚がゐることは知れてゐるから。その危げな丸木橋は一人の重量をも充分に堪えるだけの力がなかつたら。こゝ、突如、行手にあたつて異様な物音をきいた。椰子の密林の間を通つて響いて來る音は海鳴りのやうに途切れ、途切れて來た。

一行の一人はその物音に脅えて、あぶなく横から落ちる所であつた。物音はなほ續いて居る。一行は立止まつて耳敏だてゝゐる。

「旦那、虎だ、虎だ。」と獵になれた勢子が言つた。

「虎か、虎か。」と人々の心は反響した。湧躍の心が再び全身を突き走つた。

「椰子の密林にはよく虎が出て來るものです。」と勢子の一人は言ふ。

裝彈がせられた。勢子は左右二手に別れた。虎に備へるには單獨行動はむづかしい。犬も二手に別れた。すべての準備は出來上つた。王君はリーダーダとして隊を指揮した。

ウ、ウといふ呻き聲が聞えるやうでもあり、聞えぬやうでもあつた。かういふ場合大低聲を潜めるのが常であるので、別に怪しみもしなかつた。併し、少し高聲になつて話し過ぎたといふ後悔の念は誰の心にもあつた。

左翼と右翼の獵犬は啼き出した。勢子も呼び聲を高めた。そして獵犬の叫びは次第に變つて行つた。それ、虎だといふ自覺は撃手三人の眉宇の間に動いた。指はもう引金にかけられてゐる。

草の中に小動物の逃げる音がする。そんなものは意にかけるほぎのものでない。虎、虎、唯一の標的は虎であるのだ。

ウフ、ウフと叫ぶ聲が聞える。それ身近くへ寄つて來たぞと、思ふ利那、十四五間向ふに一頭の異様のものが現はれた。先づ王君が打ち出した。一發の



眠れぬ虎

下にもんざり打つて仆れた。又見がまへてゐる。第二、第三の獲物を撃ちこる心構へである。勢子の聲は早まつた。犬の聲は平常に復した。おやと思つてゐる中に、出た。出た。……一人の勢子が、見れば犬が傍に尾を振つて跟いて来る。續いて一人來た。

「虎はさうした。」

「居りません。」

「何如してだ。」

「聲が高くて逃げられたのです。」

「畜生。太い奴だ。」

「怒つて見たところで仕方があるまい。」

「虎も命は欲しいからなあハアハアハア。」

「ハア、ハア、ハア。併し打つた奴は何だらう。」

「ム、これさ。」

矢庭に王君が一尾のヤマアラシを出す。皆は驚いて見るに、大きな丸々肥つた奴だ。針を真直に立てふくれてゐる。

「ひびくふくれてゐるやがらあ。」

「丸で君の顔のやうだ。」

「悪く洒落るなあ。」

「ハア、ハア、ハア。」

二回目の狩場を探してゐる中に野猪を打つた勢子は「旦那。虎です、虎です。」と後から叫ぶ。「この足跡は確かに虎です。二三日前に通つたものに違ひないです。」とかう言つて、しきりに足跡に鼻を當てゐる。鳴がするのである。「それ。」と號令はかけられた。勢子は一手に別れた。山攻めが始まつた。私の心にも虎、虎といふ言葉が餘りに多く繰り返されるので、虎といふ動物がもつ恐怖の概念も餘程うすくなつた。そして「今度こそは撃ちこらなければならぬ」「こいふ考へすら起つて來た。何故なれば、もはや陽は餘程傾いたらしく、木の葉に照る秋の日は何もなく弱々しく感ぜられたからである。日程は今一兩度の襲撃で終るからである。——氣が付かなかつたが、脚下から雨のやうな虫の聲がする。大陸の深林の中に聞くこの虫の音ほご物淋しいものはない。キャン、キャン、キャン、オーウ、オーウ、オーウといふ叫聲の中で、私は虫の音をはつきり聞き別けてゐる。ホロ、ホロ、ホロ、ホロ、ホロといふ音をはつきり聞き別けてゐる。あゝ。ホロ、ホロ、ホロ、ホロ、ホロといふ聲の調子に何ともいへぬ悲哀がある。山鳥のホロ、ホロもなくの涙を催した故人もあれば、南國の深林の中に血腥い遊びをして極度に神経を刺戟した後に、靜かに涙する旅人も居る。極端な神経の刺戟は、極度の靜けさを導く

ものご見える。

「おい、何してゐるのだい、泣いてゐるぢやないか。見つこもねえから止せ。」

「見も知らねい男ごかうして同じい心持で一日でも二日でも暮せるごいふごが不思議でならないのだ。もしも彼等が人種的の偏見から、或は個人の利益から、俺達を殺さうと思へば、何時だつて殺せるのサ。こゝは警察権の及ばない無人の境だもの。それだのにお互に信じ合ひ、助け合つて一つのこごをするごいふのは俺には何だか不思議でならないのサ。縁ごいふごを思ふご、俺あ涙がこぼれるよ。」

「まあよせ、そんな話は虎狩りの最中にしなくてもいゝぢやないか。おい、虎が来るぜ。」

「言つて持場についた。あゝこの支那人の心——その美しい心をも知らないで、チャンコロ奴が言つて侮つたごを悔ゆる。人間はお互に愛し合つたらごんなに美しいものであらう……然るに俺は今残虐な心持になつて動物を狩つてゐる。突然、竹下君が聲をかける。

「おい、鳥井君、歸らうよ。」

「何、何にも居なかつたのか。」

「ゐない。君は間拔けた顔をしてゐるから皆逃けてしまつたよ。」

「さうか。」

逃がしてよかつたご思ふ。俺の心持はあの時ほご嚴肅に輝いたごはない。また深い林中を、夕暮の光りの中を歩き出した。後では勢子の勇ましい談聲が聞える。私は頭を垂れて歩いて居た。

「おい、大層つかれたやうな顔をしてゐるなあ、一杯やれ。そうしてもう一勢子張らう。」

「こ、竹下君が私にウスキーをさしつけた。けれども、一口も飲まなかつた。私は靜かに彼等の足跡を拾つて歩いてゐた。森の彼方には何鳥かしら急遽しく飛び立つて行く。

一勢子張つたらしかつた。併し何の獲物もないやうであつた。私はしめじめした日の目のあたらしい草の中に腰を下して、彼等のするごを睨み見詰めてゐた。心持は常に平らかで、私は一つごをのみ考へてゐた。喧騒の中に寂寞を感じるほご淋しいものはない。

「人を愛するごいふごはむづかしいごである。——」

また同勢は歩き出す。もう出發の時のやうな緊張した様子は見られなかつた。ダラリミ手をさけて他人のものゝやうに強ばる足を引きずりゝ歩いて行く。

「重いね。」「重いなあ。」かう云つて支那語で話して行く二人の男に初めて心着いて、

「それを捕つたのですか。」

「こ竹下君を見てかう聞く。」

「馬鹿言ひ給へ。最初にこつたヤマアラシぢやないか。」

「そうでしたのね。」

私はほやけた聲でかう言ひながら足元を拾つて進んで行く。

支那人の話をきけば、第三回目的狩りも旨く運ばなかつたらしい。王君は途中から怒り出して止めてしまつたと言ふ。一行は小さな川の上にかゝつてゐる丸木橋を渡つてゐた。

「……突然。ズドン……。その後につれて誰かの叫び聲が聞えたやうであつた。」

ズドーン。山彦は静かに木魂して来る。ヤマアラシを擔いでゐた二人の姿が見えない。おや、打殺されたなあ。私はやつぱりほやけた顔である。

「おい、鳥井君。俺あ人を殺したよ。」

「如何してだ。」

「實あ鐵砲に彈丸をこめてあるのを知らなかつた。それが今しがた草の根に引きかゝつて打離したのだ。」

見れば二人の支那人もゐなければ、かういふ時には飛んで来る王君も見えない。王君はなかく子供らしいところのある男だ。

「旦那、手をかして下さい。」

谷川の中に二人の支那人がヤマアラシを擔いだまゝ落ちてゐる。身體は泥まみれである。

「おい、さうした。上れ。」さかう言つて私は手をかしてやる。王君は向ふに腰をぬかしてゐる。支那人が上に這ひ上る。王君の腰も立つ。一行は以前の土人の小屋から撃ちこつた野猪を擔いて家路へ急ぐのである。

陽は西に落ちて、南海を吹き渡る風が黒い野原を吹いて過ぎる。勢子の話聲も次第に更けて行く。

黒い鳥が何處へともなく飛び立つて行く。――

一六 スマトラ 順禮

一、ジンバンテガ

狩の話しながら長野、佃なごいふ人々々々例の野猪の肉で一杯やつてゐるに、其處へ福地といふ人が来た。見れば夫婦連れである。奥さんは別嬪である。シャンタルからわざ／＼ジンバンテガの水浴場へ海水を浴びに行かうといふのである。一杯機嫌で元氣がいゝ。四十五哩を自動車で飛ばす。思つたよりいゝ景色である。椰子の下蔭は白い砂である。それが一面に續く。青松といふ感じよりも椰子といふ感じは海岸には美しい。松の下蔭は馬鹿に闇い。磯馴松の海岸は陰氣ものはない。それに比ぶれば、椰子は下枝といつてもかなり高い。白砂は一目に打續いてゐる。雲は漠々浮んでゐる。黒い膚の印度人や、馬來人や、黄色い膚の支那人も泳いでゐる。此處では十月の中頃でも泳がれるの

は何より嬉しい。私は泳ぎも相當にやれる。

歸途洋人のやつてゐるホテルへ這入る。何にも食はないのに莫大な金をほられる。日本の正直な珈琲屋や、旅館が儲かる筈だと思ふ。途中で自動車が行先を止めたので、附近にある福地の妻君の家へ宿泊する。その翌朝デビテンダの竹下君の家へ歸つて来る。

竹下君の所では前後かなり厄介になつてゐた。その中の一日私はこの町で講演會を催して大層歓迎された。報酬も五十六盾ほぎ貰つた。その一日であつた。襟足の美しいすき通るやうな顔をしてゐる麗子さんがまた竹下君の所へやつて来た。

「麗子さん、貴方は大層此の頃やつれたぢやありませんか。」

「え……。」かう言つて彼女は黙つて俯向いてゐた。此の時傍にゐた竹下君は私にその問題についてあまり附込んではいけないと言つた風な眼付をして睨めた。私も口を噤んでしまつた。麗子さんも口を噤んでしまつた。そうして間もなく歸つて行つた。竹下君が目で知らせた事情といふのはかうしたことであつた。

麗子さんは東京で生まれた。まだ幼い頃から繼母にかゝつて種々な苦勞を嘗めた。繼母には男の兒があつた。彼女は繼母から目の上の瘤さして取り扱はれた。養女にやるこいふのを傳へ聞いた誘拐者は彼女の容貌を見て喜んだ。誘拐者はまだ幼かつた彼女の未來に希望を置いて貰ひ受けた。彼女は南

洋へ賣り飛ばされた。その頃は男親もなかつた。

今の亞米利加人は十五六からの親しみであつた。亞米利加人は其の頃は二十五六の青年で醫學を勉強してゐた。彼女は其後、こいふ青年に親しむ機會を得た。も彼女が一生を共にしたいと思つた

Mは南洋の護謨園をそれからそれと渡り歩く小商人であつた。二十九になつた今日、そのこいふ男がスマトラへ歸つてゐるを聞いて、生來日本の男に接したこいふのない彼女の心は再び燃え始めた。彼女はこの四五日來なかつたのはメダンに行つて彼と同棲してゐたのであつた。

亞米利加人もメダンへ出て彼女の行方を探した。そして以前の男と一緒に暮してゐるこいふことを聞いて、その宿を訪ねた。女は平然としてゐるが、男は氣が氣でなかつた。

「私、もう二年で亞米利加へ歸る。あなたつれて行かうとは思はない。もう二年この人と一緒にゐるやめて下され。そして私、前々まほりになつて下され。」

彼は麗子の前に平身低頭してひたすら家へ歸ることを願つた。麗子はかくしてこの醫師のために家へ戻された。竹下君の家を訪ねたのはそれから二三日後であつたのだ。

「あれのレコが来てね。今し方まで私の家で話して行つた。麗子さん、あなたは大理石の塑像のやうですね。黙つてゐないで、何か言つて下さいね。」かう言つて亞米利加人は女の前で泣いたさうだよ。女は相變らず黙つて大理石の像のやうにしてゐるさうだ。女も可愛さうだが、男も可愛さうだね。」

「さかう竹下君は話の後に付けて物語る。私は今し方まで燥いで話して行つた魔子を想ひ出して、それはあまりにかけ離れた感じのするのに驚かない譯には行かなかつた。——魔子は飽くまで優しい美しい女である。——今もさう思つてゐる。」

その翌日私は暇をつけてタンヂヨンバレへ向けて立つて行つた。出發に際して私は竹下君に訊いた。いこもあつた。それは彼の美しい妹のこゝであつた。

「おい竹下君、俺あ何にも言はないから、シスターをこり戻してくれ。聞けば身體も弱いさいふぢやないか。取戻して日本へ歸してやつてくれ。日本の空氣はシスターには健康を恢復するに充分であると思ふ。」

私は泣いて彼に諒めるこころがあつた。彼も泣いてゐた。然し近頃聞けばまだその儘にして置いてゐるさ言ふ。竹下君も随分物の解らない男である。あの青褪めた顔をして、何時でも涙の浮んでゐるやうな眼を思ひ出すと、今でも胸が迫る。

ニ. タンチヨンバレ(アサハン)港

かなり大きな河の三角洲の上に立つた椰子の森の中に圍まれた町である。町へ這入る時の印象が馬鹿にいゝ。長い橋が河の上にかゝつて、三角の帆を張つた小廻り船や、支那人の乗る荷物船や、土人

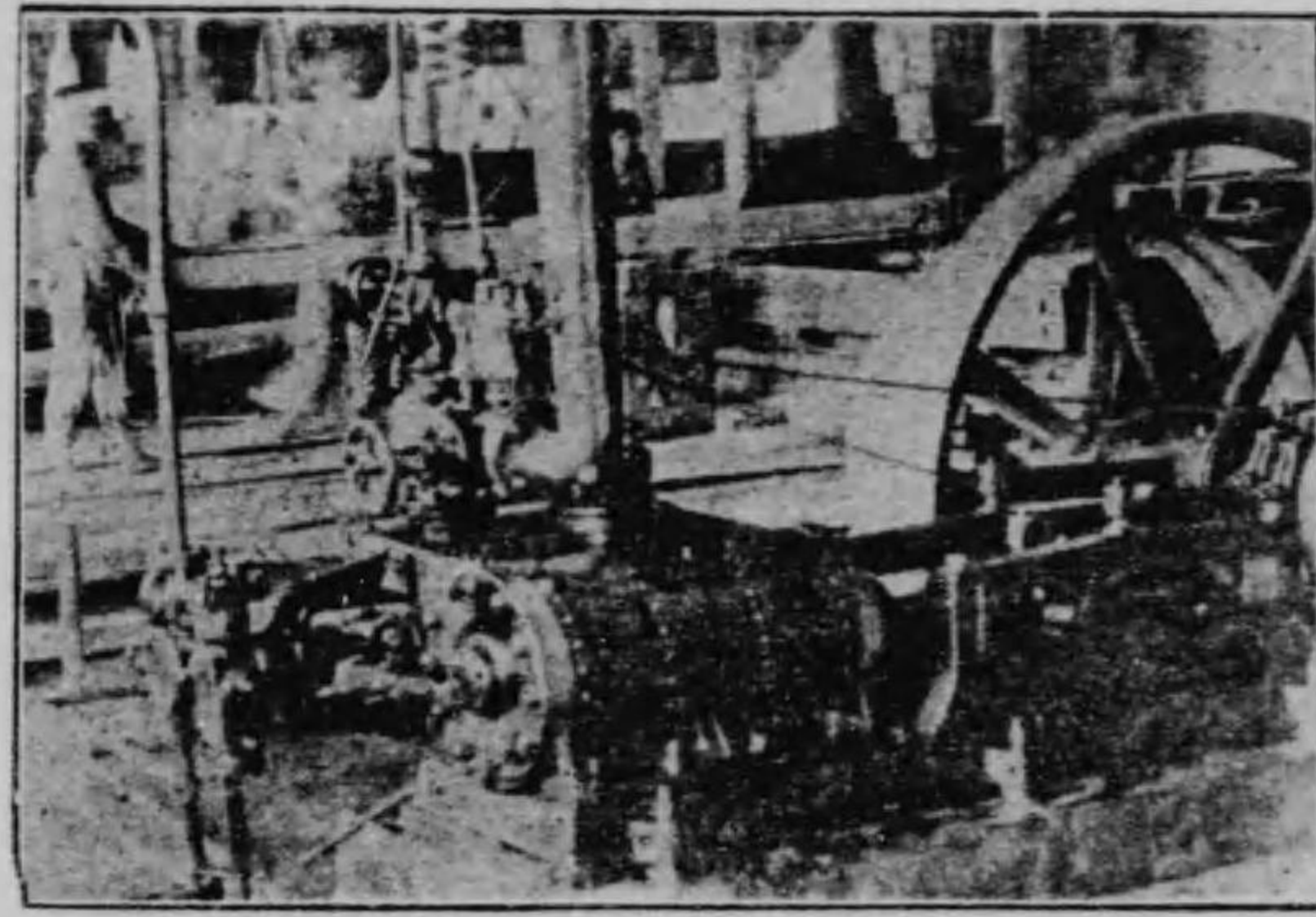
の乗る丸木舟などが上り下りする。對岸一帯には緒い土の三角洲が眼も遙かにのびて、土人のアダツブ葺の家や、商店の白堊の上に嚴然とサルタンの王宮が聳え立つてゐる。宛然大臣小臣を麾下に統御してゐる様な趣である。今しもその王宮の上に夕陽が映えて、美しさは譬へやうがない。川の上には夕陽の名残さもいふべき漣が流れてゐる。

竹下君の紹介で彼の第二支店薬舗を訪ふ。喜んで迎へてくれた。それから間もなく、山十雜貨商を訪問した。山上氏は一時自働車の運轉手までやつた勤勉な精力家である。土地でも有力者の一人である。山田さいふ藥舗主にも會つた。氏はこの頃製材所を起したりして三百五十盾の月給を與えてゐる職工長まで置いてやつてゐる。月々二萬五千盾乃至三萬盾ほどの製産をあげてゐる。其頃十四五萬圓の資金で電氣事業を起して活動するさいふ話であつた。近頃聞けば歸朝の途、香港海中で死んださうである。惜しい人であつたと思ふ。

天野さいふ柔道二段に會つた。「何處へ行きますか」訊くに、「活動へ行く」に答へる。二人で連れ立つて出蒐ける。半島以來初めての活動寫眞見物である。歸途アサハシホテルへ寄つて一盞を傾ける。席に和蘭人で護謨園のマネイヂヤをしてゐる人なごもゐる。

「君は面白い男です。歸途是非私の護謨園を見て下さい。」
彼等はかう言つて別れた。人懐こい、いゝ人である。

歸途いゝ月が出てゐた。満潮の水が街の通を溢れてゐた。
翌日購買市を見に行つた。山奥から出て来るバタ族が物々交換をして行くのである。太古の民族のやうな、その様を見てゐるに、私の心は素朴な時代を慕ふ羨みで一杯になる。以前は異人種を見るに、



山田氏の製材所

恐怖のあまり敵對行動を執つたものである。それがムハメツト教や、クリスト教の感化で異人種も決して恐怖すべきものではないといふことを知つたのである。人を食ふと言はれる彼等の仲へ這入つて布教するのは容易なこゝではなかつたであらう。「左手にコーランを持ち、右手に劍を握る」ムハメツト教僧にして始めよく出来るこゝろである。「人若し爾の左の頬を打たば右の頬をも彼に向くべし、上着をさらば下着をも與ふべし」クリスト教の宣教師にして始めてよく出来るこゝろである。布施の多寡によつて功德を二三にする日本の僧侶なきは反省一番して可なりである。

マレーの一人の青年に會つた。

「英吉利が強いが、獨逸が強いですか。」

「獨逸も強いですね。」

「おゝ、さうですか。」

と言つて嬉しさうな顔つきをしてゐた。ムハメツトといふ同じ教祖を戴いてゐる彼等は土耳其に對しても好感情をもつてゐる。その土耳其聯合して戦つてゐる獨逸に對しても好感情をもつてゐる。試に彼に訊いて見た。

「日本は強いと思ふか。」

「強い。一等強い。」

「英吉利はさうだ。」

「おゝ、ゴ、へール惡魔奴失せてゐるさういふ意。」

英吉利は殖民地に於てかなりの人望を落してゐるのも事實である。こゝは河流によつて上流より運搬せらるゝ貨物の駐屯所である。椰子、珈琲、煙草、藤、護謨、之等の物資は對岸の馬拉加港へ買



バタ族の購買市

易せられる。

日本人は四十餘人ゐる。女郎屋は三軒ある。殊に奇観はこの水道により運ばれた水は七十度あまりのホットウォーターである。



食人種(バタバ)

其の翌日アサランへ向けて立つ。アサランには例の和蘭人經營の護謨園がある。規模は大きなもので、三十萬盾の資金でやつてゐる。アサランホテルで會つたマネイヂャは大層喜んで迎へてくれた。歡待到れり盡せりである。其の夜其處に宿めて貰つた。

日本人の店は寫眞屋、珈琲屋、女郎屋、戌申商會などである。

三 シヤンタル

アサランを出發つたのはお午少し前であつた。シヤンタルへは夜八時頃に着いた。竹下君の第一支店である福地君を訪ね、旁附近の護謨園を視察しに行く目的であつた。福地君の奥さんは海水浴へ行つた日から未だ歸つて來なかつた。福地君は手鍋をさけて飯を炊いたり、購買市へ野菜を買ひに行つ

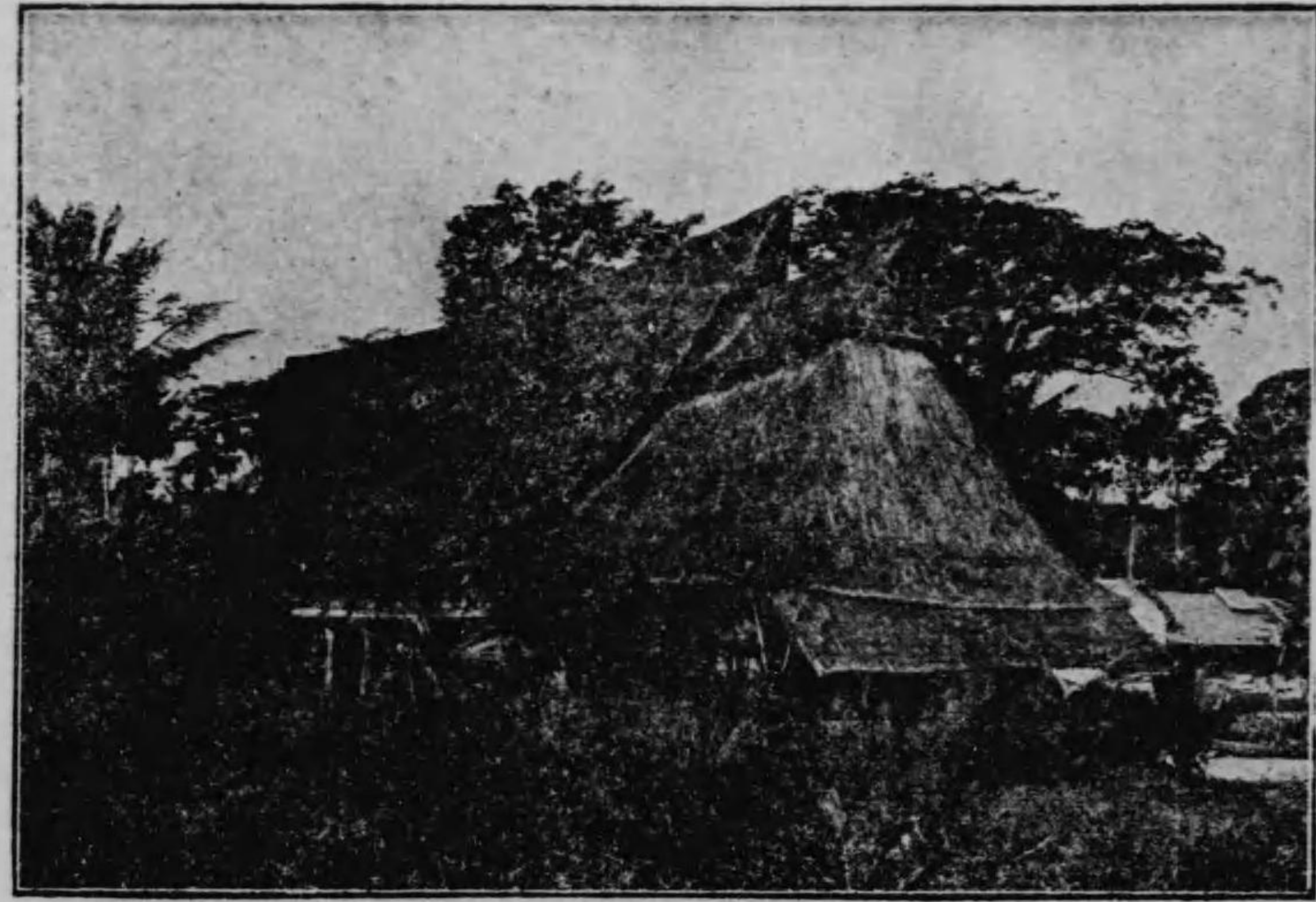
たりして居た。手料理で酒を飲んでゐるに、其處へ奥さんが歸つて來た。美しい顔の人である。また盛に杯が動いて三人で花牌をひいたりした。久しぶりで打ち寛いだ圓な夢を結んで寝るこゝが出来た。

翌日福地君と二人でそこらあたりを彷徨つて歩いた。先づ平野野菜園へ行つて見る。三十英反ほどの畑一面に種々な蔬菜が植つてゐる。平野氏の別荘に獨人の精神病者がゐた。一人の日本の老婆さんが看護してゐた。その婆さんは以前はこの獨人の洋妾であつた。かゝる際になつても、彼を見棄ないといふので、土地の内外人の愛めものになつてゐた。

福地君の斡施で同君の二階で講演會を開いた。來會者數十名、なか／＼盛會であつた。講演料四十盾の寄贈があつた。福地君は土地では成功した人の一人である。その翌日同君と購買市を見に行つた。山奥から出て來たバタ族相手のものである。其の購買市の立つてゐる直ぐ近くに酋長の家があつた。アダツ葺の古風な建



シヤンタル市街



家の長昏タバ

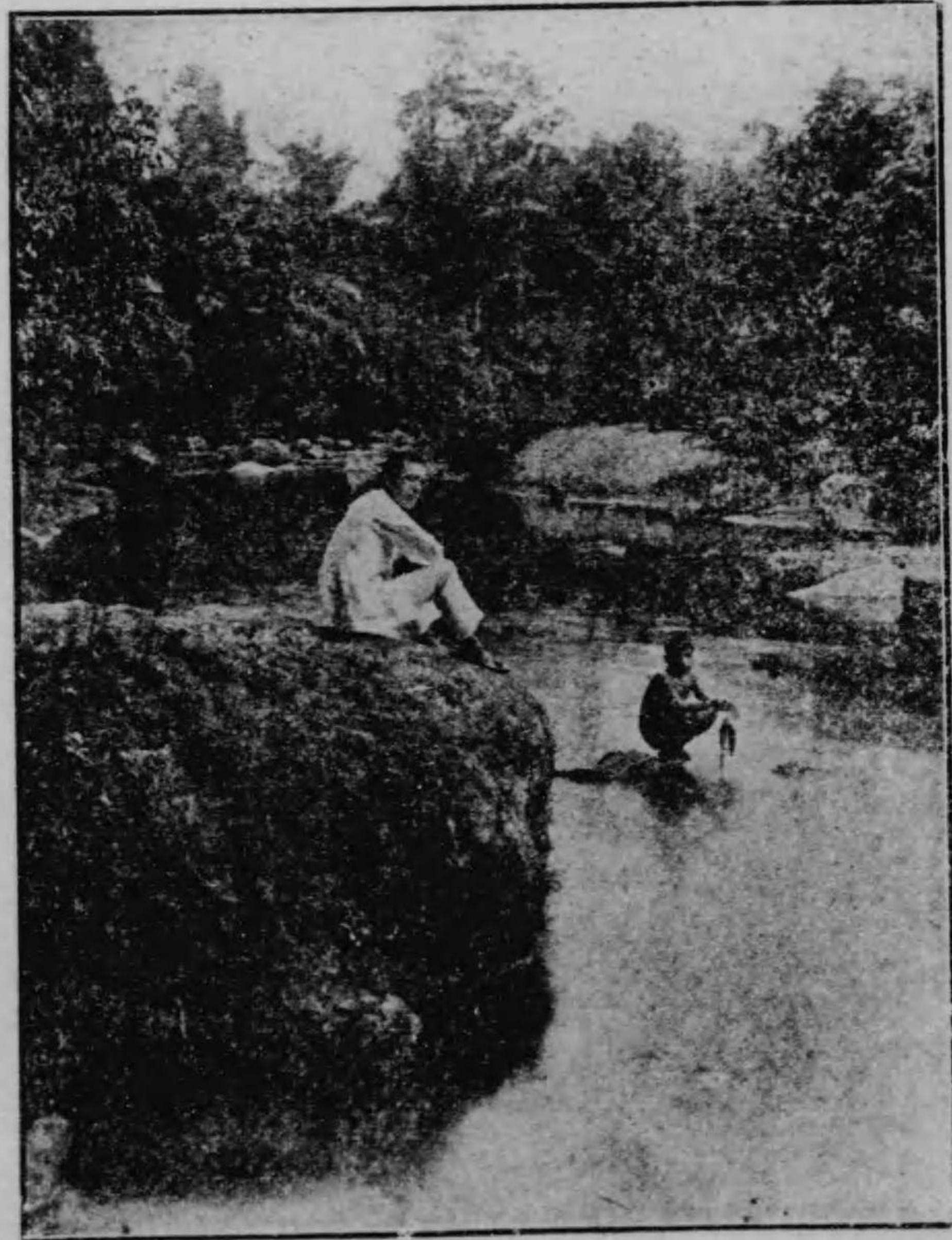
茶で無数の罽毬が天床裏一面に古ほけて吊下けてあつた。昏長の家は此の地方の古い名門の一つである。歸途小さな土橋に差蒐つた時、福地君はこんな話をしてくれた。この橋が首長の唯一の城砦であつたのだ。こゝでは他の蠻族もが随分殺されるこの話であつた。路傍の雑草は蓼々生ひ茂つてゐた。雑草の中には虫のチロチロ啼く聲がする。

同君の家はかなり久しく厄介になつた。一日、附近のトバ湖へ遊びに行つた。トバ湖は風光明媚を以て鳴つてゐる。山と山との間の湖は青錆びてゐた。魔女の置き忘れた鏡のやうに朝、午、夕によつて湖の水の色が變化する。殊に夕方のこの山中の湖は周圍の山の姿を水に浸して物凄いまでに光つてゐる岸邊には白い波が立つ。それを小高い山の上から見ると明鏡の椽飾りのやうだ。幽かに波の碎ける音も静かな椰子の葉に吹く夕の風との音がする。椰子の

亭々に聳えた静かな姿が岸一面に見えて、其間にポツポツと棟の高いアタツブ葺の土人の家屋が見える。噴火口の跡に出来た湖といふ事が此の湖を物凄くしてゐる上に種々な傳説を含んでゐるといふ。湖に關する傳説ほごまた物凄くものはない。

對岸の山も霞む頃、湖中の島からポツリと紅い灯が曳れて来る。山と山との間からは遠くの山も一抹の煙のやうに霞んで見える。山中の湖ほご美しく又物凄くものはない。

落る陽に輝いた山の肌は湖水までも赤く爛してゐる。天の橋立の例にならつて股眼鏡をして見れば天と地と轉倒して山が水に映つてゐるのか、水が山を蔽ひかぶせてゐるのか、旅人の心は迷ふ。山の上に空が晴れてゐる。湖中の



畔湖バト



水は山を孕ませてゐる。山は空に、湖は一つに融けてゆらく、動いてゐるやうだ。美しさはまた何とも譬へやうがない。倒さ富士云ひ度いころである。

一二月福地君の厄介になつてゐた。

「一月でも二月でも遊んで行くさ。」

福地君が言ふ傍から奥さんも勤めるのを、其の翌日出發した。八時頃であつたと思ふ。アルヘミアへ向けて立つたのである。福地君は途中まで送つてくれた。福地君も奥さんも何とした美しい心の人であらう。獨りになつて、友人に對する感謝に濡れた眼を上げて、南國の燃えてゐる午下りの空を見上げながら、彼等の未來の幸福を祈らない譯には行かなかつた。

ト
バ
湖

三、アルヘミア

K君の家へ着く。K君は勿論人のいゝ何時でもニコくしてゐるやうな人である。併し妻君はより以上好人物であつた。以前はやはり苦勞をした人だけに人の心持を推すことも上手であつた。「二つ目のお静」、かう言へば、そこらでは鳥渡聞えた、面白い人である。私はこの温い心、其の温い心に觸れると、何時でも思ひ出すのはあの、コーランボの女郎屋の軒下に明した一夜、ピナンの宿屋で會つたバタバヤ領事の話した言葉である。コーランボのやうな一夜を、この島へ来てまだ一夜も明かしたことはないの、感謝するに、同時にバタバヤ領事の言葉の不誠實さを呪ふ心が起つて来る。聞くとは相違したこのスマトラの現状を見るにつけ、寫眞器の携帶(K君は寫眞師であつたので)をすら拒んだ理由が解らない。個人としての領事に對し相當の敬意を以て、スマトラの現状を聞いた旅行者を侮辱し、欺瞞してまで、入國を禁じようとする、何の理由があるのか。無錢旅行者の入國を厭ふなら厭ふ理由を直截に言つてくれた上、スマトラの現状を端的に言つてくれるがいゝ。齒に衣させて人を侮辱するとは何事である。スマトラ在留邦人の親切を思ふに、本當に腹が立つてならない。人を欺くことを以て唯一の外支手段を考へてゐる彼等は、欺くことを何とも思つてゐないであらうが、事實を誤傳する、國民こそいゝ面の皮である。改めていふ、欺瞞し、巧言する外交は今や過ぎ去つ

てゐる。海外殖民地に於て日本の權威を發揚してゐるものは獨り領事館あるのみであり、領事あるのみである。その領事の言葉を一個貧賤の旅行者すら信ずることが出来ないといふことになれば、無論罪は領事にあるとしても、責任は日本帝國に歸せなければならぬ。日本帝國を代表した領事、帝國七千萬の人民を代表した領事、それがこんな無責任なことを放言していゝものであらうか。

他國の官憲、他國の政府にのみ巧言令色して政策を弄するものが卿等の職責ではない。海外在留の殖民、海外遊行の國民の個人的權威を國家的權威に鞏固ならしめるといふことこそ、それにも増した職責であらねばならない。この個人的權威を國家的權威を發揚する一手段、一方法として用ひらるゝ止むを得ない場合にのみ限つて許さるゝ巧言であり令色であらねばならない。巧言といひ、令色といふは結果から批判された價值であつて、それを行ふ態度は飽くまで誠實であらねばならない。

この意味からして領事官が海外在留民（假令無錢垢面の一個の青年であつても）を侮辱するといふことは取りも直さず、彼は日本帝國を侮辱するに當つてであらねばならない。——かう考へるに、今まで私一個の私憤から出發してゐた問題が轉化して公憤となつた。——腹が立つて、腹が立つてたまらない。

アルヘミヤへ着いた翌日私はK君に伴はれてバタ族の居る山脈に近い町の購買市を見に行つた。物々ご物々を交換するその様を見てゐるに、私の心も何時か金といふものを離れてゐる。生産物と生産物の

ご交換する。何とした原始的な態度であらう。生産物と生産物の比較がされなかつた時、その生産物が持つ勞に對して金銭といふものが出來た。然しその金銭も原始の時代には（現今南洋の新領土ヤツブ島で使用されてゐるやうに）石貨或は貝貨なごであつた。それが鐵となり、銅となり、銀となり、金となつたのである。

一方に革衣が布切を纏ひ出し、遂に絹布を用ひて來る。獵りこつた肉片の燻し焼は調味した珍味となる。遂に穴を掘つて住まつたものが、鐵骨のビルディングとなる。内生活、外生活と響應して膨脹する、擴大する、外延する、内延する、充實する。

さうして太古に於て一生産物と一生産物と交換するに當つて、その勞力の不平均が醸す生産分配の葛藤は、今日では資本主と勞働者との、雇者と被雇者との、生産と富の分配との大騷擾となつたのである。文明の力とは被雇者には身も心をも慮けられる呪の力となつてしまつた。

然るに其の大騷擾をも知らずに太古の儘の姿で、深林を共有し、山野を共有して生産の料を得て安んずる。有り餘つて必要を感じないものを齎らして、不足なものご取換へて歸る。神の姿である。だのに、市を張つてゐる比較的の智慧のある土人、支那人の商人はこれを不當のものご交換する。バタの態度が原始的であるだけにそれが餘計目につく。彼等の奸商ぶりは人をして面をそむけしめる。商業ごは要するに神を詐らんごする手段である——こんなごをも考へて見たりする。

見終つて足を政廳の方へ向ける。途中檐の低い四尺餘の小屋が二三百軒も並んでゐる。造作なきは日本の雪隠作りである。穢いこと夥しい。友に聞けば土人の軍隊の營舎だといふ。以前は和蘭の駐屯兵がゐるのであるが故國防備のため引き上げて、今は土人を以て軍隊を編成させ駐屯せしめてゐる。軍備なきはもごより貧弱なものである。政廳の前に行く。長官に當地の沿革を聞き、併せて私が當地を通過したさいふ印に長官の署名を求めに行つたのである。長官は人のい、性格を有つた上に日本人を大層好んでゐるさいふこをK君に聞いた。長官は留守で、屬僚が代つて挨拶をした。政廳の前に大なる古代武士の木像がある。赤青で染めて日本の仁王のやうに入口の兩側に立つてゐた。顔は圖抜けて大きくて、四角い不器用



ア ル ヘ

な顔のつくり、不様な形體はこれを製作したもの、稚氣も思はれて面白い。それが日本の古代の埴輪に遺されたやうな甲冑をつけてゐる。殊にその顔のつくりは日本の人形が持つ表情に似てコミカルである。佛教によつて傳來したる支那文物輸入以前の原始の日本人がつくつた製作物には一樣なコミカルを認めるこゝが出来る。日本人の始祖は非常にコミカルな人間であつたやうに思はれる。それと同じくコミカルがこの木像にも認められる。現にこのバタ族は首に瑪瑙なごを飾つてゐる。さうして日本の古代人がつけた首飾を綜合するこゝき、そこに何等かの共通點がありさうに思はれてならない。

現代の日本人に比してや、色は黒いが、その顔貌によほご共通したこゝろがある。私の會つたバ



ミ ヤ 市

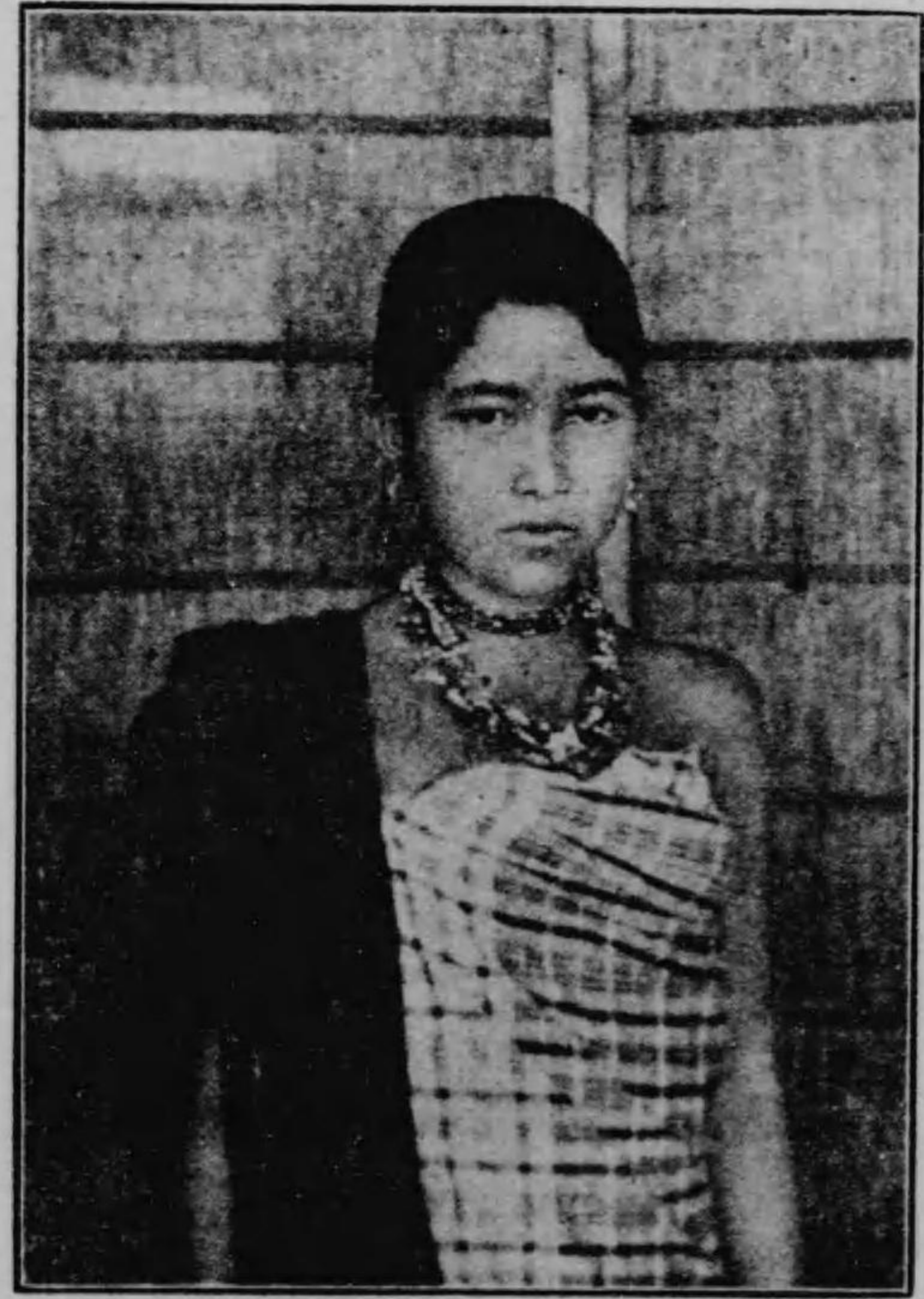
タの二三の貴婦人の顔は日本人だと思はれるほぎよく似てゐる。着物なごも餘程似てゐる。日本服の袂を筒袖に變へたごしか思はれないものを着てゐるのもある。



タの貴婦人

町言 つてもアルヘミアは小な町である。もう町端までは遠くはなかつた。町の外には眼も遙かな高原が續いてゐる。

の高原には白人の別荘の白壁や、かゝる廣漠たる平野にふさはしいアダツブ蕨の土人の家なごが小さく見える。それが如何にもこの高原の廣々としたのを思はせる。高原がつきると、小高い山である。一、二の翠岱の上のあたり、磨き立てた碧琉璃のンバヤ山が聳えてゐる。巔が二つにも三つにも割れてゐる。その割れたごころから盛に黒い煙を吐いてゐる。佐久の平原の落葉松や、白樺の梢から仰いだ浅間山の噴煙を思ひ起さない譯には行かない。夕暮に陽が山に當つて、山の大小の巒がクツキリミ赤く紫に黖立つて、巔から靜かな紅焔が立ち昇つてゐる。下には緑の濃かな平野が裳裾のやうに廣がつてゐる。宛然緋の衣をきた王侯の如き崇高な感じがある。高原の其處此處には椰子や、檳榔樹や、芭蕉なごが群になつて生えてゐる。



タの美人



原 高 ヤ ミ ヘ ル ア

其の翌日附近のバタ族を見に行かうといふので
K君二人で出蒐けて行く。バタは以前は食人種
族であつたが、今は容貌も柔らいで、その氣風は
なくなつてゐた。それでも山奥のバタになるに、
今でも異人種を見るに逃げ隠れるものもある。

私達が見に行つた蠶社いふのが四十戸ほぎの
ものであつた。床の高いアダブ葺の粗雑な家には
一様に窓が一つもついてゐない。唯出入口が開い
てゐるばかり。宛然鳥籠のやうな感じである。中
を覗いて見るに、眞暗で煙のやうな光線が漂うて
ゐる。その暗い中から眼ばかりキラ／＼と光らせ
て居る。黒い肌の、黒い顔した土人が覗くのであ
らうけれど。

床の高いのは（こゝのみに限つたこゝではない
が）毒蛇や、猛獸の襲撃に備へる爲であるに、

君が言つてくれる。

蠶社の中央へ出て来て見るに、腰を短い衣で
巻いたきりの黒い肌の女が乳まで出して、し
しきりに臼で米を挽いてゐる。聲を揃へて唄う
てゐるので、私は今日はお祭りでもあるのか
と思つた。バタの言葉の解るK君は女の一人に
聞いて見た。ところが、それがお葬ひであるこ
いふのだ。親しい者の一人が死んだのである。
杵の音をさせながら、午下りの午後の光りの中
に、悲しい調子の歌を唄うてゐる。杵の音が揃
ふに、哀歌の聲も揃うて来る。調子の揃ふとき
彼等は顔を見合せて、赤い齒を見せて笑ふ。

その音と調子とを聞いてゐる裡に、私の思ひ
は遠く故山の上に彷徨ふ。秋の黄色な夕暮の光
りの中に、赤い手襷をかけた姉様冠りの、綺綴



屋 家 こ 族 タ バ

のい、里の娘ご、筋骨の逞ましい向ふ鉢巻の若者が稲扱でボクン、ボクン音をさせて、扱いた稲を叩いてゐる。四邊が闇くなればなるほぎ二人の唄ふ刈上げの歌が冴えて行く。

「早稲田刈つて、中稲刈つて、晩稲刈り込んでコリヤシヨ、酒にせうか、餅にせうか。サツサ踊ろうか。ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイヤナ。」

二人は有頂天になつて唄うてゐる、叩いてゐる。時偶顔を見合せては笑つてゐる。赤い蜻蛉がツイツイ飛んでゐる。

「鎮守さんの森で、ヨイヨイ、ちよこした袖が、コラシヨ、解けてほつれて縁結ぶ。ヨイ、ヨイ、ヨイヤナ。」

一つの二つの三つのドンドンドン。

我を忘れて唄うてゐる。二人は憑仲であらう。日が暮れて、夕霧が村から村へ流れて行つても止めさうもない。月を踏んで叩くのであらう。唄ふのであらう。

赤い蜻蛉も飛び止んで、宿る葉蔭へ歸つて行つた。今は刈入れの最中である。野の面の遠くには黒く人の動く様子も見えて、長い調子の唄も漂ふ。

「今度よんだ、ヨイ、ヨイ、花稼のそのお荷物にはコラシヨ、馬に三駄、牛に三荷、船に三艘、ヨイ、ヨイヤナ。」



場 會 集 々 々

おまそれが今日此頃の私の生まれた國の面影であるのだ。何とした色彩の淡い、線の柔かい感じであらう。それにひきかへてこれはまた何とした色彩の濃い線の硬ばつた光景であらう。

鼻筋の通つた、眼の濡れてゐる、口元のむつちり膨らんだ可愛い故國の里の娘に比べて、これは何とした醜さであらう。鼻は折れてひし

やけて、バサ／＼と乾いた肌の色、赤い檳榔樹を嚙んで、人食つた血潮の痕つてゐるやうなその口元。頬のあたりには人肉を喰つた筋の動きすら見せてゐる。

あ、私の國は女の美しい、優しい國である。今それを思ひ出して可懐しさに慄へてゐる。

働くここの少ない、感動するここのない彼等は親しいものが死んださいふ唯一の感動を俟つ

て労働するものが見える。心に感動の起る時、人は身心の労働に堪へ得るものであるから。かういふ意味で労働するものには信仰の恍惚を與へるこゝが必要である。この原始的な状態に於て私はまさまざらざらそれを見た。

その恍惚によつて 自ら唄つた歌に自ら聞き惚れるこゝによつて身體の勞苦を忘れようとして歌を唄ふのである。

そのすぐ傍に土人の家に比してやゝ宏壯なアダツブ葺の建物がある。青年集會場である。黒い肌の若者が目だけ光らせて他の蠻社や、異人種に對敵する評議がそこで決せられるのである。酋長の訓令なごもそこで言ひ渡される。

バタの村を離れて二町の餘のところに、川の沿岸に景勝の地がある。青い透き通つた水が悠やかに流れて行く。岸を埋めて綠葉である。處々に洗ひ出されたやうに岩が浮いてゐて、黒坊の小さな子供等が岩の上や、水の中に戯れてゐる。こゝらあたりにはもう鰐魚は住まない。その代り鰻が澤山ゐるさうである。附近にはバタ馬を産出する。朝鮮馬に似て丈低く耳が長い。

翌日K君の家にゐるこゝ、其處へバタの美人を評判のある娘が來た。十六位で容貌は日本人にそっくりで、色も淺黒く、眞黒ではない。優しさうな顔である。サロンを着て上半身を裸體の儘にしてゐる。それに美しい寶石や瑪瑙を連ねた頸飾をかけ、唇は例の通り檳榔樹で染めてゐる。齒根を一分ば

かり残して切つてある。K君が一枚撮らしてくれいへば「いや」こゝ恐怖に迫つた眼で優しく言ふ。別の寫眞を持ち出して來て、「こんなになくなるのだよ。そしてお前にも一枚あけるから撮らさしてくれ。」と、言ふに漸く安心して撮らす。可愛い美しい娘である。二百一頁の寫眞は即ちそれである。「もうお別れですわね。」と「二つ目のお靜さん」が言つて其の晩は酒を出して種々響應してくれた。私は其の翌朝早くこの人のいゝ親切な人々を別れて再び順禮の旅に出た。ピンゼーへ志して。

四、ピンゼー

鐵道線路に沿つて歩く。途中で一晩止まつた。この附近は海岸線が低く満潮の折は十數里の陸上まで海水が浸入して來る。膝を没するばかりの浸水の間を私は非常な困難を感じながら歩いた。自分の身體に波がぶつかつては散つた。身體全體ビショ濡れである。窪みの中へ落込んで進んで行つた。ピンゼーはスマトラの中でも最も早く開けた處である。二十五年ほゞ以前に立派な町を形づくつてゐた。島へマホメット教の這入つたのも此處からあり、支那人が移住して來たのも此處からである。町の家作なごも全體に古めかしいこゝろを多分に持つてゐる。鬱蒼と行路樹の茂つた幅廣い街を這入つて行くこゝ、公園があつた。大きな建物も處々にあつて市況はメダン市よりも活潑なやうに見える。綺麗な水の川を渡つて、土人に日本人の家を聞くこゝ、富士といふ寫眞館を教へてくれる。夕方主人に

會ふ。當地の日本人會の會長である。

主人の紹介で宿屋へ宿泊を頼みに行つたが、明き間がないと言つて拒絶られた。富士寫眞館に一夜を宿めて貰ふことにする。其晩はビールなどの饗應を受けて款待せられた。主人の斡旋で翌日講演會を開いて貰つた。二十五盾の寄贈を受けた。

日本人はこの町に三十人ほゝゝゝゝて、雜貨商、理髮店、珈琲屋、藥種屋などを營んでゐる。

五、ランカツ港

其の翌日の十一月十四日には、私はこの港へ来る道に満潮の水を渡り歩いて居た。ランカツ港は小さな川が諸方に流れてゐる水の港である。満潮の朝夕、水に浸つた街の景色は伊太利のベニスを感じる。水の上に柔かな光りが落ちて、その間を船が往く。向ひの



宮王のツカンラ

家へ行くにも船の便をかつてゐる。

石油の輸出港として有名である。人口二千餘、産物としては椰子の實(これより島の以西一帯には椰子を産するに多し)椰子油、護謨、材木等が重なるものである。日本人で在留するもの誠に少く、漸く十軒に満たない。日本人發展の餘地は充分あると思ふ。山川雜貨商をたよりに一泊を求めた。

ランカツ港はデリー州のサルダンのあるところである。

馬來半島の各地には日本人の在留するものはかなり多い。それに比べてこのスマトラ、特にスマトラ中でも最も開けた、物産の豊富なこの地方に在留する邦人は非常に寥寥としてゐる感がある。邦人の開拓を待つてゐる椰子や、護謨や、珈琲園が尠くないのに。

六、バンカラ、フランタン

人口四千餘の河口に臨める港である。スマトラ北部本線の終點をなしてゐて、スマトラ海岸沿岸航路の定期寄港がある外に、半島各地の港と石油船の交通がある。商況が活潑で、支那、印度、マレーの苦力が数千人入り込んで働いてゐる。大きな商館などが楯比して車馬の往來織るがやうである。

このやうに市況を活潑ならしめてゐる最大原因はこの港を少し離れたところに和蘭のビユチア、マスカビー會社經營の石油坑があるからである。職工一萬人を抱擁して作油に従事してゐる。支那苦力



ピチユアマカスビ石油會社

なごも幾千人這入つてゐるかしれない。馬來人で顯要な位置に就いてゐるものも少からずあるといふ。

石油坑は全面積は十六平方哩に亘つてゐる。直径二尺餘の大きな鐵管が山の處々に露出してゐるが、それを覗いて見るに、原油がドウ／＼と音を立てて流れてゐる。

この工場内は絶対秘密にされてゐて、マレーの巡査が所々に立番して警戒をさ／＼と怠りない。

近來、鐵材の不足から消耗する機械の補充や、ブリキ罐の製産が不十分なため原油を棄てゝゐるといふ始末ださうである。私も參觀を許さないといふので通り縫りに見て過ぎただけである。

七、コーラシンバン

その翌十六日蠻地なるアチエン州へ這入つて行つた。蠻人は和蘭人に叛逆を企てたので、三十年前から和蘭政

府はこゝへ軍政を布いてゐる。何しろ蠻地のこゝまで旅行が非常に困難を覺ゆるに、アンチエンの山川君がさう言つてくれたので、用心をして歩いて行く。バンカラン、ブランドンからコーラシンバン間に大きな石油坑が二つある。一つは以前のピチユアマカスビ石油會社經營のもので、今一つはハンカラス石油會社經營のものである——それを見て行くが、山川君は言つてくれた。併し其處へ立寄るのが憶劫であつたので、その儘通り過ぎるこゝまでして、コーラシンバンに向つた。この町も島では古い町の一つで、附近に護謨園が多い。

日本人も三十人ほゞゐる。この夜は土人の珈琲店に止まつた。こゝろが、夜通し隣室でマホメットの僧が讀經してゐるので眠られなかつた。日本の法華經に似て、邁進的な勇壯なものである。力をこめた手を上に動かしたり、下に動かしたりして、鏗のある幅広い聲で怒鳴つてゐる。その讀經の聲をきいてゐるに、「コーランか劔か」と言つた豪邁な巨人マホメットの獅子吼を思ひ起さない譯には行かなかつた。

翌朝山川君の紹介で、今井雜貨商を訪ふ。

「この山奥にガヨールといふ山がありますが、史跡に富んだ山ですから、お登りになつては如何ですか。」

この慇懃をうけたので、自分の心は山に史蹟を聯想して一種のローマンチックな詩想に動いて、登

つて見度くて仕方がなかつた。然し道はなかく、危険が多いこのこゝで、少からず躊躇してゐた。その足で私は日本人の寫眞館を訪ねて其の話をし、恰度其處へガヨール山の蠻人でアマンクロールといふ男が來てゐたから——彼は其の一日あみの日に幸便があつたので、この町へ降つて來たものである——お一緒に行らしやつては其の話であつた。かねて心の動いてゐた折柄にて、そのアマンクロールといふ土人と一緒にガヨール山に登るこゝにした。アマンクロンは幸にも支那語が少しづらるは話せた。私は支那に一年半の餘もゐたので支那語は造作なく使へて都合がいゝ。

コーラシンパンの町から六哩ほごの地點にボルネオ護謨園株式會社がある。大正六年十二月に創設せられたもので六千英反を有し、支那苦力を三百人餘り使つてゐる。これがスマトラ島の邦人經營護謨園の嚆矢である。常務取締役は遠藤隆吉氏といひ、遠藤護謨園主である。

一七 哀れガヨールの半月旗

其の足でアマンクロールを伴つて今井君のこゝろへ歸つて來た。今井君も自分のこゝのやうに大層嬉んでくれて、早速店員を使ひやつて種々準備をしてくれたりした。携帶品といふのは米一斗、乾物類、罐詰類、酒、マッチ等身の廻りのもの一切、今井君は護身用にて鋭利な日本刀を一本貸してくれた。

十七日早朝アマンクロールと一緒に出發こゝになつた。支那船を以て四日間リパス河の上流へ溯らなければならぬ。其の日は朝から生温かな雨が降つてゐた。リパスの河面は雨の足をのせて滔々濁流を漲らせてゐた。河の中流まで埋めた種々な灌木や葎草の類までが雨滴を宿してシヨンボリと首垂れてゐる。岸の密林を過ぎて行く雨の音、凄じい勢で押し流れてゐる河の音の外には天地全く静寂。その雨、濁流、アマンクロールを友として今日一日過さなければならぬのである。私の心はいくらか臆劫さを感じて減入つてしまつた。併し雨雲を仰ぎ見る、雨の大粒、るに比して意外に雲は厚く、午後までには晴れるミアマンクロールも言ふので、兎も角も、船を乗り出すこゝにした。此の河にも鰐魚が住んでゐるから、小さな獨木舟では危害を蒙らないとも限らないので、比較的舟縁の高い支那船で航行することにした。その支那船をアマンクロールは楫二挺で漕いで行く。楫は長さ三間の餘もあつて、日本船なごゝ異つて手前の方へ引くのではなくて、反對の方面へ押すのである。黒い肌のアマンクロールの肩は二挺の楫を間斷なく押すだけの力を持つてゐた。肩の肉は千切れさうに力が充ち満ちてゐる。時には悠つくりと、楫をこつて船唄すら歌ひ流してゐる事もあつた。ミ、突如として雨模様が變つて來た。——疎、落葉樹の深林を通して忍びやかに過ぎて行く、その寒い内地の雨に比して、この熱國の幾百哩に亘る常盤樹の大密林に降り灑ぐ豪雨ほど物凄じい感を感じさせるものはまたあるまい。恰も天の一方が破れて黒闇の雲が亂れ、追はれたる幾千の惡魔が山を鳴し、谷

を轟かし、樹を折り、草を吹き飛ばして殺到するが如き趣である。雨はいよ／＼亂れて、風さへ加はつて、一時は船唄まで流して、其の聲に聞き惚れてゐたアマンクロールも船足の遅いのに自烈で憤り出してしまふ。漕ぐ手を止めて私の顔を睨めてゐる。船は矢の如く瞬く中に下流へ逆流して行く船は、一時中流まで埋めてゐる灌木の枝に纜はなければならなくなつた。私は着物を、彼はサーロンたきを取り除けて雨氣を絞る。アマンクロールは太い肩根を神經的に擧めて断えず何かを呟きながら憤つてゐる。併し、山も、林も、河も依然として大動亂の叫喚の中に蠢めいてゐた。

午後になるに、いくらか風も収まつて、雨も小止んで来た。雲と雲との切目から青空さへ覗かれた。二人は再び纜を解いて中流に乗り出した。それまでに私はアマンクロールを慰めて機嫌をなほさせてゐた。

アマンクロールは熱血に燃ゆるやうな男であつた。眼が凄まじいまでに澄んで、眉根が一字に走つてゐる。其の間には何時でもピク／＼と動いた神經の慄動があつた。唇はひきしまつて彼の意志はよくそれに現はれてゐる。六尺豊かの偉軀は、鐵のやうな肉を抱いて、力そのものを思せた。彼は唯の土人ではない。——私はそれを一目で睨んだ。

太陽は雲と雲との裂目から多量の日射を滴らした。アマンクロールは躍り上るやうな元氣を顔に見せて、一生懸命で楫を動かしてゐる。彼の中には太陽そのものが宿つてゐるやうに見えた。

岸を見るに、大森林の一部が水に折れ込んで、水の中に生えた灌木の枝の上には尾の長い猿や、黒い猿が戯れ遊んでゐた。突然アマンクロールが漕ぐ手をやめて水の中を覗き込んだ。見れば其處には三間もあらうと思はれる鰐魚が尾と頭を水に浮かして流れを渡つてゐる。「トアン。」かう言つて叫んだアマンクロールの顔には會心の笑が漂うてゐた。彼は鰐魚をも愛し得る廣い心を持つてゐる。

太陽は西に傾きつくして、夕霧が河面に降り、蒼然と暮色が迫つて來ても彼の力は一向に衰へさうも見えなかつた。闇い水の上を白い浪を切つて彼は側目もふらず漕いでゐる。末頼もしい精力の勝れた若者である。

舟路は闇の中に没して暗い波が船の周圍に死靈のやうな囁きを交す頃、船は一本の幹太い灌木の根元に纜がれた。その灌木は河幅を埋めて生えてゐるので、猛獸の襲撃を免れることが出来た。二人は用意の米を飯にして河中に纜いである船中で、松脂を燃やしたほの暗い灯の下で食事をすませた。

南國の空は青白くかゝつて、細い新月の影が對岸の黝く黙り込んで立つてゐる密林の上にあつた。冴えた星の先りが青く赤く頭上の木葉の中に一つ二つと輝いてゐる。アマンクロールは聞耳を敬てザア、ザア、ザアと断れ目なく流れてゐる河の音に聞き入つてゐるやうであつた。そして四邊を睨み顧みした後でムツツリと黙り込んで寝る仕度をした。私は千々々燃え残つてゐる松脂の灯の傍に、手枕をして眠り込まうとした。やがてアマンクロールの影も煙りの向ふに黒く横はつてゐる。南國の空はこの

二つの影を見守つて神秘的な笑みを彼等の上に投げた。アマンクロールの黙り込んだ姿を煙の中に見詰めてゐる私の心は断えず何かに亂されてゐた。アマンクロールも思ひあぐんだ體で時折頭を擡けて、キラ／＼と鋭く光る眼で私を見詰めてゐる。——頭上には依然十一の南國の空が轟惑の笑ひを洩し、木の枝から大きな蝙蝠が飛び立ち、スフィンクス——あの沙漠の砂の中に幾千年の間ひこり獨り遺されてゐる人面獸身の瞳を思はせるやうな月の色が呪ふやうに見える。

「トアン、トアン。」

私もいくらか前から彼の様子が變だとは知つてゐたが、かう急速しく叫ばれたので少からずギョツとした。が、慙もほやけた聲で答ひ返した。

「何だ、アマンクロール。」

「トアン、俺の願ひを聞いてくれぬいかよ。」

彼の眼は急に燃えるやうな光りを放つて相手の顔を睨みつけた。だが、私は平氣な様で、依然こほやけた顔をして言つた。

「何だ、言つて見ろい。」

かう言ふと、彼は急に晴れやかな顔に變つてかう語るのであつた。彼の叔父に當るバンマナムといふのは巨人であつて、ガヨール山中の優勝な一族の首長であつた。バンマナムは夙に豪邁の氣に富んでゐて、さうかしてこの毒ある蘭領の手を離れて、亡國の歌を邪魔に返したいといふ念に燃え立つて十餘年以前に毅然として軍を集め、彼蘭軍に對抗したのであつた。然し精銳なる二千の蘭軍と、銳利なる劍戟は少數の叛軍を滅ぼすにはあまりに事が容易であつた。豪勇なるバンマナムも遂に怨を呑んで戦没したのであつた。

爾來十有餘年、ガヨールの山の中に生ひ立つたかの巨人の遺徳を慕うて、この甥のアマンクロールを首領として再び蘭軍に敵對し、亡國の民を塗炭の苦しみから救ひたいと念する志士の一團があるにはあるけれども、兵は少なく、武備は不完全であるから、何とも出来ない。

「トアン、お前さまの國は、東洋一の強い國だ。さうか俺めに兵隊少しと、鐵砲彈丸を少し送つてくらしやるさいふと出来ませぬいだかよ。トアン、俺あかうして頼みますだ。お前さま、さう計らつてくだつせ、もうしお前さま。」

彼はかう言つて涙を流して頼むのであつた。掌を合せて頼むのであつた。私は彼の黒い顔へ流れ落ちる涙を見てゐながら、無量の思ひが胸を往來した。あゝ、此の亡國の怨民よ、私は遙かに東北に當つて輝く空を見上げながら、瞬く星の光りに無限の悲哀を感じない譯には行かないのであつた。商女

は亡國の怨を唄ふことを知らない。然るに見よ、大丈夫の眼底既に萬丈の熱涙が溢れてゐるではないか。

松脂の灯はその最後の餘光を明滅させて次第に消えて行く。北の空の星の光りは月の落つるにつれて、次第にその光りを増して行くのであつた。

語り終るに、アマンクロルはやゝ安心したらしく、その黒い姿を船底の板に靠らせて、しきりに嗚咽し始めた。そうして何時の間にか嗚咽の聲もやんで、深い眠りに落ちて行つたやうであつた。私はその時から長く眠るこゝが出来なかつた。リバスの黒い流れの間断なく其の呻きをあけて四邊の静寂を破つてゐる。遙かの山奥で鋭くキ、キミ叫ぶ猿の聲も聞えて、支那船の中の夜は次第に更けて行つた。

四日間はおくして過ぎた。太陽は河の東岸から出て西岸に没した。四日の夕方に密林に密林との間の僅かの切れ間に立つてゐる小さな村へ着く。コラスリバーに云つて、三十戸ほごあるアチエの村である。其の夜は其處で宿るこゝとして、地面の上に板を敷いて寝る。遠くの林の中に吼えてゐる虎の呻きも聞えてくる。翌日リバス河の斷崖に沿うて山路深く這入つて行く。細い路を埋めて雜草は蔘々茂つてゐる。二人は喘き喘き登つて行く。朝霧が晴れる——太陽は空高く昇つて行く——陽が落ちる——たゞこれを唯一の目的として登つて行く。外のこゝを考へる餘裕がない。絶壁の下に深い林

があつて、林の間に河が流れてゐる。美觀ではある。

アマンクロルはその肥大な體を稍々低頭れ氣味で、脊中を丸くしながら進んで行く。その哀れな姿を見てゐるに、知らず識らず悲憤の涙すら私の眼から落ちるのであつた。夕暮は其處此處の森の葉陰から忍び足して迫つて来る。七里の道を夜に這入つてジョモダルマ山麓の麓にかゝつた。その麓にアダツブ蕘の圓錐體の小屋が立つてゐた。柱などは無論ある筈がない。圓錐體の頂點に穴が開いてゐる處から這入るこゝになつてゐる。中へ這入るに、蠻族の通る度毎に泊つたものを見えて、焚火の燃え残つた後や、獸の骨などが取り散らかつてゐた。ブーンと腥い匂すらした。髪をおそろに亂した白衣の妖女でも居住つてゐるやうで、こゝで宿るのは無氣味であつた。樹の葉を渡る風の音は呪文のやうに思はれる。赤く錆びた月が中天にかゝつて、ザア、ザア、ザアと遠くで河の囁きも聞える。毛孔からゾーツと物凄い夜氣が身内へ迫つて来る。日本刀を身邊にひきよせて、苦しい眠りに落ちて行つた。

アマンクロルは今日も一日寂しさに歩いて居た。彼の胸中にはこの附近の山又山が無限の追憶になつて往來した。バナナムの最後の悲痛な顔すら想起せられるのである。

小さな火を圍んで二人は夕飯を食つた。飯の後で携帶の酒をのんだ。アマンクロルは黙つて杯を飲み乾した。いくらか舌が縫れた頃彼は突然私に、

「トアン」かう叫んで掌を合せて泣き出した。

「よい、心配するな。」

彼は凄惨に幽に笑を含んで、仰向け様に打ち倒れた。泣くやうな恨むやうな聲でアチエンの歌を唄ひ出した。青い煙の立ちこめた中にアマンクロールは獨りで唄つてゐる。おゝその淋しい韻律をこそ亡國の挽歌といふのであらう。寝苦しい私の耳に長く長く其の韻律が響いてゐた。

七日目の日も八日目の日も、かうして過ぎた。七日の晩は六里の道をジョモルダムの土人の假小屋の中に寝た。八日目の晩は五里の道をレステン村に寝た。もはやこの邊は海拔幾千尺の高山で、寒さは犇々迫つて来て、血を凍すやうである。處々にながい松林（南洋へ来て始めて見た）が續いてゐて、アチエン族を剿滅せんとして和蘭兵が駐屯してゐた石造の堡壘なきが其處此處に見られた。アマンクロールは情熱に輝いた眼で私に其の堡壘の一つ一つを指摘して説明してくれたりした。松林の中に白く立つてゐる堡壘は私の思ひを故國の古城に誘ふのであつた。

猿は枝の上に飛び廻つてゐるが、行人に馴れてしきりに戯れに来る。餌なきを與へるご方々の枝からキ、キと飛び降りて旅人の前路をこり巻くのである。恐ろしい獸の名に馴れた旅人の耳には猿なきいへば、山中の旅行には可愛ゆいものゝ一つとして取扱ふのである。レステン村からビニンまで八里の道はリバヌス河の峽谷に沿ふた山路を辿るのであつた。幾百尺も知らぬ谷は底に白波を躍らせ

てゐた。——一歩足を滑らせれば命はなかつた。午後何時頃であつたであらうか、行手を急いで居るこ、突如物蔭より異様な男が二人出て来た。顔も猛惡に出来てゐて無氣味であつた。アマンクロールもギョツとしたやうであつた。よくそれを見るこ、支那人であつたので二人はそれもなく安心して過ぎた。彼等は幾度も幾度も後を見送つてゐた。ビニンは名だけあつて人家は一軒もなかつた。

「アマンクロール。さうして寝よう。」

「トアン、心配はいりませぬいだ。」

彼はかう平氣で言つて、いきなり蕃刀を抜き放ちて大きな立樹の下に立つた。何をするか見てゐるこ、彼の蕃刀はその立樹の皮に向つて走つた。忽ち一間四方位の皮が剥ぎさられた。それを草で綺麗にふきこつて私の許へ持つて来た。



る戯に人行猿の中山ルーヨガ

「トアン、お前さまこれにくるまつて寝るだよ。俺あなごあ何時でもこんなことあ、ありますだから俺あいりませぬだ。」

なるほご妙案である。で、常の如く飯をすませて、私はアマンクロールのくれた樹皮にくるまつて、彼はその儘で夜營することにした。猛獸の襲撃に火を備へた。星、月、樹の葉を屋根として一夜を明す壯快はかういふ旅行に馴れたものゝ味ひ得る天の恵みである。濕氣を含んだ樹皮は高山の夜氣に冷えて薄着の肉體を冷たくしたので、容易に慄へが止まらなかつた。それでも夜更けて深い眠に沈んで行つた。アマンクロールの躰は雷の如く、沈々とした山氣を脅かしてゐる。——何時頃であつたであらう。筒状をした樹皮の中から私の身體は半ば以上出てゐるほご無感覺に寝てゐる。ミ、腰のあたりを弄られてゐる夢を見てゐた。誰か手できりに私の腰を弄つてゐる。可笑しいこともあるものだなあと思ひながら矢張り寝てゐた。ミ、フツリ夢が切れる。何か黒い姿が私の腰のあたりに手を入れてゐる。大方アマンクロールであらうと思ひながら、今日まで毎晩一緒に寝て來た彼が今夜に限つてそんな眞似をする筈がないと思ふ。思ひながら私は手近くへ日本刀をひき寄せて、そつと樹皮の裂け目から四邊を廻す。焚火は久しく繕はないので燭が細くなつて煙がしきりにあがつてゐる。その煙の向ふにさうやらアマンクロールが寝てゐるらしい。アマンクロールでないですれば誰であらう。彼の傍に大きな岩があつたが、其の蔭から闇が擴がつてよくは解らないが、何でも人影らしいも



のが一つ二つ蠢めてゐる。私の傍にあつた黒い影もその方へゆらく動いて行くやうである。煙

の切れ目から窺へば正しく異様の男が三人ほごゐる。私の頭腦は警鐘の如く或事を思ひ起して亂打された。晝見た支那人——突如私は大喝一聲するに同時に矢庭に日本刀をひき抜いて、件の大岩の上に立上つた。黒い異様の影はそれついで私に向つて突撃して來た。アマンクロールも物音で眼を覺ました。

「手前達は俺を誰だと思つてゐるのだ、日本人だぞ。もしも俺に指一本でも觸れた時は命がないものご覺悟しろい。」

日本人——いふ言葉に彼等は立ち竦んでしまつた。中には武器を收めるものすらあつた。

「アマンクロール、お前はこの刀を持つて居れ、俺は彼奴等をふん縛るから、もしも彼奴等が手向ひしたら打ち切つてしまへ。」

アマンクロールは膽力の据はつた大兵の男であつた。その團體の前に彼等は一縮になつてしまつた。私は米を入れて來た石油罐の繩を解いて一々彼等は結び上げてしまつた。大きな樹の根に珠數繋ぎにした。その中に一人が謝絶り出すに、外のものも無論意氣地がなかつた。

「さうぞ政廳に渡すことは許してください。俺等も支那人と思つたので、日本人だと思つたら、こんなことはしなかつたのです。命だけは助けて下さい。」

いふ意味のこゝを言つてゐたけれども、私は彼等を容易に解放しなかつた。そしてアマンクロール

を促して元の處で寝ようとした。併し昂奮した神經は容易に二人を眠らせなかつた。月は低く低く魔のやうな輝きを見せて彼方の山の端に隠れようとしてゐた。數千仞の下の谷川の水のせゝらぎは闇を劈いてザア／＼と雨のやうに流れてゐる。……遠くの野か、山かに當つて野牛や、猛虎の呻き聲が闇の底を光のやうに貫いて響いて來る——

三人の山賊はその聲をきくに、一様にをい／＼と泣き出した。アマンクロールも起きなほつて撫然として腕をなでゝゐた。

野牛や猛虎の呻き聲が水のせゝらぎに消えて行く頃、夜はほの／＼と明けた。

アマンクロールは解放してはいけない、打ち切つてしまへといつた。けれども私は三人に支那語で懇篤に説き聞して、一人に金を五十仙つゝくれて追放した。

九日の日にはいよくガヨールの村へ着く豫定であつたので、私もアマンクロールも朝から元氣が異つてゐる。九里の道を歩いて、日の暮れない中にカンボンに着いた。村ではアマンクロールの家で宿つた。私に何かを囁かしてゐる彼は種々款待してくれた。徹宵附近の若者も私をこり巻いて慷慨悲憤の口吻を洩してゐた。

翌日いよくガヨールの山嶺に立つて脚下にガヨール村を俯瞰した時轉た感慨を深うするものがあつた。

一八 ランサからビナン港まで

一、ランサ

ガヨールの山の上に一週間はさるた。ガヨールの風光は私を止めて置くには充分であつたからである。十一月二十八日の朝ガヨールを降りてこの町へ這入つて来た。カヨールの密林を限つて、大きな平原がこの町を抱擁してゐる。處々に護謨や椰子の密林があつて、泥田なごも開けてゐる。ランサは小さな町である。

二、ロースマイン

其の日の午後私はロースマインへ向けて出發つた。夕方この町へ着いた。海岸には日本の小笠原松に似た葉の細かな松の磯馴松が白砂の帯の上に一面に並んでゐて、入江の水は青黒く輝き、支那船の三角な帆が落日をうけて赤く染まつてゐる——それが悠悠と流れるやうに櫓の音をさせて行く。波は雪塊のやうに海岸に摧ける。其の落日の中にロースマインの街は萎びたやうに動んで立つてゐて、活動寫眞館の屋根のみ獨り慧かしい眼のやうに白く光つてゐる。ロースマインは三四の通り街で出来てゐる。餘り大きな町ではない。着くまで其の足で日本人で支那人の妾をしてゐる人を訪ねた。その妾は

私を喜んで迎へてくれた。其夜は例の活動寫眞館を覗く。印度の芝居がかゝつてゐた。芝居は印度の神話を戯曲んだものらしく、古典的な派手な衣裳を着た優人が踊つてゐる。印度語を知らない私には何をやつてゐるのか見當がつかなかつた。でも見てゐる目に奇らしいので、飽かず眺めてゐた。それから聞いたのであるが、和蘭政廳で建てゐるので、その収入の全部は政廳に歸する。政廳はその收入を以て道路を修繕したり、橋梁を架けたりする町の費用に宛てるのであるといふ。こゝには日本人は澤山ゐない。日本の人が五六人ゐるくらゐのものである。

三、コータラジャ

ロースマインからコータラジャまで私は軍事探偵と思はれたものか、和蘭やマレーの巡査が私の後を尾行してゐた。便所へ行くにも、私の後へ跟いて来る。蒼蠅いたらなかつた。其の間に三日かゝつた。コータラジャには蘭軍が一聯隊ほゞ駐屯してゐた。印度人からなつた軍隊もゐた。

こゝはこの海にあるサバン港の副港のやうな位置にある。米、椰子の實、椰子の油、護謨なごを輸出してゐる。和蘭航路が月一回くぐる通つて来る。

コータラジャは以前はこの州の首府であつた。ラヂャはこゝにゐた。こゝのラヂャは三十年ほゞ以前から和蘭に對し叛旗を翻してゐたが、勢がなかく、標奸で和蘭軍も持て餘してゐた。今から五六年

以前決死の隊を組んで彼の王宮に近づき、彼を捕縛して遠島へ流した。其處で彼は和蘭政府の爲に遂に殺害された。其の後なくなつた先王を追懐し、その徳を慕ふた暴徒の一隊二十餘名のものが蜂起して再び和蘭政府に謀叛した。政廳に火を放ち遂に海岸に碇船中の砲艦を奪つて乗り込んだ。併し無智な彼等はその砲艦を運轉して戦に用ふることを知らなかつた。彼等は再び艦を棄て、上陸した。さういふ遺跡の多い町である。

私のこゝへ来たのはこれからサバンに行つて、それから印度へ渡る心組みであつたからである。この町へ来て、私の監視は許されなかつた。和蘭の巡査が私に見え隠れについて来た。アサハンで會つた柔道家の天野君はこゝに来てゐるさういふことを豫ねて聞いてゐたので、それもなく日本人の寫眞屋へ行つて見た。果して天野君が其處で會つた。その寫眞館主の斡旋で、私は講演會を開いて貰つた。謝金三十盾を得た。既に私の懐中には二十六盾ほさあつたので、その金を以てビルマへ渡る旅費とした。寫眞屋にその晩止めて貰つた。

四 サバン港

コータラジャの税關で渡航券の檢閲をうけて、サバン島へ渡つた。海上十裡ほきを三時間かゝるのである。行手遙かにサバンの島が圓錐形の山々を孕んで暈繪のやうに浮んでゐる。見返ればスマトラ

の山々、殊にアチエ山脈の山々がその形大の姿を、青緑の間に峙て、曠野を威壓してゐる。椰子の濱も遠く遠く續いてゐる。別れて来たコータラジャの町々は白い壁を海風に吹かせてゐる。

三時間の航海は私をはや島の近くに運んでゐた。遠くで見た圓錐形の山も、第に其の形を文明にして巔の割れ目までを見せてゐる。秋の日は島全體の風物を温かに抱いてゐるやうに見せた。十一月であつたから、秋であつたから、島の樹々は紅葉を染めて目も覺めるばかりの装をこらしてゐる。その紅葉の錦の間に梯子をかけたバルコニーの深い高臺の家や、高い塔のやうな見張り臺のある白壁の家や、土人のアダツブ葺も混じて、それが様に動搖しながら遠くへ遠くへ連つてゐる。船はゴチゴチと家並の見える彎曲した港の中へ這入つて行つた。十一時に上陸を許された。

この港はサンダカン港に似た町で、後方に高い丘を脊負ひ、丘の下からだら／＼上りに家が續いて丘の絶巔まで及んでゐた。多くは青い葺の白い壁の家である。處々に思ひ出したやうに沈鬱な森が見えてゐた。官廳なごは高低丘の上にある。

この港は軍港であるけれども、自由に入出が出来る。以前はランゲン米の集散地であつた。棧橋を下りると、立並んだ倉庫がまづ旅客の眼を驚かした。其の間には石炭の貯藏所もあつた。その石炭の大部分は裏蘭領のサーロン、坑附近に産するもので、バタン港から輸出せられたものである。日本人でこゝへ来て稼いでゐるものは甚だ多くない。雜貨商、寫眞館、漁業なごに従事してゐるも

の五六である。金子といふ人が漁業で成功してゐる。以前は眞珠なまを採取してゐたが、近頃専らタカセ貝を採取してゐる。この人の下に沖繩縣人が三十人ほども働いてゐた。私もその人の許に一夜を止めさせて貰つた。

私のこゝへ来た目的は、この港は蘭貢米の集散地であつたので、月三回はきまつて定期船の往復がビルマとの間にあるといふことに起因する。そのビルマへの便船をかつて私は向ふへ渡らうとしたのであつた。併し、到着後金子君に訊いて見ると、輸出米禁止以來該便船の往復が全く止んでしまつてゐるこのことであつた。で、やむなくバタン廻りの汽船にのつてロースマインに歸り、ロースマインから陸路イデに行き、ピナンに寄港してビルマへ渡航する計畫に模様をかへた。

其の日の五時にロースマインに向け出發つた。私の旅行は相變らずの無錢旅行であつたので、デツキバスを求めて乗り込んだ。乗り込んだまではよかつたが、其の夜唯一の自分の友として旅愁を慰めてゐた、友人の贈物たる望遠鏡を盗まれてしまつた。一陸に際し、船長に取調べを命じたが、こゝろがう犯人が見當らなかつた。話に聞いてゐるのはこゝろだと思ふ。シャヴ船員の乗り込んでゐる船の甲板乗客は携帶品に注意しなくてはならない。シャヴ船員は往々甲板乗客の携帶品を盗むからである。私の望遠鏡もさうして盗まれたのである。

ロースマインには翌朝の八時頃着いた。郵便を入れようと思つて郵便局へ行き、局長と話してゐる

さ、其處へ和蘭の官憲が来て同行を求めた。同行の意志は私には豫想がついてゐるが、慙々擲諭つたりして見る。税關に行くに果してそれであつた。私を軍事探偵に嫌疑したのである。——渡航免狀を見せて許された。稟書しろと言つて、稟書までさせた。其の翌日イデへ向けてたつた。イデの附近に護謨園が多い。

ロースマインからイデへ行く海岸の眺めは恰も内地のやうに線が柔らかで美しい。白い砂が銀砂のやうに海岸一帯に伸びて、其の上を葉の細い磯剛松の緑が這つてゐた。なだらかな濱の彼方には青い海と白い波が見える。白い砂の上に赤い花が咲いたり、青い海の彼方に漁火が見えたりする。水平線は廣くて長い。

イデは小さな新しい町である。日本人なまも少しゐて、雜貨商、女郎屋をしてゐる。女郎屋には女郎が一人位づゝしかゐらなかつた。女も此の地方には發展してゐないと思へる。今井君の家に宿つた。イデから船着場までの間は一帯の沼地で、沼地には灌木や葦葎の類が青々一面に生えてゐる。其の間を土人が素裸に白い褌を巻いて獨木舟を漕いでゐる。其の沼の中の一部に滔々水音を立て、流れてゐる川もある。恰度大海の中に潮流のあるやうなもので、之は内地では見られない奇觀である。

翌日船着場まで歩いて出て船に乗つた。其の翌日私はブラワンの町を歩いてゐた。其の日はブラワンからピナンの汽船に乗り込んだ。午後四時汽船は悠かな烟をあげて、最後の一瞥をこの島に與

へて別れて行つた。思へば二月のスマトラ羈旅もこゝに終つたのである。再び来るまでの長い年月の間、或はこの生の終るまでこのガヨールの紫の雲も、彼のトバの碧い水ももう私の眼の中、私の耳の中から消え失せて、残るは唯心に残る映像である。二月以上のスマトラの羈旅——心に残るこの映像を私は今可愛ゆいものでも抱くやうにしてビルマの旅に上るのである。サラバ、スマトラよ——

後には残る煙の廣く廣く海を蔽ひかぶさつた中にスマトラの山々が霞のやうに見えてゐた。

其の翌朝私の汽船は再びピナン港へ這入つて行つた。二月の後にかの青い丘と白い壁とこれを取つた緑の森を目の前にした時、私は母の胎内へ返されたやうな心であつた。

船の甲板から飽かず、ムクムクと近くへ動いて来るこの街を見てゐた。

一九 ビルマ行

ピナン港へ這入つた日、私は以前の知己を訪ねて舊懐を語り合つた。梅津氏のところへは以前の不愉快な思出が伴つたので行かなかつた。岡庭氏へも訪ねた。私がスマトラ島に居た二月の間にこゝの日本人會長が變つてゐた。梅津氏に比して岡庭氏は喜んで私に講演會を開催するやう慫慂してくれた。岡庭氏はこの時はもう會長をしてゐた。

其晩會場で講演會をした。十三弗の寄贈があつた。

其の翌日午前五時私は印度ビルマ行の汽船の皐月丸に乗込んだ。皐月丸は支那人へ貸した日本の貨物船である。私も、これもやはりビルマへ渡る正金銀行員某氏と二人は船長 薩氏の斡旋で假裝船員になつて乗船を許されたのである。正金銀行員は高等船員の服を纏ひ、私はコックといふ名義の下に下層船員の服が當がはれた。設備の整へられた船室が二人のために供給せられる。

見れば朝明けの空には幽かに下弦の細い月が半島の山のあたりに沈まんとしてゐて、銀の砂がサラサラと音立て、波の上を漂うてゐる。ほの暗い波の上を一艘二艘の漁船が沖の漁から歸つて来る。——夜の霧がほのくく白く晴れて行く、空の星も影も薄くなり、東の空は今日の暑さを憶はせるやうに金光や赤光を雲一杯に擴けてゐる。眞上の空なごは青く青く水の如く澄んでゐる。波も穏かである。船はボーと鈍い聲をあけて午前七時ピナンの沖に錨をあげた。見送る友もない。十二月八日である。

波が波に續く大洋の中をベンガル灣の蒸暑い風に吹かれながら三日の船路を私の船はビルマに急いで居た。果々照りつける赤道直下の太陽は旅人の心臓の中に脈うつ血液までを乾さうとしてゐる。コックの服を着た下層船員の私は義理にも板場の手傳をしなければならぬ。「まあよろしう御座いますよ」私を尊敬してゐる同僚のコック君が言つてくれる。「ちや頼むよ」言つて私は自分に宛てられた船室へ歸つて来てベッドの上に横様に倒れて空想にふけつてゐる。私の心はもうビルマの金色

燦爛たるバゴダに遊んでゐるのだ。

船員の中に一人面白い人がゐた。その人はバクダット鐵道に人夫として雇はれて歌洲戰線地帯まで這入り込んだ冒險好きの人であつた。その中に毛唐の將校が餘り無理な要求をしたので、同志三十人ばかりを語らうてさうさう彼をぶん擲つた。將校は怒つて彼を捕縛し、コロンボ便船で彼を追ひ放つた。印度を方々食ひ詰めて歩いたが、今はこの船の下層船員をしてゐるさういふ。彼の過去も聞いて見れば矢張り漂流に漂流して歩いた放浪兒であつた。肩のあたりには大きな刀創が痕つてゐた。——その人が時偶私の船室へ遊びに来て、彼の過去の面白い捕話の一つ二つを語つては歸つて職についてゐた。

私も彼と語つてゐる中は何時でも元氣であつた。放浪兒はやはり放浪兒の心持をよく了解してゐた。「此の間獨り密航婦が這入り込んでゐるやがつてね。俺あ見付けたものだから、俺にさうか身體を委すから堪忍してくれ泣いて頼むのさ。可愛さうだつたので、其の儘にして置いてやつたよ。」

こんなこも彼は話してゐた。船の中へ忍びこんで薄暗い下層船室の中へ、荷物の蔭に隠れながら密航する。これらの醜業婦を思ふとき、私の心は暗い暗いもので一杯になつた。これから女郎屋なごへ行つても、決して無駄口や駄洒落は叩くまいと思つた。何とした可憐な身の上であらう。その結んで解けぬ思から夜毎にかはる仇し男の輕薄な幽動を見たら、みんなに心が痛むであらう。こんなこも

をもしきりに考へられて来る。

景光の岸河チワライ



海上三日の朝は明た。見るに、遙かの洋上から泥濘い海流が此方へ向けて流れてゐた。船員に聞けばイラワチ河の口から吐き出される濁流であるさういふ。それが河口より海上四十哩の距離であつた。私の心は陸上の近づいたさういふ嬉しい思で亂打されてゐた。ビルマの國——宗教詩を抱擁して印度の一角に眠つてゐる、その國を美しい妻を戀ふやうにして、私は慕うて行くのである。かの濁流の海の波を染めてゐるのを見る私の心は戀しい妻の吐息に接した思ひである。

暫くすゝと、海上遠くに幽かな陸地の影が行手に見えて来る。海鷗が赤兒のやうな急速しい聲を立て、飛び廻つてゐる。緩く、圓く羽音をたて、船の甲板の上までも群れて来る。キア、キア、ミ

啼きながら飛び廻つてゐる。人家のいよく近くなつて来たのを思はせる。船は今イラワヂ河の川口
幾哩の大江の最中を進んで行くのである。遠く舷の左右に當つて黒緒く見える兩岸には縁の草が茂
つてゐるであらう、アダツブ葺の家も立つてゐるであらう。船も三角の帆を張つてゐるであらう。併し
河幅は廣い。水は濁つてゐる。霧が立ち罩めてゐる。何物も見えない。

朝の三時頃河へさしかゝつたのである。四時頃汽笛と共に船は徐行し始めた。西洋人二人の水先案
内が雇ひ込まれる。この河は水流によつて時々水深が變化するので、座礁の憂をさける爲である。霧
が晴れて、太陽が現はれてみれば満目簫條とした一大平原で、その大平原の中を水を満々こ湛へて流
れてゐるのがこのイラワヂ河であるのだ。旅人はゆくりなくも支那の楊子江を思出さない譯には行か
なかつた。眼も遙かな一大平原。その大平原に米が實る。ビルマはなるほ米の實る國である。ラン
グン米の製産地である。船は大江の最中を通つて、上流四十哩ほこ溯つて行つた。其處には懐しい
詩の國の港が私を久しく待ち設けてゐた。この國の首都ラングンである。

・二〇 ラングン市所見

税關で身體検査をしただけで通してくれる。私共の渡航免狀には裏書をしてなかつたので、上陸を
許すか否うか、内心頗る疑懼の念に馴られて居たのであつたが、渡航免狀は見なかつた。下等船員風

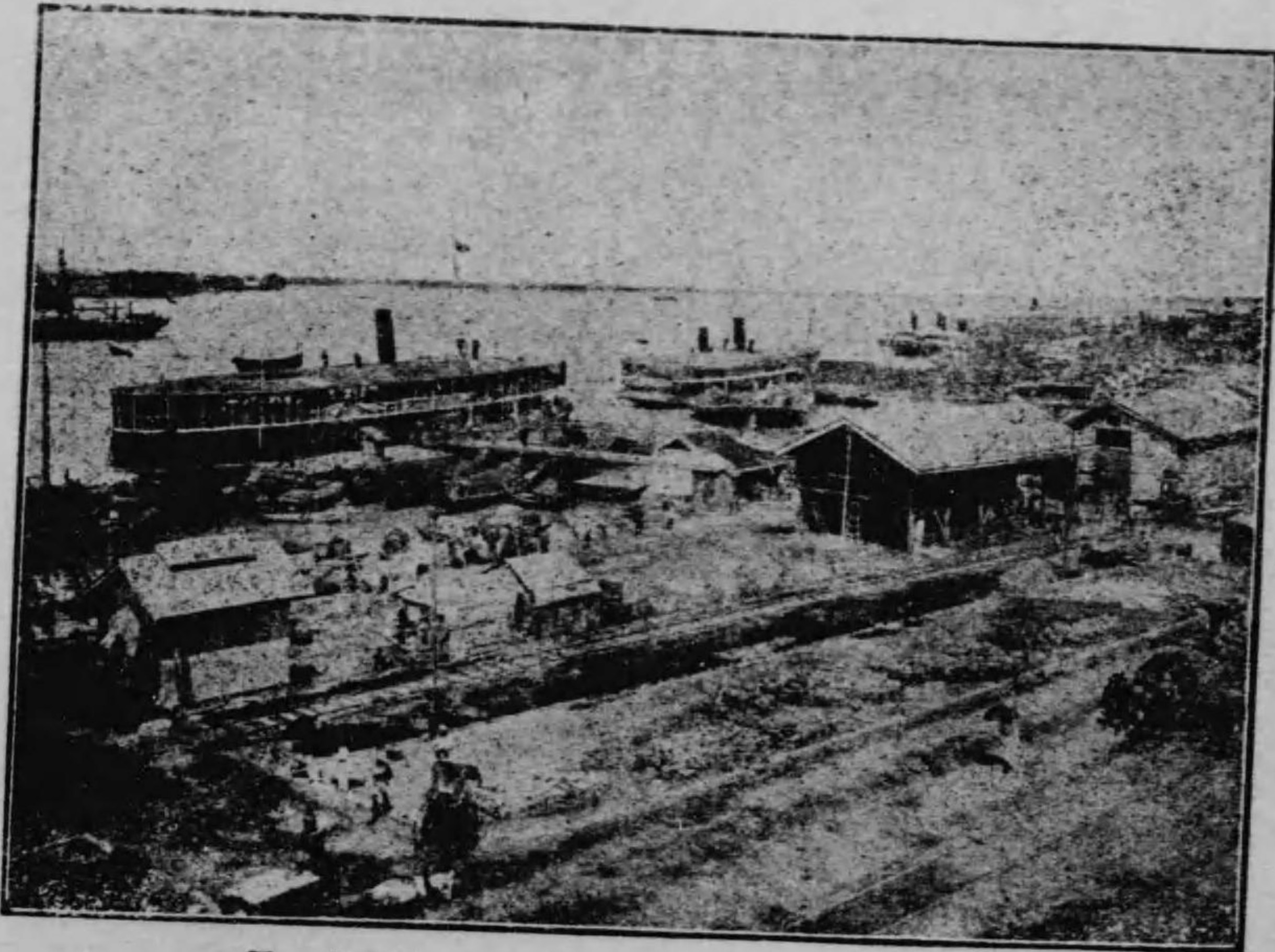
の私、高等船員姿の正金銀行員は相顧みて苦笑
を洩すのであつた。

船員の中に日光在の人が居た私の叔父も當時
宇都宮市の農學校長をしてゐたので、時偶叔父の
ミころへ遊びに行つた私は日光方面の地圖にも明
らかつた。二人の話は何時でも日光を中心にして
物語られた。二人は船を降りる頃は胸襟を披いて
話すほぎの仲になつてゐた。其の船員がラングン
を案内しよう云つてくれる。

ラングンは低い丘の上に立つてゐる街である。
丘の上にはホテルや郵便局なまが建つてゐた。私
は郵便局へ行つて、方々の知人にラングン到着を
知らせるために丘を登つて行つた。途中の購買市で
金を兩替へて貰つて来た。
同伴の船員は今夜は花街へ行かうと誘ふ。行つ



米 搗 小 屋



ラングン河口の光景

てもいふふいふ、それでは二十九番か三十番に待つて来てくれといひながら、彼はこの前の航路に洋服を注文して行つたことを思ひ出して洋服屋へ廻つて行つた。二十町ほぎ行くこ、日本人街があつた。女郎屋もその方面にあるのである。船員が名指した二十九番乃至三十番は一人の樓主によつて經營されてゐた。其處には彼の馴染の女があつた。その二十九番へ行つて見る。登樓けないかと言へば、すげなく「お這入りなさい」といふだけである自分の姿が船員風であり、未だ日は高かつたから無愛憎を言つたのも無理ではなかつた。花街を出て私はもこ来た道をホテルを探しに出た。行きがけに見て置いたシスターホテルと言ふのへ這入つた。懐中にはスマトラ島で

得た金ミビナン港で得た金ミがあつた。富有ではなかつたにしても、不足するほぎでもなかつた。

ホテルに携帶品を置いて私は日本人會の事務所へ行つて會長に會はうと思つて行つたが、この日本人會には會長は何時でも缺員になつてゐるこかで書記に會つた。歸途幕田といふ醫師の宅を訪ふた幕田氏は大層私を喜んで迎へてくれた。來意を告げ再會を期して別れた。萩尾といふ柔道二段宛に紹介があつたので、會ひに行つた。萩尾君も留守であつた。

ホテルへ歸つてベットに寢不足な頭腦を休養させてゐるこ、ヒョククリ例の船員がやつて來た。酒をのんだり、食事をしたりした後で衣服を改めて花街へ足を向けた。途中で船員は何を思つたか、船へ一度行つてくるこいつて走つた。大方置き忘れた金でもこりに行つたのであらう。

宵の口であるので、花街はまだ客足が薄かつた。私は方々で梯子飲みしたので、花街へ這入つたころは足も亂れてゐた。

新嘉坡の花街ミ異なつて花街の處々に印度人の黒つ奴や、ビルマ人の毒々しいのがゐる。印度人の黒いのが手首や足首に銀の腕輪を嵌めたり、耳朶にも小鼻にも足の指にも小さな銀環を嵌めこんだりして、黒い肌をそまに化粧一つしてゐない。こんな賤業をしてゐるのは印度人でも最も黒い種族のキリンといふのである。「樂隊を買ひに行かう」彼女等を買ひに行く嫖客の合言葉である。運動を始めるときや足に嵌めてゐる例の銀輪や、銀環が一時に鳴り出すからである。臭いたらありやしない。

ビルマの女郎屋もある。色は印度人のやうには黒くはないが、顔に白い白墨をぬり立てたり、黄色いこのこのやうな毒々しい粉をぬり立てたりしてゐる。白いサロンを着流して頭髮は一樣に日本の女の洗髪をくりくり巻きにしたやうな形をしてゐる。一回が一盾だといふ。

「箆棒奴、手前達のやうな臭いのを一盾も出すくらゐなら、色の白いのを買はあ。もつゝ負けるい。」
なご言ひながら素客して歩く。銀好みの樂隊は樂隊で「マスタール」か「ニツボン」なご言ひつて呼んでゐる。これらの中に一頭地をぬいて威張つてゐるのが日本の女郎である。毒々しい例の化粧ぶり、赤い派手なメリンスや縮緬の着物をきて容を引いてゐる。金魚のやうである。別段登樓つて見たくもないので素客して歩く。四十何番といふ家の前を通るこ、

「ね、ね、旦那。寄つて行らしやいよ。お友達の方も登樓つてゐらつしやいますからよ。」
ご言ふ。「友達つて誰だい」言つて、ひよつと覗くこ前程の船員である。「まあ、まあ」いふので登樓る。船員は大橋といふ名の人であつた。そこでサンク飲んで外へ出るこ、大橋君の馴染の女は花街の通りで遇つた。伴はれて三十番へ行く。

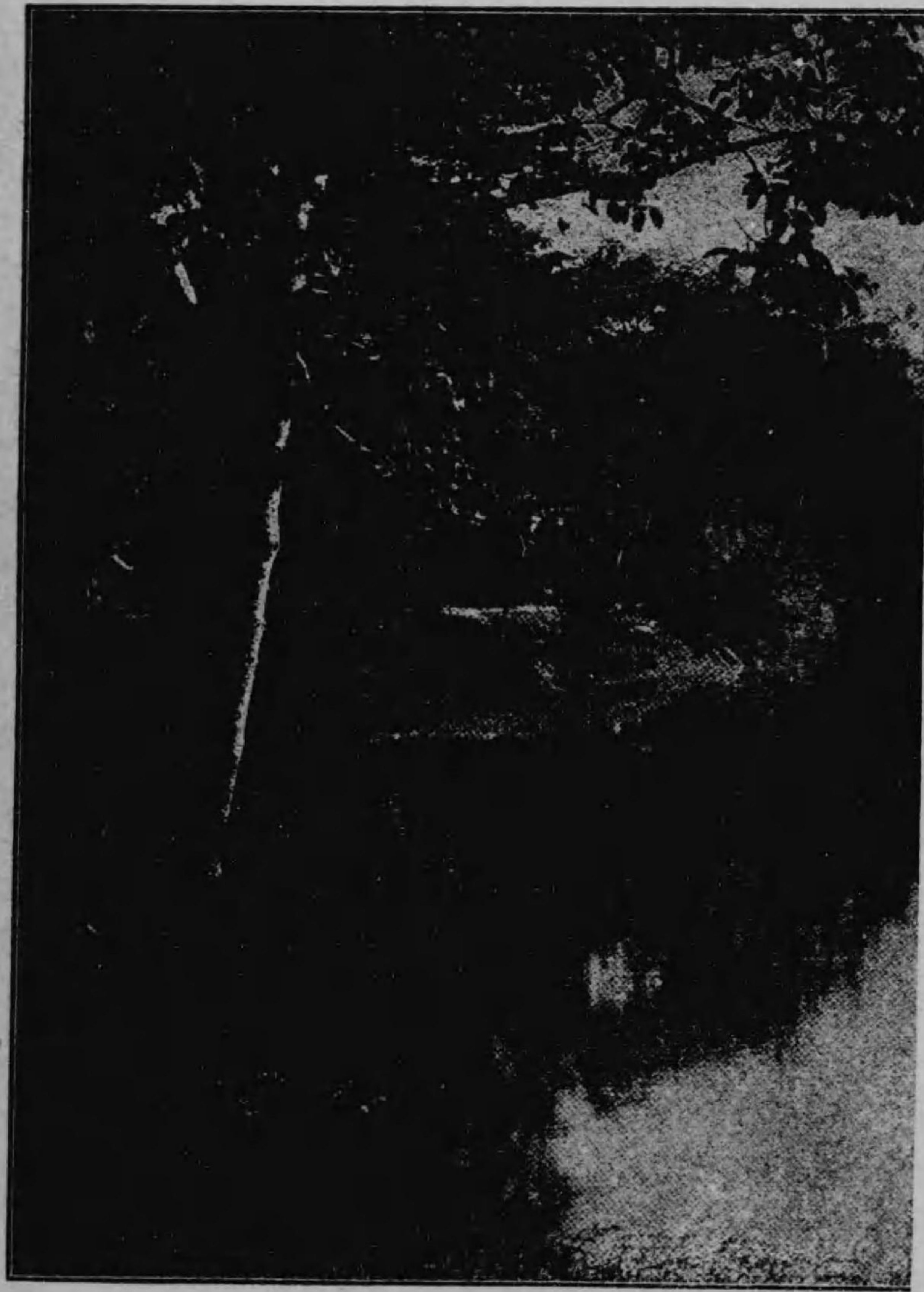
ホテルへ歸つて寢不足の、まだ酒の匂の残つてゐる頭腦を休ませようとしたが眠れない。そこで當地の顔役で花街方面で相當に男を賣つてゐる雜貨商の主人鳴海といふ人に會ふ。この人からこの町の日本人會が二つに分れてゐるこ、花街方面では別に共濟會といふのを起してゐるこ、旅行者の

F君でも、S君でも皆彼の世話になつてゐるこ、殊にS君の女をひつかけた話なきが出て興が何時までも盡きなかつた。歸途福島齒科醫を訪ふた。日本人會の牛耳をこつてゐる人で、醫業も手廣くやつてゐる。女醫二人に看護婦三四人置いてゐる。萩尾柔道二段にも會ふ。大層よこんで迎へてくれた。

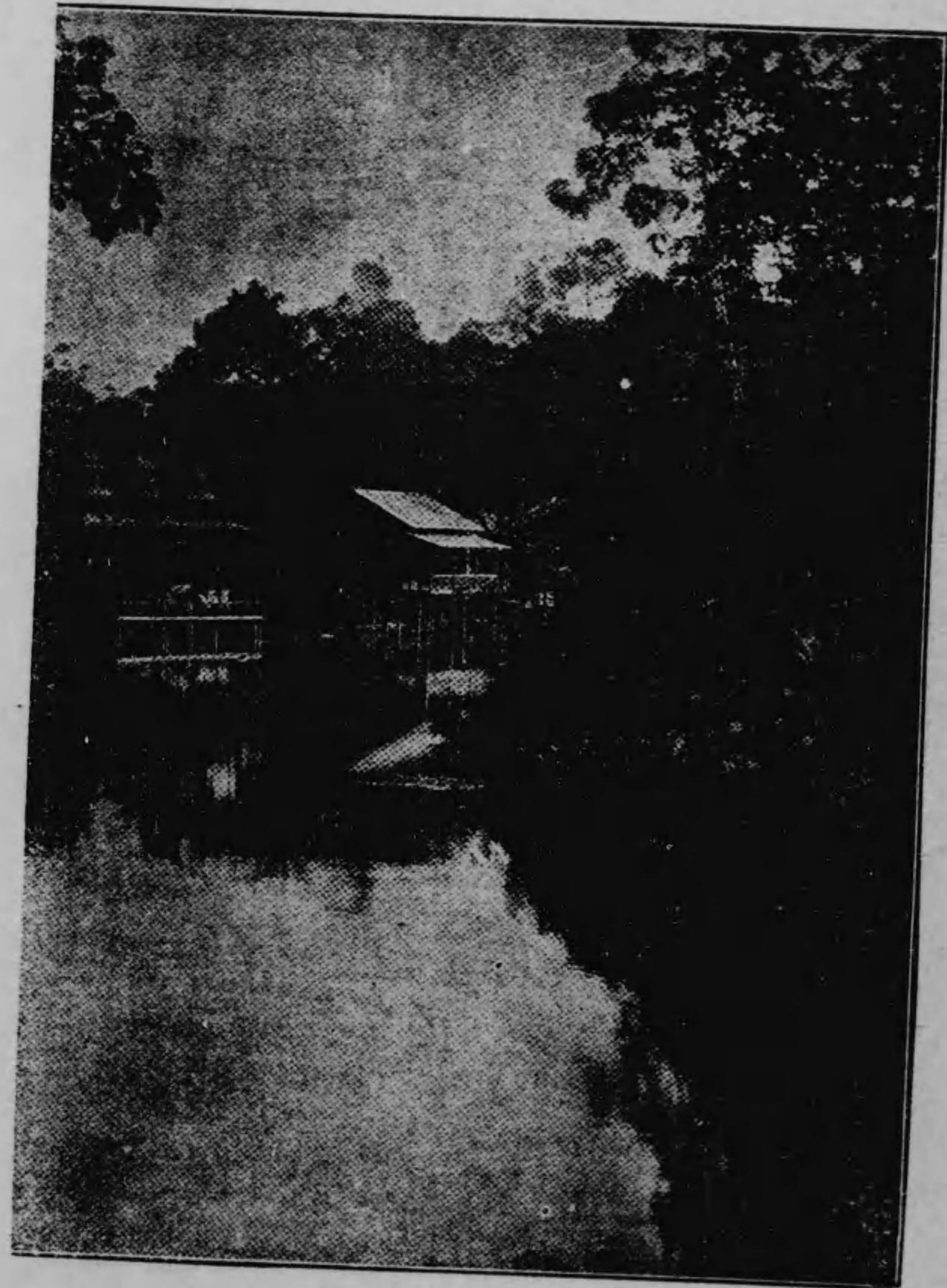
第三日も講演會の打合せの爲に方々の人々を訪ねて歩いた。街の處々には大きな寺院が多かつた。僧侶は佛の前に跪座して線香を焚いて經を讀んだりしてゐた。大理石の佛像が列をなして並んでゐるバゴダもあつた。殊に異様に感じたのは男も女も胃袋のやうな形状をした革袋バカラミ言ふのに水を入れて肩で運ぶのである。その袋の中へは三斗餘の水が這入るこいふ。富んだ家なきは苦力を使つてゐる。水道まで水をくみに行くのである。

ラングン市は車の都である。自動車や、馬車や、人力車や、白牛二頭で引いて行く運搬車なきの往來が實に多い。
其の日本人會の事務所で山田氏なきの斡旋の下に講演會を開くこなつた。集まつた人は大商店の店員や、醫者なきであつた。四十五盾得た。

第四日目に三井物産會社へ行つて昨晚の挨拶に行くこ、寸志こして二十盾くれる。行くさきさきで三井物産の御世話になるので辭退するこ、是非にこ言つて下すつた。其の晩鳴海氏の斡旋で共濟會



湖　　ユ　シ　ス　ル



　ホ　ト　ツ　レ　ク　ー　シ

以下の英文はアワーナーの一日外事新聞記者に會ひ話したるものをラン
マンの該外字紙上下發表せられるものなり

A 100,000 MILES WALKING TOUR.

JAPANESE WALKER IN BURMA

Among the interested observers at the Fancy Fair on Saturday while the tickets for the Monster Raffle were being drawn was a well set up khaki-clad Japanese with a placard hung on his chest bearing the legend that he was on a walking tour extending to 100,000 miles. The tourist gave his name as Mitsurn Torii and his age as 29. His home address, noted on a consular certificate issued to him in Singapore on September 1st, 1917, said he lived at No. 745, Udo-Udo-Machi Udo-gori, Kumamoto Ken, Tokio, Japan. He stated he started on his pedestrian tour on May 10th, 1914, from Tokio, and had travelled through China, Korea, Borneo, the Philippines, Singapore, Java, Sabanj and thence to Rangoon where he arrived about December 4th from Penang per steamer. He hopes to leave here about Thursday and intends walking through Burma. Then he goes to Calcutta by steamer and Bombay by train. He will, he stated, visit Aden, Port Said, Cairo and then intends going to England through neutral European countries. For the homeward tour he will walk through Russia, the two Americas and will stop at Chicago, San Francisco, and then go on to Japan. He hopes to finish by 1924. Asked how he maintained himself he said he accepted contributions from countrymen and others. In British North Borneo he went without food for 10 days. Then some Chinese acted the Good Samaritan. His story regarding his starvation appeared recently in the *Straits Times*. He stated he had kept good health from the time he went out on his tour. He was not married and had been educated in college in his native city.

でも講演會を開いて貰つた。百盾の講演料をくれた。

懷中が大分方々からの同情で温まつたので、その翌日から方々見物に歩く事にした。先づシーイダゴン、バゴタから見えて廻らうと思つてホテルを出る。途で赤十字社のアワーデーに這入つて見た。旅行者といふので入場料は無料であつた。それは湖水の傍の景勝の地をしめて、種々な模擬店や、興行をやつて一日を満遊するために赤十字社で催すのである。入場料の全部は兵を恤ふために戦地に送られるのである。鬱蒼と茂つた南國の常盤樹の中に青いすき通つた水の湖が淀んでゐる。湖の中には緑の深い島があつて、その緑の影も、遠くのバゴタの影もが靜かな水に映つてゐる。園内は掃き清められたやうに手が届いてゐる。朝は湖面一帯に霧がたつて何とも譬へやうのない靜謐な氣分であるといふ。

若い夫婦ものが樹蔭のベンチに腰を下して何か囁いてゐるものもあれば、稚い男や女の子が其處ら飛び廻つて歩いたり、ブランコをしたりして遊んでゐる。

私も其處でビルマの踊りを見たり、望遠鏡でヴィナスを覗いて見たりした。金色燦爛として輝いてゐるヴィナスは一塊の土芥になつて、私の眼の中に映つた。星は半分缺けてゐた。ランゲンの附近にはかゝる景勝の湖が多い。ローヤル湖、

シイクレット、ホールズ、シユー湖などはそれである。(二百四十二頁二百四十三頁の寫眞参照) そこを出てシヨゴダゴン塔へ行く。バコダは高さ二百五十尺ほざあつて、それには一面に金箔をぬつてある。金色燦然たるもので、夜は塔一面にイルミネーションが點く。

先づ四丁ほざ小高い丘を登つて行く、行手の椰子や檳榔樹のコンモリ茂つた中にその金光のバコダが見える。沿道の店にはビルマ人形や、バコダに貼る金箔や、佛に具へる花なごを賣つてゐる。花を賣つてゐるのは多くはビルマの美人である。「花を召しませ、花を召しませ」と英語で呼んでゐる。その金箔を買つて一枚一枚バコダや佛像に貼りつけるのである。塔の尖端なごは金の厚さが二寸にも及んでゐるさういふ。

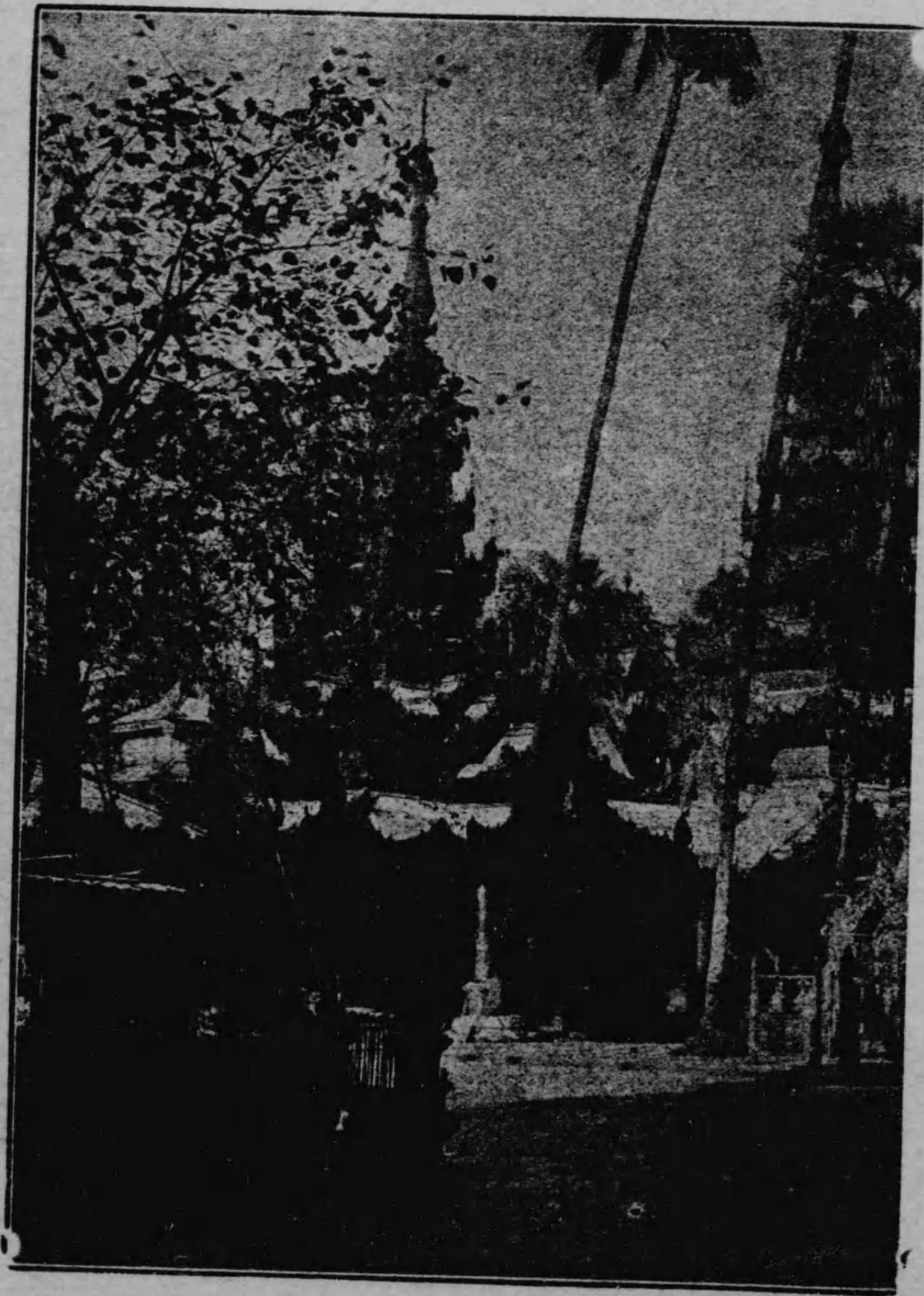
入口の門は眼も驚くばかり精巧なものである。特にその屋根に施された彫刻の美觀に至つては繊細を極めてゐる。門の傍に大きな金色の獅子が立つてゐる。日本で言へば仁王か、狛犬さいつた風のものである。其處へビルマの土人が一人來て「マスター」呼びかけて「一盾で御案内致しませう。」と言ふ。これを拒絶する「マスターは西洋人か」と問ふ。「俺は西洋人だ。」と英語で答へる「それで

花を買つてくれ、この花を胸にさして行けば、參觀するに便宜が多い」といつて強請む。「いくらだ」と訊けば「一盾」と返答する。ツウワッナー(八錢)に負けさせて私は中へ這入つて行つた。

西洋人(異教徒)を残して以外同じ宗教を奉じてゐるものは假令へ公侯も雖も履をこつて此處から奥へ這入るこゝになつてゐる。日本人で相當の權威ある要職についてゐる人でも靴をぬがせられるので、随分人を馬鹿にしてゐるに怒つて歸つて行く人が多いさういふ。バコダは圓錐形をした黄金に光る二百五十尺餘の大建築である。その半を埋めて金光赫灼たる佛像、黄光、赤光を放つてゐる金剛石の佛像、さては美人の肌を思はする透き通つた大理石の佛像それらが一面に並んでゐる。それらが一樣に慈悲の笑ひを浮べてゐる。



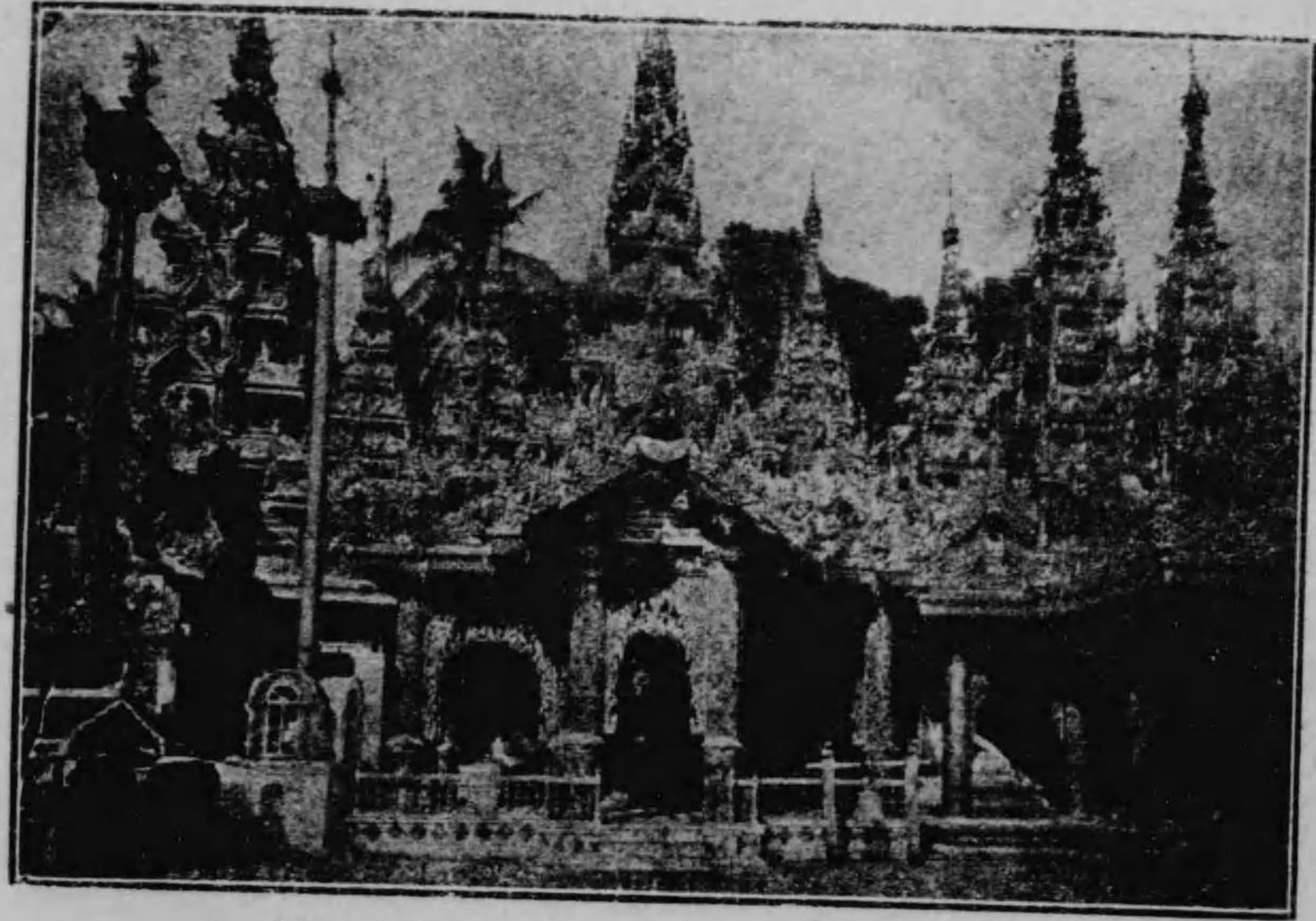
部 内 の ダ コ バ



観 外 の タ コ ハ



ン ゴ ダ ー ヨ シ



部 内 の ダ コ バ

四邊には檳榔樹なごが茂つてゐて、その縁が塔の金光に照り榮えてゐる。黄色な衣を片肩はづしに着てゐるビルマ僧が裸足でゆつたり其處いらを歩いてゐる。二百五十尺のこの塔を廻つて小さな塔が數知れぬほご立つてゐる。小さな塔は大きなのに似た形のものもあれば、或は支那式破風の舞ひ上つた建物もある。その中にはきまつて一つか、二つか、三つ位の金色燦然たる佛像が安置してある。羅馬正教會堂風な建物の傍には支那寺院風の赤い屋根が並んでゐる。さいふ風で、誠に輪奐の美をいめてゐる。日本の僧坊の空氣は陰暗な靜寂さが漲つてゐる。樹を見ても多くは杉こか樟こかいふ陰鬱な木が多いのに、この南國の堂塔にはそれこはまるで反對の雰圍氣を持つてゐる。茂つてゐる樹なごも

蔭の薄い檳榔樹なごである。

入口の門によく似た門があつたので、その門から外へ出た。ミころが、さうさう道を迷つて途方もないミころへ出てしまつた。十町足らずの傾斜を下つて見ても、一向ランゲン市らしい感じがない。穢い土人の家が道に沿つて立つてゐる。油断が出来ない。うっかりするこ、ビルマの土人は異人種を殺すからである。

この土人の家は南洋の諸島に比してアダツブの様なもので屋根を葺いてゐるか、床下もあんなに高くはなく、ヴェランダなごも張り出してはゐない。一體に軒が低くて穢苦しい。自働車の警笛の音を聞いて漸く道を拾つてランゲン市の塙末へ出た。私のホテルまでは二三哩もあつた。後で聞いて見れば、それは途方もないミころへ出たので、それではバコダの半分も見えて来たのではないと言はれた。その時こんな話も聞いた。

町の中央にあるバコダ——それを私は知人の家へ訪問する通り繩りに見て来たが——は最も古く、今から千三百年ほご以前に建築したもので、シーイ、ダゴン、バコダは今から千年ほご以前の建築になつたものである。その小さなバコダ(百四十尺)から一直線に見通し得られる位置にある。或る時、ビルマの王様が(其の友は王の名を逸してゐた)一夜、小さなバコダに關する夢を見られた。その小さなバコダから見ると、遙か彼方の丘(一直線に見渡せられ得る)がムク／＼と獨りでに搖り上つてゐる。

見てゐる中に次第々々に高くなつて行く。それにはひきかへ、自分の立つてゐる丘は見る見る地獄のやうな谷底深くへ窪んで行く。一刻——一刻——沈んで行く。佛様らは地の底深く没し去られて、地下から泣き聲のやうなものゝ洩れて来る。ハツミ氣着いて夢覺めた王様の全身には冷汗がビツシヨリと流れてゐた。王様は翌日直に小バコダの一直線に見え、る彼方の丘に使者をお差遣になつて地勢なごを篤に調べさせられた。使者は歸參直に伏奏して附近の口碑を物語つた。——丘は年々ムクムクと成長してゐる。王は昨夜の夢を佛のお告げとして直に工を起し、佛を招じて現在のバコダを作つたのである。それから千餘年の今日もなほ昔の口碑を眞實にして、この



部 内 の ダ コ バ

丘は千年以前に比して六十間の餘も高くなつてゐるのに、町の中の小さなバコダは其の頃より二十間も低くなつてゐる——いふこゝを信じてゐるものが多いこの事だ。附近の村々にはかうしたバコダが無数にある。殊にヴヰンカバ村にあるバコダなごはその大なるものである。煉瓦を以て造られた寢像の佛陀の像なごは百五十尺もある。輪奐の美を極めた社殿なごもある。一日の清遊に適してゐるので杖を曳くものが多い。其の翌日私はこゝへ來てから出來た知人に別れを告げてマンダレーに向け立つて行つた。十二月の十五日である。

ランゲン市は人口三十萬ほごの町である。英國がビルマ王國かも租借して居たのを、三十五年名實ともに所有地としてしまつた。印度太守の下に隸屬し、政廳によつて支配されてゐる。軍隊も一個師團ほご駐屯してゐるし、學校なごも建てゝゐる。道路、水道、電氣裝置等は印度政廳管下の大都市中最も設備が完成されてゐる。ビルマの物産は大低ランゲン市に集まり、商況は非常に活潑である。今一九一六年の輸出品及び輸出高を示せば左のやうなものである。

米	二百萬噸	二億盾
バラシンマツ	千七百噸	七十七萬盾
天 然 油	二千八百十二萬ゼローン	二百七十三萬盾
植物油(ギヤストグラウンド)	十二萬ゼローン	十七萬盾
椰子の實	七千二百噸	二百三十九萬盾

精蠟	二萬八千噸	百七十二萬盾
豆類	三萬六千五百噸	四百二十萬盾
獸皮	五百七十噸	五百六十萬盾
護謨	三千六百九十五噸	三百十萬盾
材木(チーク)	四十四百噸	五百六十八萬盾
煙草		百六十七萬盾

人口が少くない割合に輸出入總額は莫大に上り、輸出入總額十億盾以上に及んでゐるといふ。輸入の主なる國は英吉利は最も多く日本、北米合衆國といふ順序である。

日本より此の港に輸入せらるゝ物貨は燐寸、綿布、金屬、食料品等主要なるもので、總額二千二百六十七千盾に上つてゐる。殊に燐寸の殆ど全部には Made in Japan の商標を打つてある。一九一六年の此の國輸入の燐寸の總額は二百六万盾の中日本製燐寸が百七十万盾を占めてゐる。

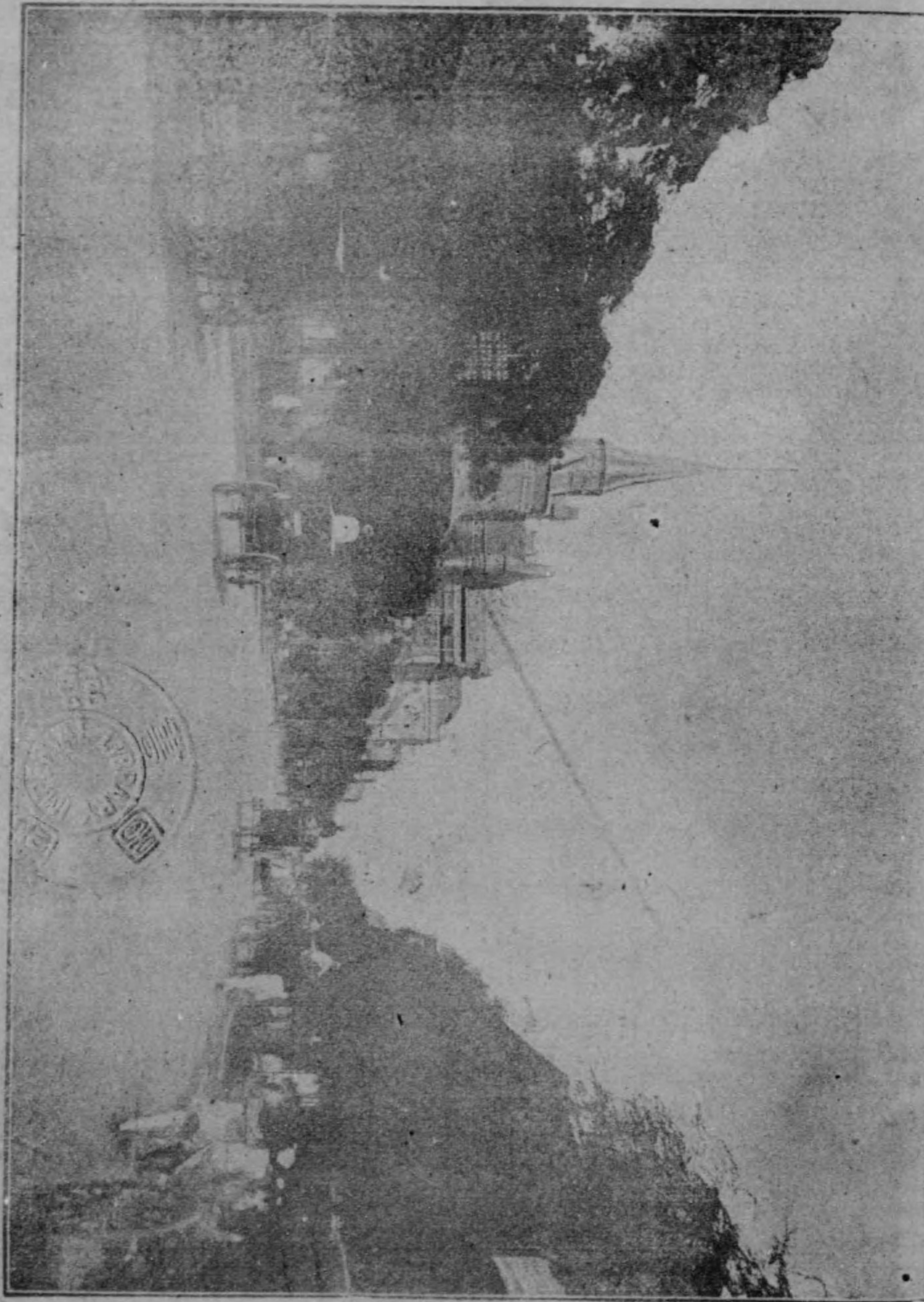
Made in Japan の呼び聲はこの町では大變評判がいゝ。雜貨、洋物擬ひなども大層な聲價である。ボンベ一商人なきで日本製品なきを店頭に並べて、Made in Japan といふ看板を大びらにあげてゐる。

日本人も此の街へかなり這入り込んでゐる。四百五十人ほざるといふ。三井、正金なきの大商店から、數十軒の雜貨商、藥店、醫師、齒科醫なきがある。女郎屋なきも四十二軒ほざる。特にこの町

の雜貨商はビルマ一圓の雜貨商の中心をなしてゐる。各地の雜貨商人はこの雜貨商人の手を経て供給せられてゐる。

宗教といふ人間の根本的要求をビルマ人日本人は同一にしてゐるといふことを唯一の攪み所として、彼等に親和しこの物産の豊富なビルマに移住するといふことは日本人移民の今後に残された問題である。もはや半島には移民の發展し得べき餘地は餘り多くない。半島移住を志すやうな人であつたらこのビルマに移住するにしても決して失望するやうなことはない。雜貨商なきは今後最も有望である。

この日本人會は意志の素通を缺いてゐるところは餘りないと思ふ。何處にでもある正業者不正業者との葛藤であるけれども、シンガポールにもピナンにも葛藤があるにはあつても連絡はある。然るに此の町の日本人會は全然分離してゐる。其間には何等の連絡がない。正業者を代表する日本人會は、不正業者(?)を代表する日本人共濟會は明かに分離してゐる。領事館のないランゲンには日本人會は唯一の日本人對印度政廳を結びつける機關である。印度政廳に對してなす日本人の請願は日々日本人會の手を経て申達される。印度政廳は日本人會の手を経て布告を傳達するのである。其の在住日本人に對して絶対の權力を有する日本人會がかくの如く相嫉視、反目するといふことは果して策を得たことであらうか。噂に聞けば日本人會は共濟會員に對してかなり偏頗な方法や手段を



通大の市ナガサキ



院僧ミ僧教佛

さるころが間々あるといふ。日本人は何處へ行つても相嫉視し、反目しなければならぬ國民であるのか。これでは何時まで経つても大國民となることは出来まいと思ふ。

ランゲン市の風俗について二三書いて見たいと思ふ。元來ランゲン市は寺院を中心として發達した町である。バコダあたりの僧が朝と晩と二度小僧を伴つて、大きな托鉢を持たせて布施を受けに出る。その風俗は黄色な一枚の布を以て全身を蔽ひ、左肩から右脇にまた一枚の布を巻いてゐる。然し右肩は何時の場合にも露出してゐなければならぬ。もし古代の佛敎僧の服装にその面影をこめてゐるにすれば、(事實釋尊や其他十六羅漢などの佛像に残されてゐる服装の姿を見ることルマ僧にそれが残つてゐるやうに思はれてならぬ



佛 教 僧 尼 院

さるこゝが間々あるといふ。日本人は何處へ行つても相嫉視し、反目しなければならぬ國民であるのか。これでは何時まで経つても大國民なるこゝは出来まいと思ふ。

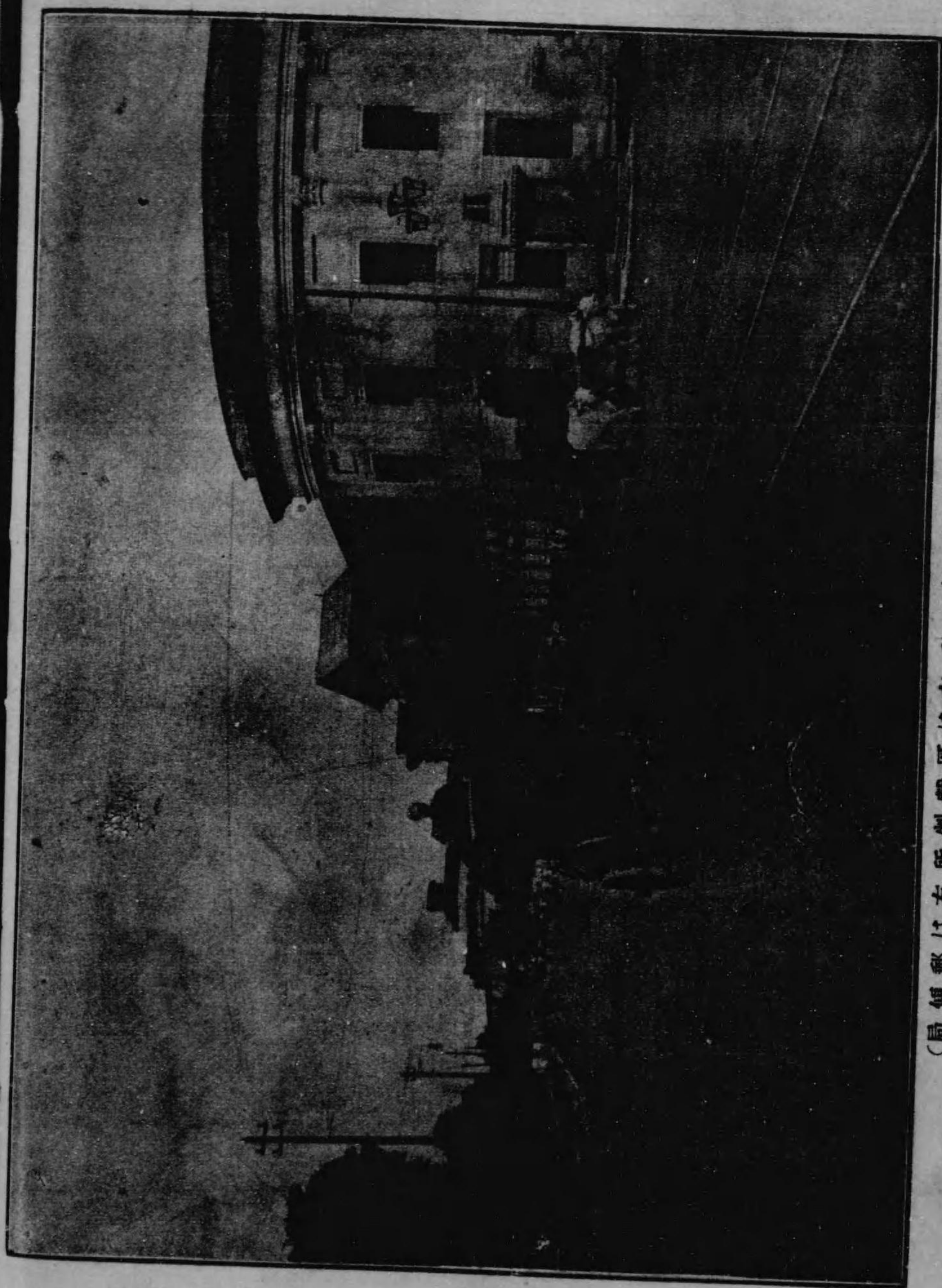
ランゲン市の風俗について二三書いて見たいと思ふ。元來ランゲン市は寺院を中心として發達した町である。バコダあたりの僧が朝と晩と二度小僧を伴つて、大きな托鉢を持たせて布施を受けに出る。その風俗は黄色な一枚の布を以て全身を蔽ひ、左肩から右脇にまた一枚の布を巻いてゐる。然し右肩は何時の場合にも露出してゐなければならぬ。もし古代の佛教僧の服装にその面影をこゝめてゐるゝすれば（事實釋尊や其の他十六羅漢などの佛像に残されてゐる服装のあゝを見るゝビルマ僧にそれが残つてゐるやうに思はれてならぬ

(237)

い) 日本なきの僧族の服装は餘程贅澤になつてゐると思ふ。衣なきも種々な贅澤な材料を用ひ、袈裟なきといふ贅澤なものすらつけてゐる。ビルマ僧の左肩から右脇腹に垂れてゐる布は明かに日本の僧侶の袈裟の原型だ。無論頭を圓く剃つてゐる。また僧侶の權威といふものも大したもの、如何に高位高官の人も跪いて物を申し、帝王もその玉座を譲つて彼等を上座に迎へるといふ。

僧侶は物質的慾望——殊に金に對して淡泊であらねばならないといふことは僧侶の一般に通じての妥當性であらうが、それにしてもビルマの僧には一つの奇習がある。假令へば町へ買物に行くことすら不常は小僧を伴つて行く。小僧は師匠の用要のものに對して一々金を拂つてやる。金主は小僧が勤めてゐるやうなものである。もしも小僧の居ない場合、伴はない場合は就中面白い。老僧は侍僧に所要の金を袋に包むことを命ずる。そしてそれを持って商店へ行く。店員はその懐の中の金を改めて所要の物品を渡す。剩り錢があれば父元の通り店員に包ませてそれを持ち歸る。微頭微尾金錢なきは手にすべきものでないと思つてゐる。かと思ふに、佛まで賣つて酒や女に耽れる賣僧も居る。併し一般に戒を持つることが嚴重である。女と看まは絶対に食はないといふのが戒の第一段である。ビルマ王朝時代には人がももしも他人のものを盗んだとする。官廷に呼ばれて王が裁決する。其の時王は護嚴な口吻でかう訊す。

「お、は何故、他人の物を盗んだりなきしたのか。」

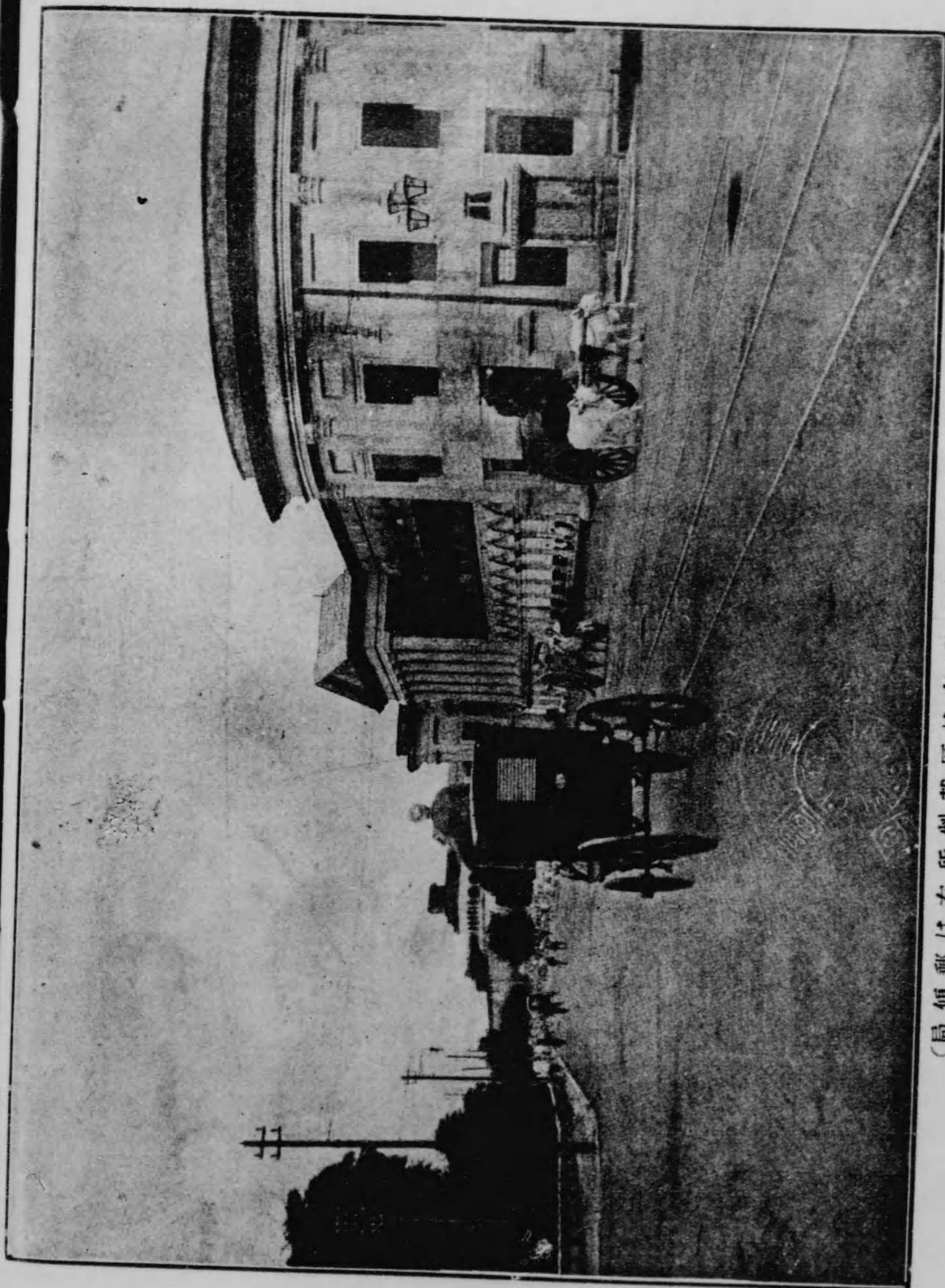


ウラメンの海軍通商(向つて左は左區裁判所、右は郵便局)

い) 日本なごの僧族の服装は餘程贅澤になつてゐると思ふ。衣なごも種々な贅澤な材料を用ひ、袈裟なごもいふ贅澤なものすらつけてゐる。ビルマ僧の左肩から右脇腹に垂れてゐる布は明かに日本の僧侶の袈裟の原型だ。無論頭を圓く剃つてゐる。また僧侶の權威さういふものも大したもので、如何に高位高官の人も跪いて物を申し、帝王もその玉座を譲つて彼等を上座に迎へるさういふ。

僧侶は物質的慾望——殊に金に對して淡泊であらねばならぬさういふことは僧侶の一般に通じての妥當性であらうが、それにしてもビルマの僧には一つの奇習がある。假令へば町へ買物に行くさうな不常は小僧を伴つて行く。小僧は師匠の用要のものに對して一々金を拂つてやる。金主は小僧が勤めてゐるやうなものである。もしも小僧の居ない場合、伴はない場合は就中面白い。老僧は侍僧に所要の金を袋に包むこゝを命ずる。そしてそれを持つて商店へ行く。店員はその懐の中の金を改めて所要の物品を渡す。剩り錢があれば父元の通り店員に包ませてそれを持ち歸る。徹頭徹尾金錢なごは手にすべきものでないと思つてゐる。かと思ふに、佛まで賣つて酒や女に耽れる賣僧も居る。併し一般に戒を持つてゐるこゝが嚴重である。女ご着きには絶対に食はないさういふのが戒の第一段である。ビルマ王朝時代には人がもしも他人のものを盗んだとする。宮廷に呼ばれて王が裁決する。其の時王は謹嚴な口吻でかう訊す。

「お、は何故、他人の物を盗んだりなごしたのか。」



ウラメグの海岸通(向つて左は區裁判所、右は郵便局)

ぎを纏ふ。不常者は大低白いのであるが、外着は種々な色をさりざりに用ひる。男は一度は僧籍に身



人 婦 マ ル ビ

ごんなに怒るであらう——この觀念が彼等に軍備といふものを整頓させなかつた従つて城砦なきいふものゝ必要がなかつた。男は頭に髪を結つてゐて白い、或は紅い、或は黒い布を以て巻いてゐる。上着は筒袖の洋服の上着に似たものを着てゐる、袴は日本の女の腰巻のやうなものを穿つてゐる。ビルマ人は一般に華美好みで時折り絹布な

「佛にさし上げる供物のお金も御座いませんで。」と犯人が答へる。

「さうか。お前の志はなるほご立派だ。けれども他人の物までこつて佛の供養しても、佛は喜ばれない。如何か云へば、物を盗むといふことを佛は大層忌みきらはれるからである。お前の手で働いたものを佛に供へなさい。それが何よりの佛に對する供養ぢや。」

かう言はれて彼は無罪放免となるのである。一度や二度や三度はかう言へば屹度罪せられぬ。こんなことをすれば佛は對してすまない。佛の眼は何時でも見て御座る——いふ觀念は彼等に法律といふものを制定させなかつた。兵を擧げて他の町に火をかける、或は占領する。火をかけられた町、占領せられた町には一



子弟佛と侶僧るす義講を典佛

を置かないと、男の仲間入が出来ない、結婚も許されない。富豪の子供などは大抵の場合澤山の金銀を費つて比較的安易な修業法によつて僧侶となる。これを以て見ても、ビルマは如何に宗教萬能の國であるか知れる。女も模様の華美な印度更紗などのサロンを着込んで、結髪も前髪をさらさない束髪にしてゐる。長い支那風な櫛を束ねた髪にさしてゐるものもある。手首に金銀の環を嵌めたり、首飾したりしてゐるものもある。併しこれらは大抵相當の身分のあるもので、下層民になれば男でも女でも腰を隠してゐるくらゐなもので、素裸のものも居る。

併しビルマ人は一般に温情で優雅に出来てゐる。

ビルマの人種を分つて四種族とする。其の外



民 層 下 の マ ル ビ

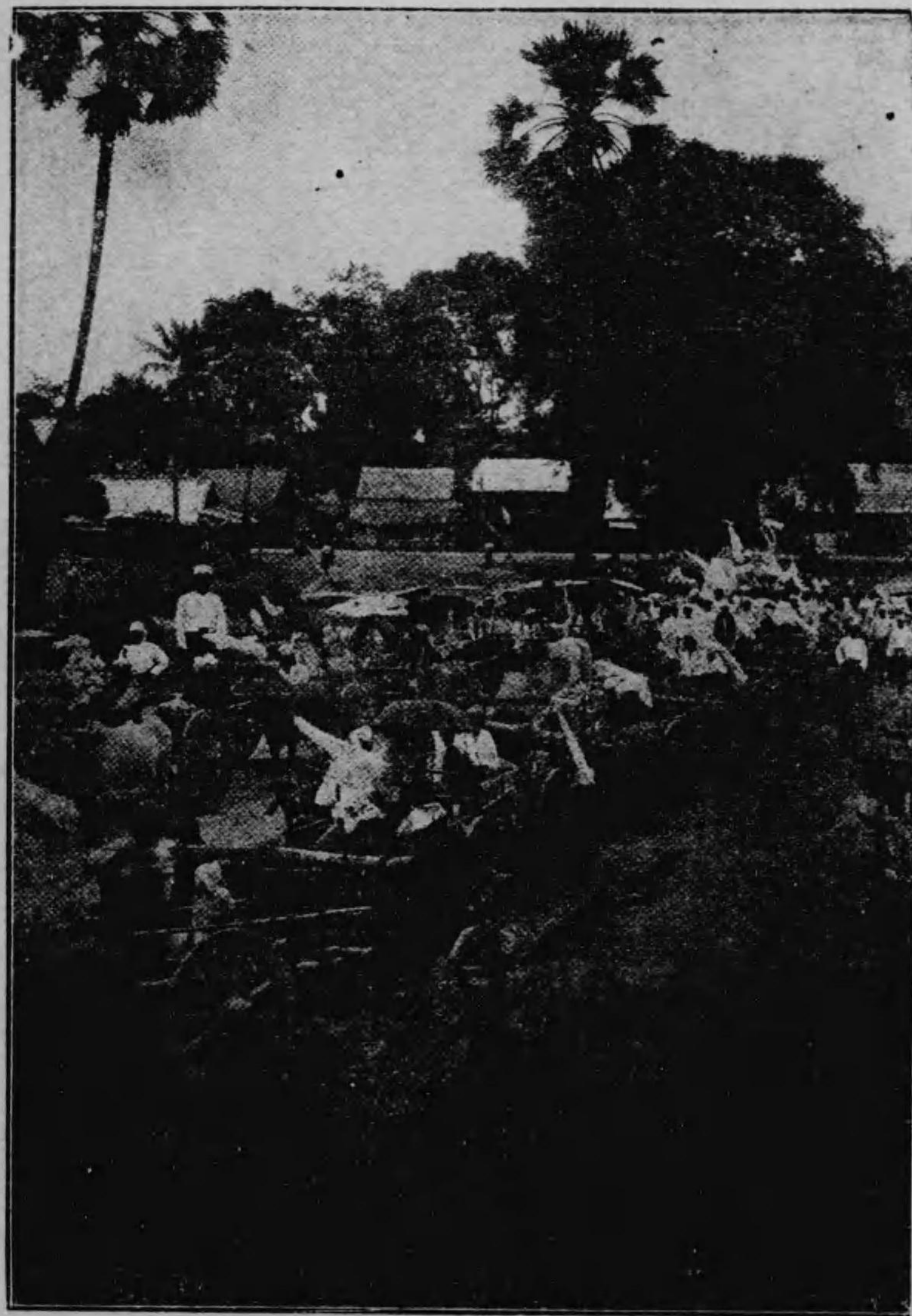
に食人種でワス族といふのが北方の山中に住んでゐる。今でも異種族の首を狩ることを以て一種の誇



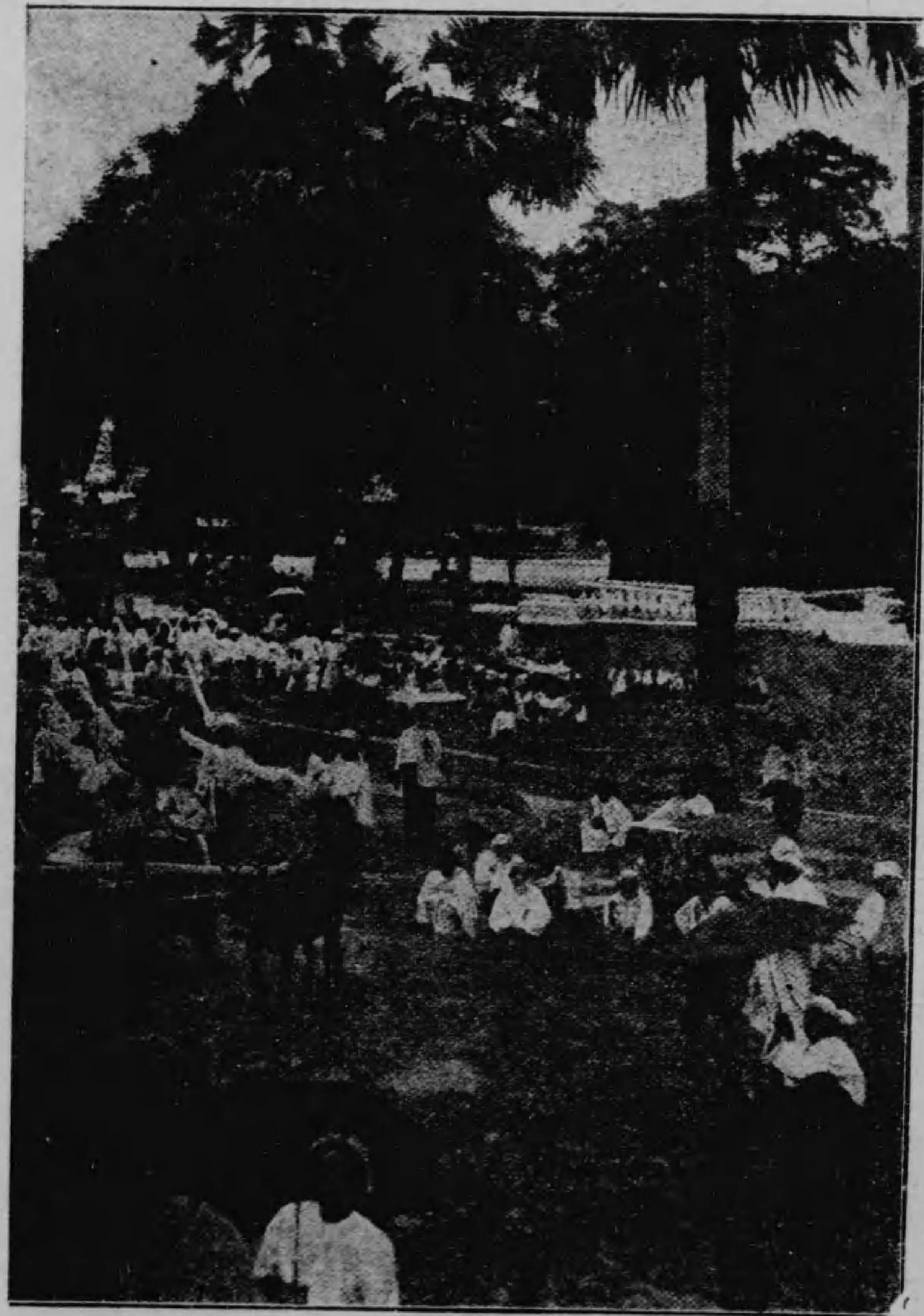
族 ス ワ 種 人 食

求めてこれに石油の這入つてゐる罫一つ、罫一本、米一俵其の外僧の日用品、或は食糧品を買ひ整へて、これを葬儀の終つた後で僧侶に贈るのである。その品物が数あればあるほど、完全してゐれば

葬式についてビルマは奇らしい習はしがある。それは葬儀に澤山の僧侶を呼んで死人に供養するを以て唯一の誇とする事だ。そしてその禮として死人の遺産の半分を僧侶に贈る。その方法は牛車一臺を



車 牛 る 贈 に



侶 僧 折 の 式 葬



(一) 景光の村農マルビ

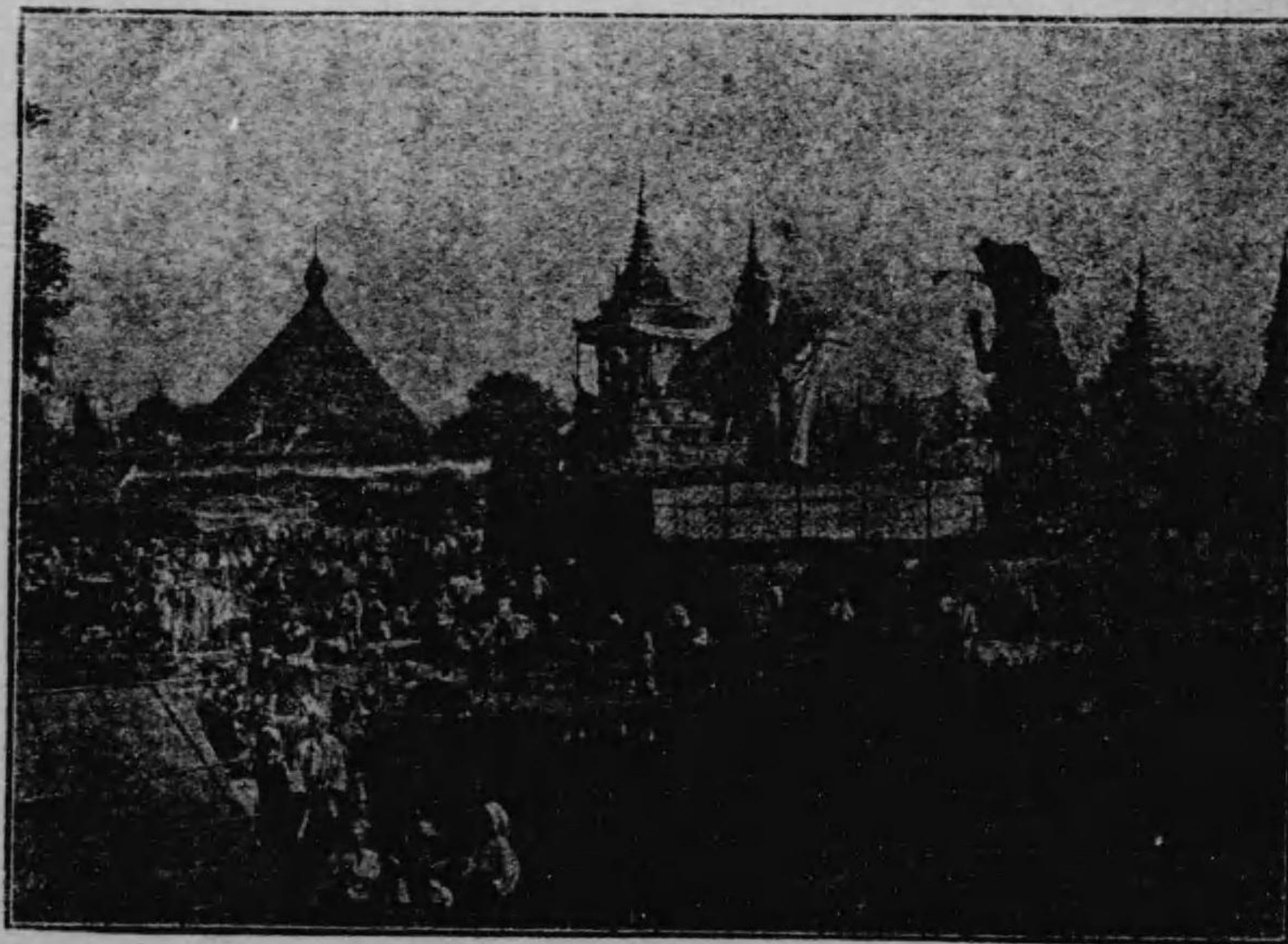
連続してゐる。森の間から、檳榔樹や、椰子の葉蔭から思ひ設けなくバコダが見えたり、廢寺が見えたり、古墳が見えたりする。透き通るやうなバコダや、古色蒼然たる古墳が何處までも何處までも連なつてゐる。森のある限り、岡のある限り、人家のある限りそれが連なつてゐる。其の間にゆつたりと流れてゐる水路がある。漣漣に便するためイラワヂ河なごをひいたものである。五町行つては一つ、十町行つては一つ、こいふ風に飛び／＼に村がある。檳榔樹や椰子や、南國の名も知らぬ鬱蒼たる樹の下蔭にアダブ葺の屋根が家が並んでゐる。南洋のやうに屋根も急傾斜ではなく、床も高くない。竹を破つて網代に組んだものを壁の代りに用ひ竹を隙間なく並べ蔦を以て結へて床を拵へてゐる。年に

居るほぎ、其の家は富裕な家として尊敬されるのである。その贈物は僧侶の數に比例して多く或は少く用意される。立派な葬儀には長い牛車の贈物を見ようとして沿道は堵のやうな人出である。遺骸は大低街の廣場に送り出されて、其處で火葬にされる。その火葬の光景を見ようとして見物の人々は方々から寄り集まり犇めくのであるそれはビルマ唯一の奇觀である。

二二 マンダレーの黄光

一、ベーグ

十二月十五日の朝の八時に私はラングンの町を離れて、ベーグに通ずる田舎道を歩いて居た一望際涯ない平野である。山一つ見えない。刈り上げた田圃はこの年の收穫を語り顔に、黒々



景光の場葬火

二回の收穫を終つて農家は閑散な時である。老幼が前通りへ出て話し合つたり、戯け合つたりしてゐる。旅行者が通つて行くに、後から後から女や子供が追つて来る。男は立つてにこ／＼笑ひながら私の行き過ぎるのを見てゐる。ビルマ人は優しい國民である。彼等はこの温雅のために國を滅ぼしてしまつたのである。彼等にこの温情のある限り、印度のやうな革命も起るまい。彼等は亡國の悲調を歌ふ口で、田園の讚歌を歌うてゐる

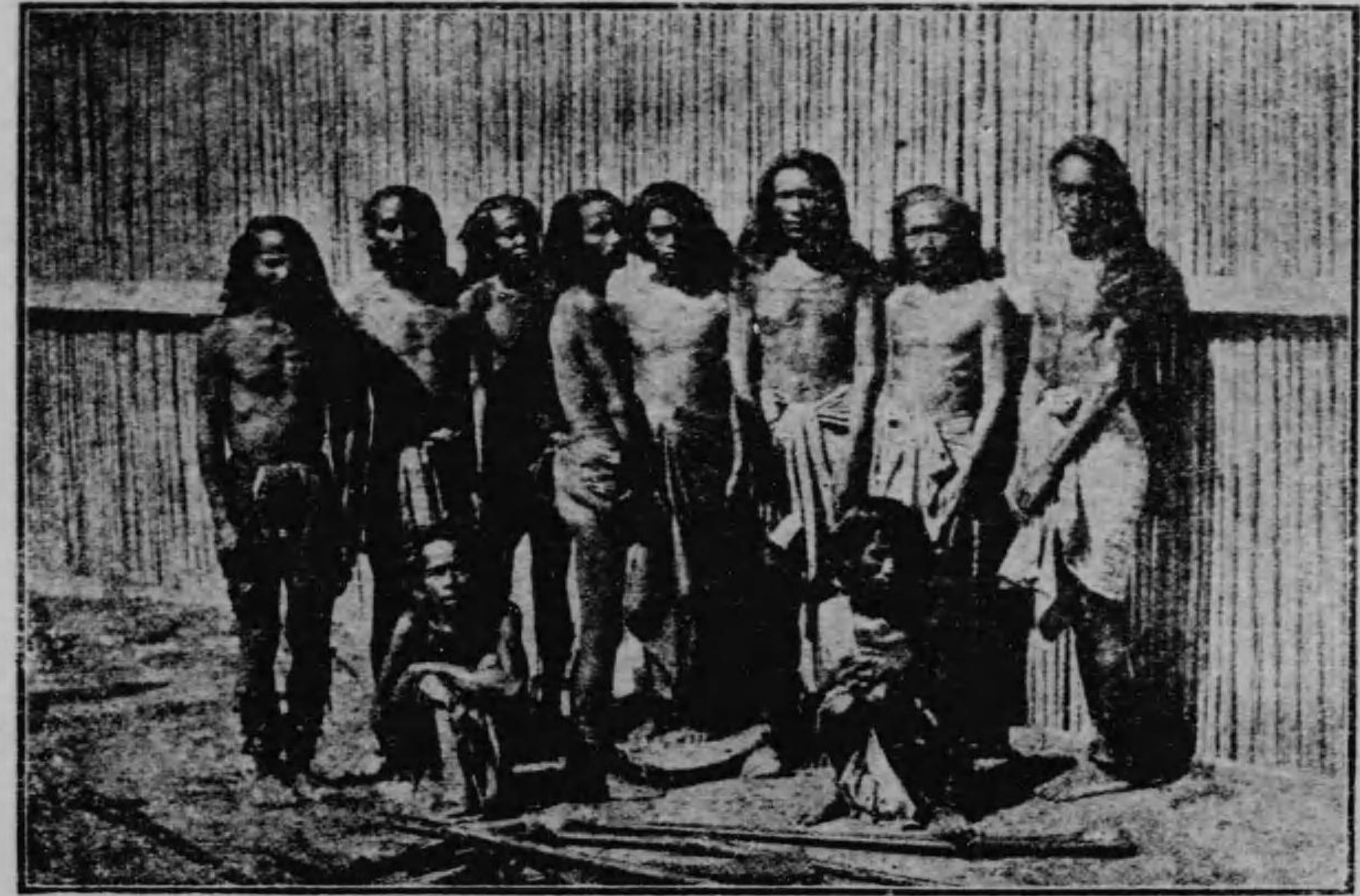
併しビルマにも以前には少數の志士はないではなかつた。千九百十五年印度本土に於てラホール陰謀が着々其の歩を進めてゐる頃、新嘉坡でも叛兵が狼火をあげた。これを聞き知つたビルマの志士はさうして凝こしてゐるこゝが出来よう。遂に千九百十五年の八月にシャン人ニューボー、タ



(二) 景光の村農マルビ

ハイク等がカチン地方を遊説してカチン人をワワンに糾合してシンボイの糧食廠を襲はうとした。工兵第五十四中隊の一部を衝突して撃退せられたけれども敢へて屈しない。貢米を盗んで糧食に充てる。賞を懸けて地方長官の殺害を使喚する。事漸く成らうとして、遂にワワンで土民軍隊のために包圍せられ、首領以下捕へられて刑に處せられた。

一九一六年の始めになつて革命黨の、ルマに於ける活動が漸く繁忙になつて、ハルナム、スイング以下六名の志士が、官憲の目を逃れようが爲にシヤムを迂回してビルマに這入つて行き、各地に遊説して盛に排英の運動を起し、軍隊に接近して叛亂を勧告したり、シヤム在留の同志と連絡して、密かに武器、彈藥を輸入したり、雲南よりルマに至る通路を踏査して他日の用に資せようしたり、經營慘憺たるものがあつたが、未だ事をあけずして計畫また／＼露顯し、首謀者以下多數の同志が捕縛された。死刑者が七名、終身流刑が五名、以下十數名の處刑者を出した。マンダレー陰謀事件と呼ばぶものは即ちこれである。——こんなことを思ひ起しながら私はマンダレーに通ずる路を農家を覗き覗き、急いでゐるのである。併し無智な彼等は何にもしらずに泰平を謳歌してゐる。一人の旅行者が通れば大事件でもあるやうに老幼男女が前後左右から取り巻くのである。この温情、この平和がある限りビルマ國は永遠に英國治下に眠つてゐるであらう。英國のため、無智な彼等のため幸福せざるを得ない。



囚はれたる人々

言ひ落してゐるが、私はランゲン市を離れる間に、間もなく私の後に一人の印度巡查が忍び足で、見え隠れについて来た。疑ひもなく私はまた軍事探偵として英國官憲に睨まれたのである。「油断のなぬ人間」を目星をつけられたのである。

ベークへ着いたのは午の十一時頃であつた。イラワチ河の支流のほとりに立つてゐる小さな田舎町である。長い橋を渡つて土人の家で日本人の宿屋を尋ねて見る。「日本人の宿屋はないが女郎屋はある。」といつて教へてくれる。教へられた儘に道をこつてその家へ行く。極小いふ年増の婆さんが樓主である。同じ熊本の人であつたので、其處へ腰を下さして貰ふこととした。樓主と種々話してゐるに、Sといふ旅行者は去年一年のあまりもこの婆さんに厄介になつて、嬪夫同様なことをやつ

てゐたといふことが知れた。お午をそこで御馳走になつた。

私のベークへ来た目的は有名な涅槃像を以て来たのである。涅槃像は町を距る七八町のミころにある。婆さんに教へられたまゝの道を行つたつもりであるのに、さう道を迷つたか十町行つても十五町行つても見當りさうもない。土人に聞いて見ても、言葉が通じないので解らない。私は無論ビルマ語は話せなかつた。

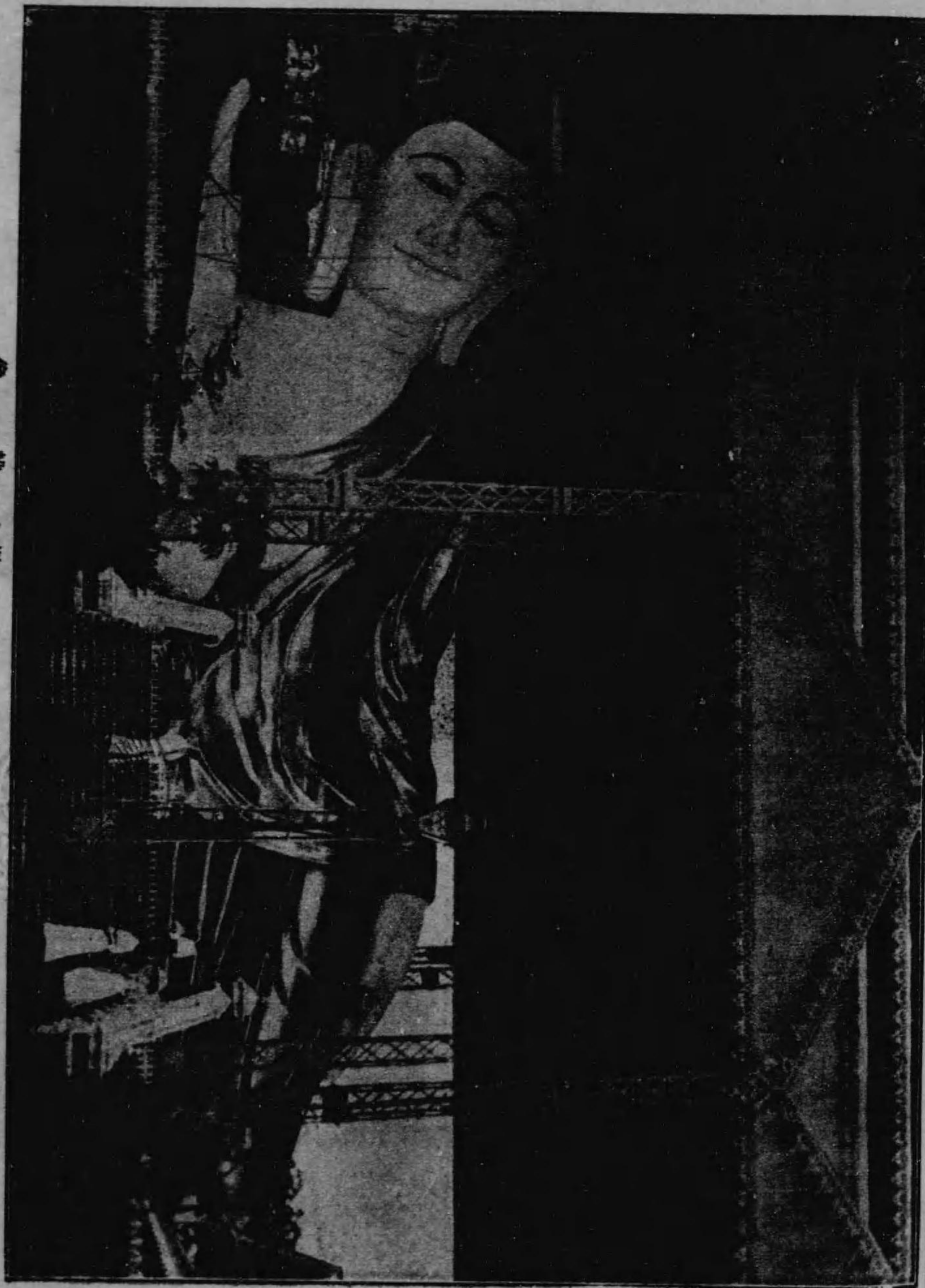
足にまかせて歩き廻つたので、歸途すらよく知つてゐない。行くにも歸るにも途法がないので、道傍に蹲つて休んでゐるに、其處へビルマの僧が一人きた。言葉は無論通じないので、寢像の姿を身振りで示したり佛の象徴を手を合して見せたりして漸く諒解させた。その僧は元來た道をひき返して涅槃像へ伴つて行つてくれた。それから五六丁ほどもあつた。私はその僧の徳に篤いのに驚いてしまつた。佛を信ずる人であるに見れば、彼等はみんな人にも慈悲を惜しまないといふ。日本の僧侶で——特に淨土眞宗あたりの坊主にこんなのが幾人居るに言ひたい。彼等は戒を守ることに實に厳固であるといふ。これに比すれば淨土眞宗(他宗は多くを知らぬ)などは破戒僧を以て満たされた宗派であるといつても過言ではあるまい。

涅槃像は千年ほぎ以前のものだと言ひ傳へられてゐる。なるほぎその貼りつけられた金箔はいくらか生々した點はないではないが、顔や、耳や、手足、衣の彫刻なきには原始的な佛像の面影はないで

はない。而も近代につくられた模倣では決してない。然るにこれはまた何ぞした時代錯誤であらう。其の像の堂宇をなしてゐる建物の梁木や柱は鐵骨で出来てゐるではないか。古色蒼然とした原始の佛像を見んきて来た旅人は啞然として言ふところを知らないのである。人は佛を欺くといふことがあつても、佛は人を欺いたといふことを知らない。私はこの滑稽な思ひつきに次いで憤怒の念すら出て来た。人を馬鹿にしてゐる。佛か人を馬鹿にしてゐては逆も濟度が出来まいと思つて、そこそこ其處を出てしまつた。金箔を貼つてゐた僧侶はしきりに經文を唱へてゐたが、見向きもせずに出てしまつたやゝ下手に堂守の爺の家があつた。其處へ行つて像に附帯して上古から遺つてゐる佛像や、太鼓なきを見た。それには如何様古色が黒く錆び残つてゐる。旅人の渴はかくして漸く癒えたのである。

期待を裏切られたので、私の心持は種かでなかつた。妻さんのところへ歸つて来て、其の晩徒歩で立つて行かうとした。妻さんは夜路の危険であること、これからマンダレーまでは何も見るものがないこと、私が兩三日の寒さで感冒をひいてゐることなきを一々語りたてゝ宿泊を迫つた。けれども、無情なく拒絶つて汽車で出發せよとした。一つはこの妻さんに對するいやな思出があつたこと、今一つは印度行を急いでゐるからである。今年一杯には印度へ這入つて行き度い。

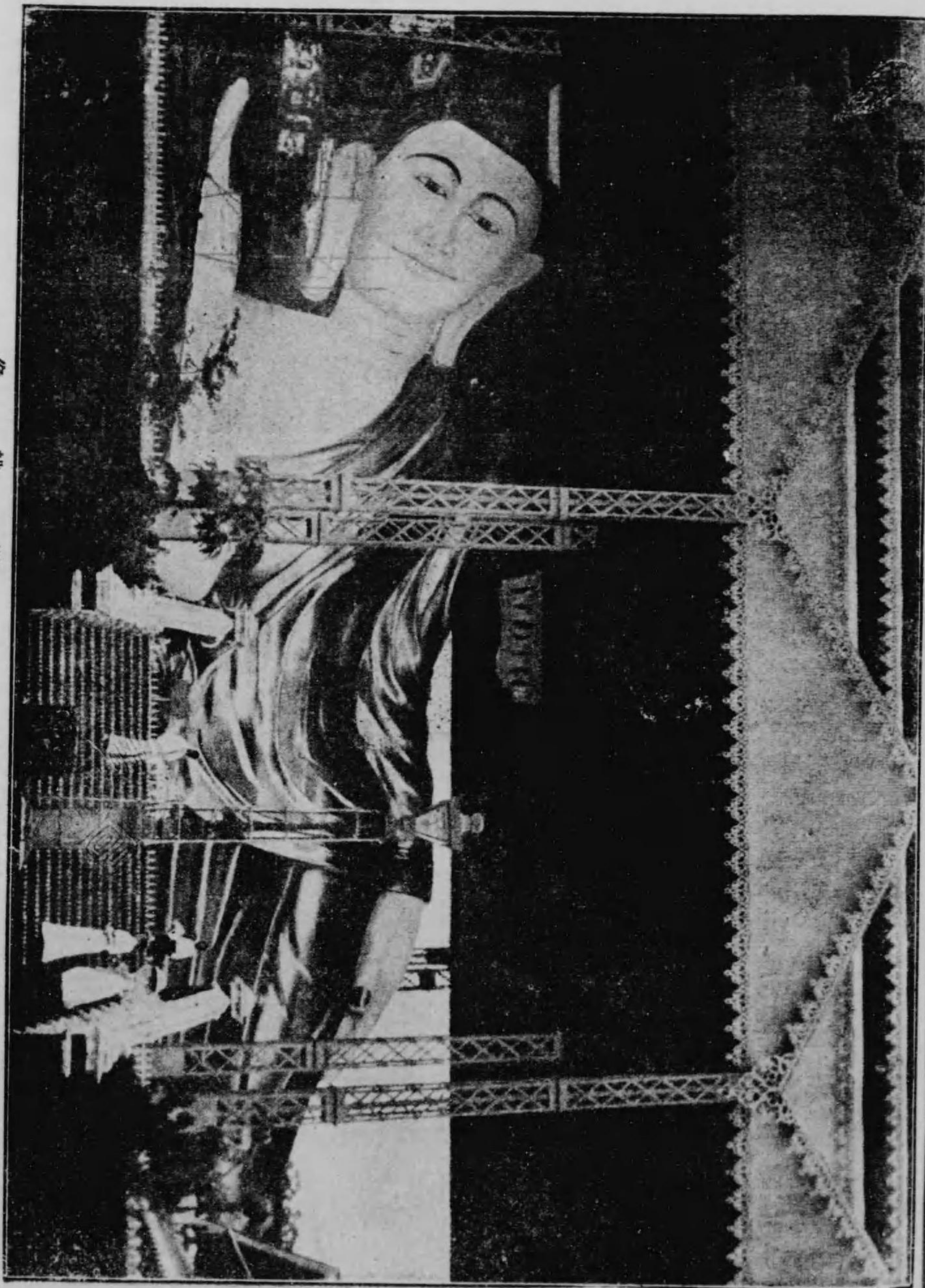
それで、マンダレーまで汽車で行くこととして、夜行に乗つた。私の後にはまだ薩の如くに英國官憲の眼が光つてゐた。蒼蠅くて仕方がない。如何そんなことをするかといふに、それには大きな原因



はない。而も近代につくられた模倣では決してない。然るにこれはまた何ぞした時代錯誤であらう。其の像の堂宇をなしてゐる建物の梁木や柱は鐵骨で出来てゐるではないか。古色蒼然とした原始の佛像を見んきて来た旅人は啞然として言ふところを知らないのである。人は佛を欺くといふことがあつても、佛は人を欺いたといふことを知らない。私はこの滑稽な思ひつきに次いで憤怒の念すら出て来た。人を馬鹿にしてゐる——佛が人を馬鹿にしてゐては逆も濟度が出来まいと思つて、そこそこ其處を出てしまつた。金箔を貼つてゐた僧侶はしきりに經文を唱へてゐるが、見向きもせずに出てしまつたやゝ下手に堂守の爺の家があつた。其處へ行つて像に附帶して上古から遣つてゐる佛像や、太鼓なぎを見た。それには如何様古色が黒く錆び残つてゐる。旅人の渴はかくして漸く癒えたのである。

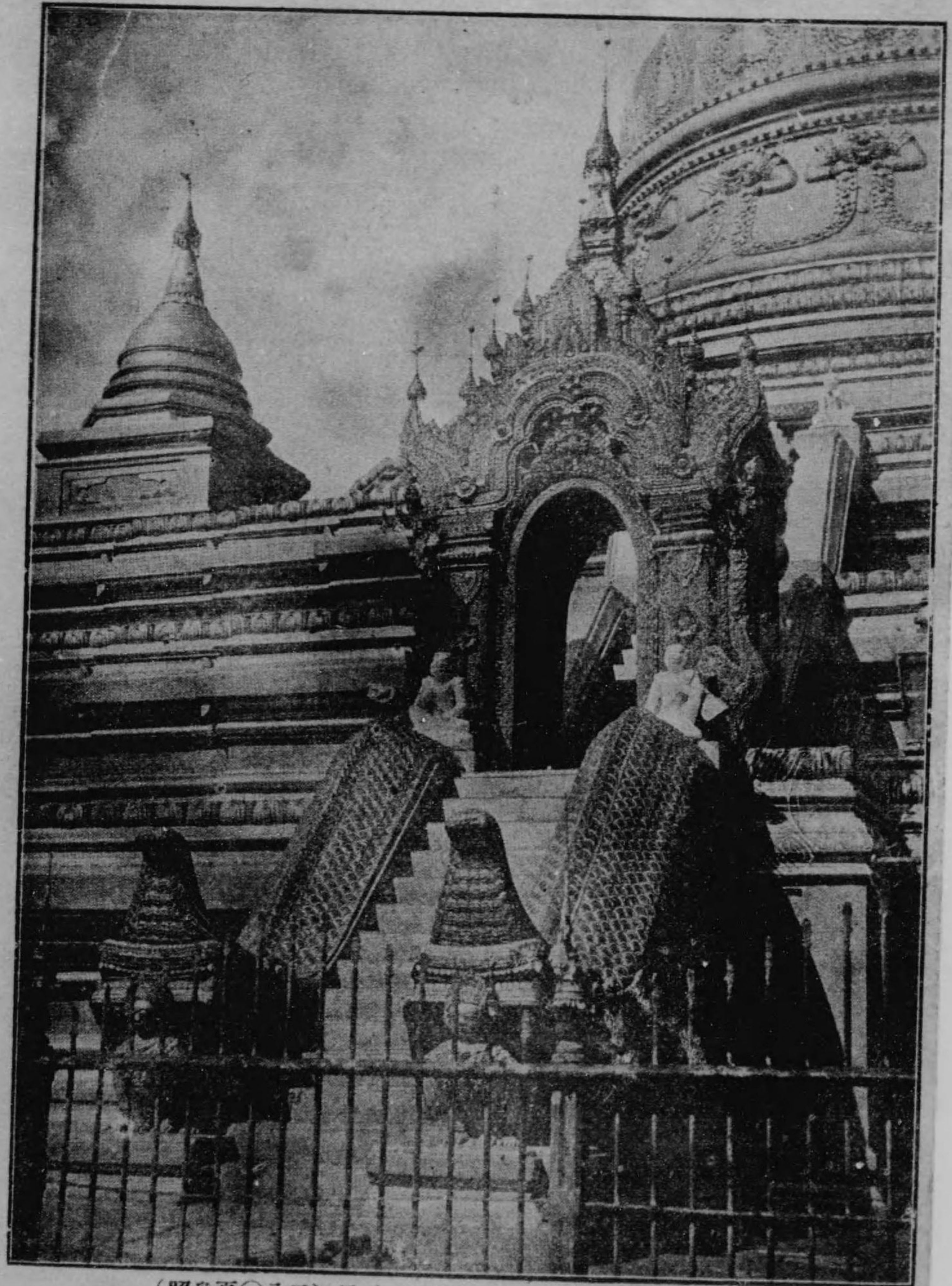
期待を裏切られたので、私の心持は穩かでなかつた。婆さんのところへ歸つて来て、其の晩徒歩で立つて行かうとした。婆さんは夜路の危険であること、これからマンダレーまでは何も見るものがないこと、私が兩三日の寒さで感冒をひいてゐることなどを一々語りたてゝ宿泊を迫つた。けれども、無情なく拒絶つて汽車で出發せよとした。一つはこの婆さんに對するいやな思出があつたので、今一つは印度行を急いでゐるからである。今年一杯には印度へ這入つて行き度い。——

それで、マンダレーまで汽車で行くこととして、夜行に乗つた。私の後にはまだ蔭の如くに英國官憲の眼が光つてゐた。蒼蠅くて仕方がない。如何そんなことをするかといふこと、それには大きな原因



像 繁 花 の 一 人

があつた。それは半島では日本人が多いためにそのいゝ點も、悪い點も土民は了解してゐる。悪く言へば、「東洋の武威赫赫たる先進國」に對して現實曝露の悲哀さでもいふ奴を持つてゐる。日本を信じても、夢想を以て信頼してはゐない。ところが、ビルマには日本人は數へるほごしかゐない。日本に對してまだ夢想を以て對してゐる、夢想を現實として日本を信じきつてゐる。日本人と言へば好感情を持つてゐる。その或もの中には「自國をして其の文明を開發し、其の光榮ある古に復らしむるには、日本に倚るの外途なし」さへ言はしめてゐる。而して日本と英國とがこんな情誼の間にあるかをも顧みない。これなきは、私が直接その當夜實見したといふ人から聞いた一つの例である。先年ラングンの活動寫眞館で各國皇帝の映畫を寫したことがあつた。日本天皇陛下に映畫が移つて行くに觀客は總立ちこまつて「萬歳、萬歳。」と叫んだといふ。英國皇帝陛下に移つて行くに、これはまた何をしたことであらう。「ゴ、ヘエル、ゴ、ヘエル。」を連呼したといふ。そしてその映畫は其の筋の手で撮影禁止を命ぜられたといふ。それだから日本人はビルマへ行つても優遇せらるゝ。同時に官廳はその行動に對する或安心を攫むまで監視する。いま私の後にもそれがついてゐる。汽車の中には種々な種族がある。シャン族がある。カチン族がある。カリン族がある。印度人がある。それが膝をつきつき合つて話してゐる。三等列車でなくては見られない圖である。印度人が英語を知つてゐるので、私と二人で種々な話を始めた。その中に私は日本の旅行者であること知れると、カ



(照參頁〇八二) 口入のダゴバの丘—レダマ

があつた。それは半島では日本人が多いためそのいゝ點も、悪い點も土民は了解してゐる。悪く言へば、「東洋の武威赫々たる先進國」に對して現實曝露の悲哀でもいふ奴を持つてゐる。日本を信じてゐても、夢想を以て信頼してはゐない。ミころが、ビルマには日本人は數へるほごしかるない。日本に對してまだ夢想を以て對してゐる、夢想を現實として日本を信じきつてゐる。日本人と言へば好感情を持つてゐる。その或ものゝ中には「自國をして其の文明を開發し、其の光榮ある古に復らしむるには、日本に倚るの外途なし」さへ言はしめてゐる。而して日本と英國とがぎんな情誼の間にあるかをも顧みない。これなごは、私が直接その當夜實見したさいふ人から聞いた一つの例である。先年ラングンの活動寫眞館で各國皇帝の映畫を寫したことがあつた。日本天皇陛下に映畫が移つて行くに觀客は總立ちこなつて「萬歲、萬歲。」と叫んださいふ。英國皇帝陛下に移つて行くに、これはまた何をしたことであらう。「ゴ、ヘエル、ゴ、ヘエル。」を連呼したさいふ。そしてその映畫は其の筋の手で撮影禁止を命ぜられたさいふ。それだから日本人はビルマへ行つても優遇せらるゝ。ミ同時に官廳はその行動に對する或安心を攫むまで監視する。いま私の後にもそれがついてゐる。汽車の中には種々な種族がある。シャン族がある。カチン族がある。カリン族がある。印度人がゐる。それが膝をつきつき合つて話してゐる。三等列車でなくては見られない圖である。印度人が英語を知つてゐるので、私と二人で種々な話を始めた。その中に私は日本の旅行者であること知れること、カ



(照參頁〇八二) 日入のダゴマの丘—レダマ

チンやカリンの連中がしきりに御世辭を並べて、席を譲つたりした。此の日は近來にない寒い日であった。私は熱が出たので眼を瞑つて、うつらうつらと物思にふけつてゐた。私の心は熟睡みたがつてゐた。次第に頭腦がほんやりとなつて、今にも深いところへ落ち込みさうになつた。俯向け様クシヨンの上に倒れ、やはりうすうすになつてゐる。恰度平蜘蛛が心に喰ひ入つて血をすううと吸られてゐるやうである。電燈が長くなつたり、扁平になつたり、果ては遠くで輝いてゐるやうに見える。汽車の中に濛々何か人の氣のやうなものが立迷つてゐるやうである。黒い顔の印度人や、ビルマ土人の顔がフラ／＼と揺れてゐる。遠くの方で大叫喚をあげ自分に躡進して來るやうな心の脅えを感じる。汽車の進む音であらう——と思ひながら、私は苦しい苦しい眠に落ちた。頭には熱が残つてゐる。

マンダレーへ着いたのは朝の六時頃であつた。空には温かく白い雲が廣がつて、朝明けのマンダレーの町は透明な谷川の水がよそんでゐるやうに、靜かに私の前に立つてゐる。朝日を浴びて森は甦り、甦つた森の間から宮城の尖塔やバコダが眼を開いたやうに見える。青い薨、金光の塔、白い壁が太陽の赤光に照り映えて、窓の外に汽車と共に動いてゐる。白い厚い雲がマンダレーの塔の頂に晴れたり、曇つたりした。

下車するに、印度巡查が其處へ來て、警察へ伴はれた。身元や、旅行の目的を訊ひたゞして「どうもお氣の每さまでした」と言つて珈琲を御馳走してくれた。

山田雜貨店へ一兩日マンダレーのバコダを見物する間だけ御厄介をお願いした。主人は喜んで私を款待してくれた。後をつけて來た印度巡查も其の儘安心したらしく引返して行つた。

マンダレーは以前はこの國の首府であつた。ビルマの國王もこゝに駐まつて居られた。日本の奈良さいつた感じの町である。舊城や、アラカン、バコダ、四百五十バコダ、千バコダ、マンダレー丘等就中著名である。

朝飯をすませて店員に私はマンダレー名所見物に出かけた。店員は私を導いて町案内をしてくれるのである。先づ最も道の近いアラカンバコダから禮拜するこゝに上つた。此のバコダはこの町にあるバコダの中でも最も古いのである。千八百五十三年から七十八年までかゝつて、ミンドル王によつて建てられた。こゝの佛像はサーギン鑛山から出た大きな大理石に彫刻したもので、それが中央の寺院の廻りをこり巻いて、八十の佛陀の像と二十の弟子の像とが並んでゐる。美觀警へやうがない。赤く錆びた鐵の古鐘が八つほご架木にかゝつて中央の廣場にある。此の町に未だビルマ王國の旗風が吹いてゐるころ、朝の霧を破つて、夕の霧を貫いて、町から野へ、野から山へミ平和な響き聞えたこゝであらう。きまつた時間にきまつた數で鳴らされたこの鐘の響をきいた民草は今日一日神と共に、ビルマの國王と共に働くこゝの祝福を祈つて、商賈はその店頭を飾り、農夫はその鋤鎌を手にし、漁夫までその纜を解いて一日の生業に出たのである。そして商賈はその出さきで、農夫は刈入れの手を止め

て、漁夫は帆を風に孕ませて家路につく。さゆるく餘韻を残して響いて来る夕暮の鐘の音——彼等は手を合せて、今日一日の感謝を神に捧げるのである。そして民は繁つて、平和の鐘は何時も何時も祝福の念を彼等に送つてゐた。しかるに今日このバコダの鐘は鳴りやみ、民草の上に秋風吹き荒れて、旅人の眼には涙なきを得ない。朝の祝福の鐘よ、夕の感謝の鐘よ、お前は何時までも青空の下に沈黙を續けてゐるではないか。

トンネルのやうな長い廻廊を通つてクリンマナストリート寺院へ到る。廻廊の處々に大理石の小さな佛像を賣つてゐたり、バコダにはりつける金箔を賣つてゐたりする。週の第七日（土曜日）で猶太人の安息日）に寶物什器を一般民衆に展覧せしめることになつてゐる。此の日は第七日に相當してゐないので見落してしまつた。

クリンマナストリート寺院はチイボウ王の時、勅願を祈る寺として建立せられたもので、ビルマ一圓の最高法権を握つてゐたもので、高僧を以て管長にしてゐた。本院は二重の華麗を極めた建築にて圓柱なみに一面に金箔を置いてある。殊に美觀を呈してゐるのは本院の屋根の破風に小さな金の佛を無數に配置してあつて、その美は日光や、金閣寺なごの比ではない。垣根や廻廊は金色燦然として目も眩まなばかりである。廻廊を通つて後方に行くに、また二棟の別院がある。莊嚴なところは言語も及ばない。ビルマの王朝時代の文化を語るものは唯この數棟の救願寺に、數千のバコダに、唯一廓

の王宮のみである。イラワチの水は昔の如く洋々流れてゐる。然るに行人は去つて再び歸らない。僧に一佛を與へることを求めたところ、破顔一笑して一佛をくれる。禮拜するものにしてもしも佛を盗んで行くものがあれば罪に處するといふ旨の高札がある。けれども、亡國の僧にはもはや國を思ふの良心がない。

歸つて、午餐をすしだめ再びイラワチの本流へ掉すこゝして家を出た。イラワチの流域は實に大平原をなしてゐる。其間に氣まぐれに縁を凝した丘陵が遠く長く續いて走つてゐる。地平線の果ては曇つて天涯に接してゐるやうである。振り返り見るマンダレーの町は白いバコダの尖端や、王宮の碧い屋根で鏤められてモザイクのやうに裝飾的である。イラワチの濁流が滔々流れて下つてゐる。渡場で施物を貰つて來た葬式歸りの僧侶と、牛車の一隊に會つた。こゝらあたりの僧侶は遠く出稼ぎに行くものが見える。寺の多い南都や、京都の僧侶が施物が少ないといふことを故國で聞いてゐるが、今この寺の多いビルマの舊都の一角に立つて、この僧族の一行を前にして、私は現代の僧侶の一般的苦悶も言ふべき、自己の宗教的生活に現實的生活との苦闘、内生活と外生活との苦闘を思ひ起さない譯には行かなかつた。形而上の問題に生きて行かうとすれば、衣食は與へられない。衣食を得ることに汲々努むれば、形而上の問題は閉却せらるゝ。墮落しなければ衣食が出來ない。衣食を得るために墮落するのは辛い。二頭の蛇は何時まで、尾を噛み合つてゐる。

イラワチの對岸には丘陵はかなり多い。丘陵の上には檳榔樹や、椰子樹や、相思樹等が茂つてゐる。其の間に小さな白い尖塔の頂が見える。尖塔と尖塔との間に、丘と丘とのきれ間には鬱蒼と森が茂つてゐる。森の多い南國の空は森を、尖塔を、丘陵を、野を抱いてにこやかに笑んでゐる。イラワチの水は白雲を、碧空を、丘陵を、陰影を孕んで溶々として流れてゐる。黒い船體が煙を擧げて去つた後には、赤い太陽が雲を吐いて現はれて来る。風物の移動——風物の静止——それをひびく感する南國の天地は風物の變化が劇しい。男は早く大人になる。女は早く子を孕む。それ故に南國は低氣壓を生む郷土である。疫病を蕃殖さす田園である。すべては動く、すべては靜まる。その移する氣



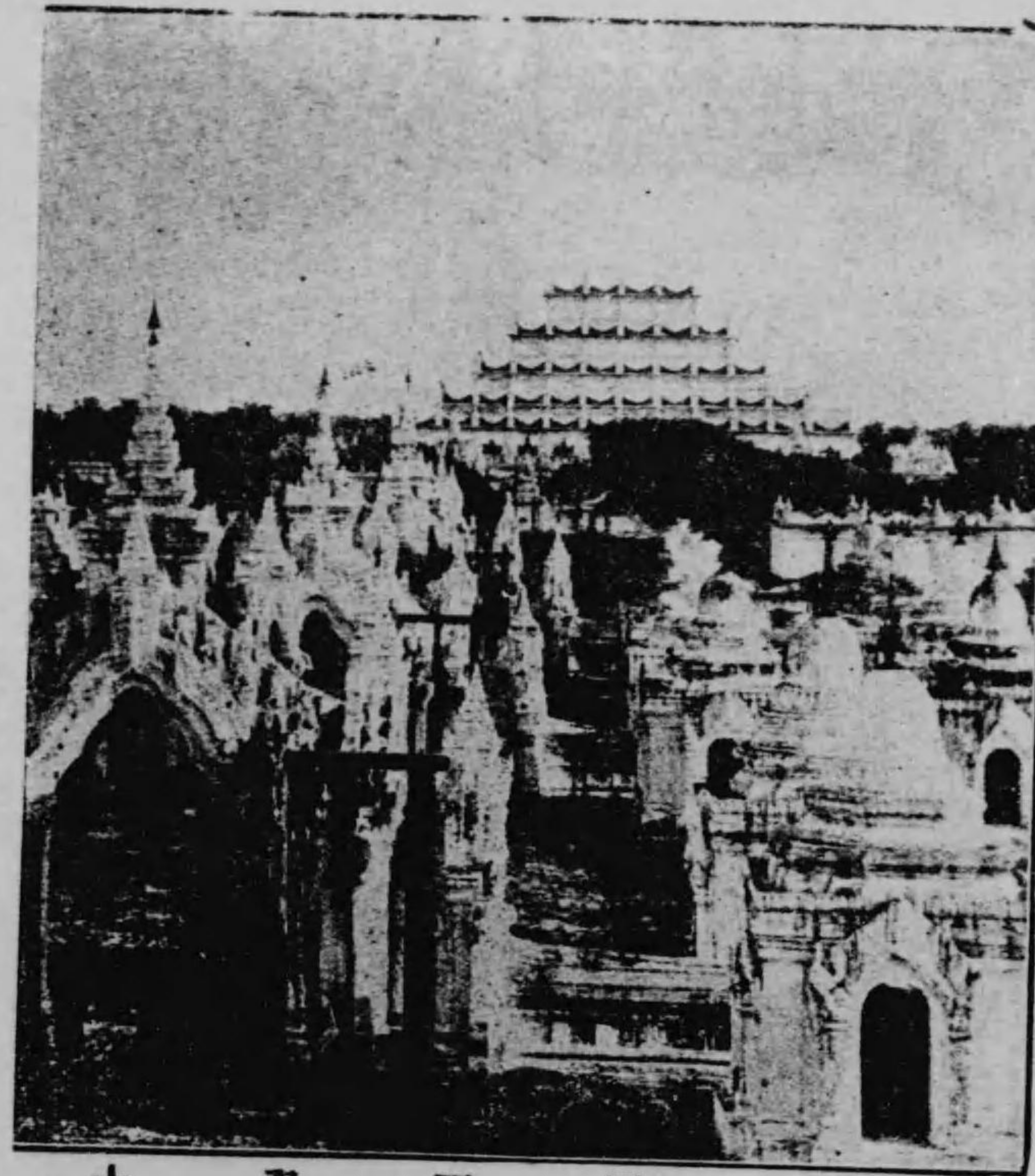
岸沿のチワライ

分の甚だしいのを南國的情緒といふ。かうして一日は終つた。山田氏の住宅へ歸つて、珍らしい料理に一盞を傾ける。

「鳥井君、ビルマはこれからの國だよ、半島なきに於て他人の糟粕をなめてゐるよりはビルマへ發展するんだね。日本人の發展すべき天地はいくらもあるよ。田舎へ這入つてまあ護謨園を起すか、都會で雜貨商を開くかかね、醫者だつて儲かるし、齒醫者だつて儲かるよ。半島もちがつて何故いゝかといふと、土地の上から言つても半島の様な土地制限令がないだらう。借りた放題にかり得られらあね。人心の上から言へば、日本人を東洋の先進國として大層崇拜してゐるだらう。そこへ宗教が佛敎といふのでたまらないやね。半島なんかへきたがる奴の氣がしれない。」

山田氏は酔ひにつれて、こんな氣焔をあけてゐた。

第二日目に私は昨日の店員に連れられて、四百五十バコダや千バコダやビルマの王宮を見て歩いた。マンダレー丘にも登つて見た。四百五十バコダ、千バコダの隣り合ひにある。馬車を雇つて先づ四百五十バコダから見て歩いた。大理石のバコダが四百五十ほぎ一區劃内に並んでゐるので、かく名づけたものである。大小のバコダが列をつくつて並んでゐる。頂の丸いもの、尖つたもの千差萬別である。よくも斯う大理石を澤山集めたものだと思ふ位である。人間の努力といふものを思ふ。信仰の力といふものを感じる。その精巧な鑿ミ槌ミの痕を見てゐると、肉體の力を征服する心靈の力といふものを



四百五十五

痛感しないではゐられない。バコダの表面には梵字で一切經が彫り記されてある。

序に千バコダも見ろ。千バコダはバコダの数が千の餘もあるからである。私の行つた時ビルマの石工が美しい透き通るやうな大理石の肌に一生涯懸命で彫刻してゐた。千バコダは現今も造營中である。

「何をしてゐるのだ。」

「字を刻つてゐるのだ。」

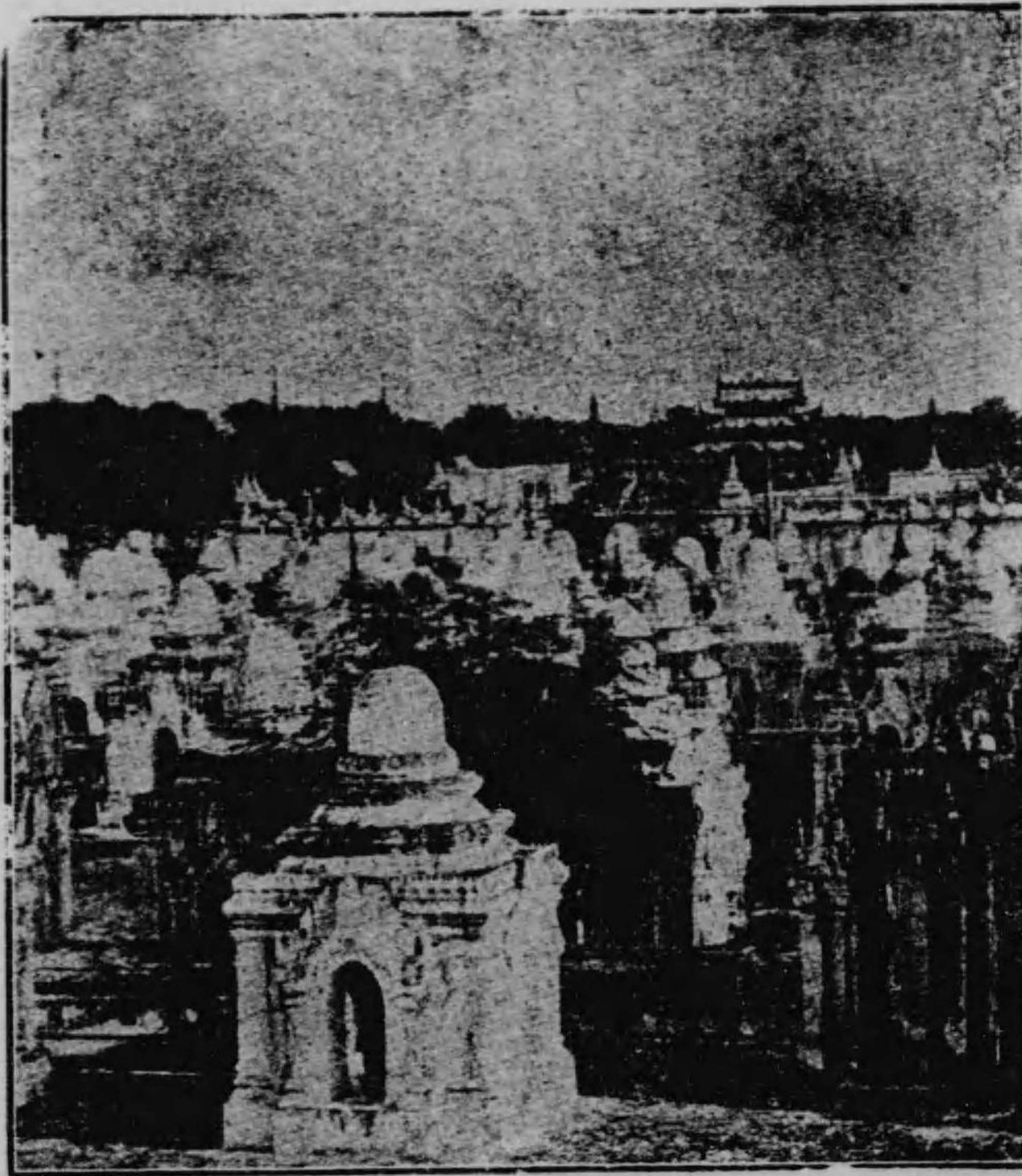
「何如な字を刻つてゐるのか。」

「梵字で一切經を刻つてゐるのだ。」

「四百五十バコダも、千バコダも皆一切經を記してあるのか。」

「そうぢや。」

かう石工は黒い肌を出して、力のこもつた腕で大理石の表面をたいてゐる。彼等の信仰は實に絶



バコダ

場を思ひ起して厭な感じがした。店員に聞けば、一人の富豪は五百萬圓を奉納して一つのバコダを献じたといふ。彼等の信仰は實に絶對に近いものである。

對に近いものである。大理石を買ひ整へて献納する富豪の心にも、大理石の表面に字を刻んでゐる土人の心にも、ともに神を念ずる法悦が漲つてゐるのだ。出來上るのをにこ／＼見守つてゐる富豪、力を張りつめて叩いてゐる石工、二人の心には信仰といふ結び目によつて手をこり合つて歡喜と陶酔に浸つてゐる。資本主と勞働者の關係をかくの如く美しき調和のもじに見た私は、日本の灰色の工

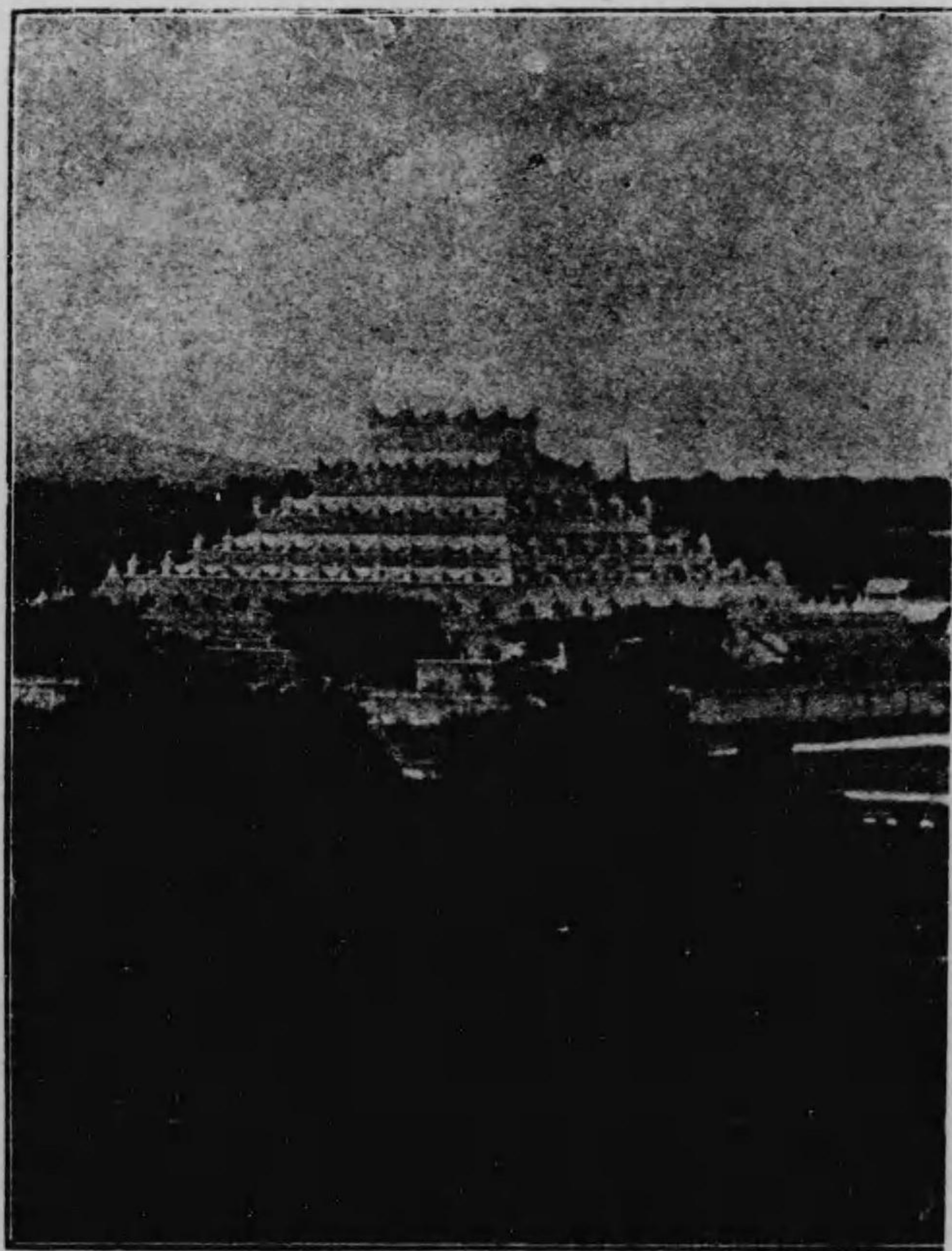
ニマシタレー丘

は静かな森の中から仰いで見られた。入口には獅子の大きな大理石の像があつて、その前を通り過ぎるに、朱塗の堂が列んでゐる。参詣人の休息所として設けられたものである。道は鬱蒼とした青葉の傍を通るに、いよく丘に上る入口がある。迫持になつてゐる大きな、而も精美を盡した門であつて、其處此處に大理石の佛像が列んでゐる。さうした入口が八方に



千

ある。丘の麓の八方口から丘の頂點へ昇るやうに出来てゐるのだ。その迫持で出来てゐる門には種々な佛畫が壁に描いてあつた。釋尊の一代記のやうなものもあれば涅槃の畫もある。殊に奇異に思はれるのは地獄極樂の繪で、ビルマの鬼には角がなく、足に刺青してゐる。さうしたこゝか店員に問ふに、昔ビルマの罪人は此のやうな風俗をしてゐたもので、足の刺青は正しくそれから來たものであらうとのこゝであつた。そこを通つて疎廓へさしかゝる。一町ほご登るに、佛像が安置してあつた。又一町登れば一佛さい



ダ コ

ふ風である。僧が一人二人来て喜捨を求め。旅人はいくらかの喜捨をする。僧は鐘を叩いて讀經を始めるのである。約五町ほど登りつめる。其處かもはやマンダレー丘の頂上になつてゐた。高さが九百五十四呎ある。廻廊の處々に一生懸命でビルマ人が仕事に従事してゐた。この丘の工事は私の登つたときはまた完成されてゐなかつたのだ。丘の下から水を運ぶ、砂を運ぶ、石材を運ぶ、幾十人幾百人の土人は皆毎日無料で働いてゐるのである。佛に奉仕するために身も心も働かして無料で努めてゐるのである。信仰の力を痛嘆しないではゐられない。頂上には金や大理石のパコダが一面に並んでゐる。ランゲン以来パコダの美觀に驚心駭目してゐた私はもはやこれらの建築に對して憧憬は持つてゐなかつた。私は丘のマンダレーの町に對する所に立つて、飽かず市内を眺めてゐた。森の間に四百五十パコダや、千パコダや、王宮が巍然として天空を壓してゐる。町を限つた種々の建物はなだらかな平野に續いて、地平線は長く廣く見渡される。一望涯ない眺めで、此處から見る日出日没は實に壯觀の極であるといふ。

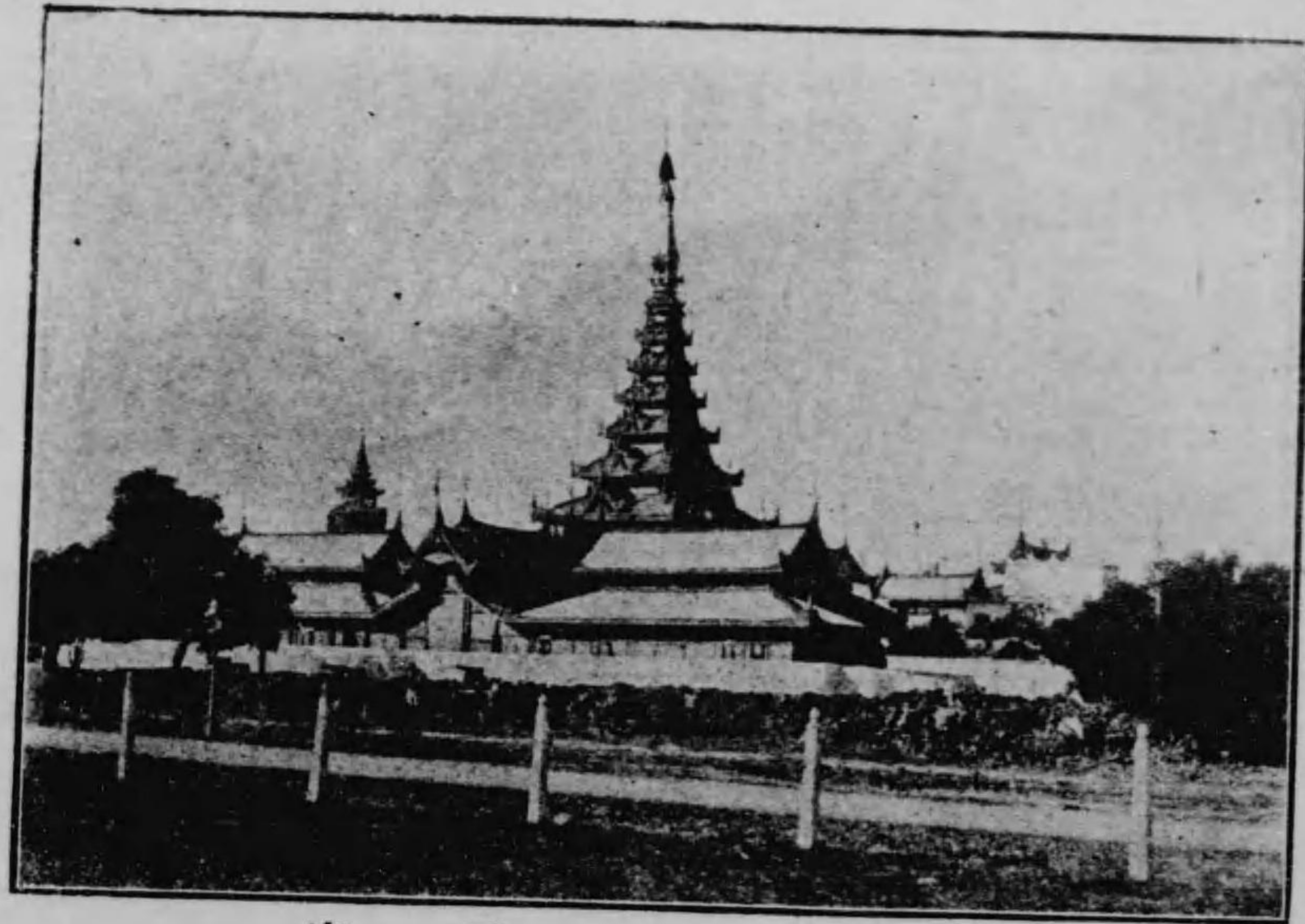
別の口の廻廊から歸途に就く。廻廊は頂上を中心にして放射狀に別たれてゐる。以前のやうな入口の門を出る。其處にまたパコダがあつて、佛像が安置してある。中に二丈ほぎの一枚の大理石に刻んだ佛像もある。目や眉には純金を鑲めてあつた。

三、ビルマ王宮

丘のすぐ傍にビルマの王宮がある。王宮は方一哩四方の土地を占めてゐる。その王宮の周圍は水も古りたる濠である。王宮は町の東西、南北、どこからでも這入るこゝが出来た。一哩の間に大きな支那風の建物で破風のそつた屋根をもつてゐる大きな門が二つある。その二大門よりやゝ劣つた門がまた二つ狭まつてゐる。一哩の間に四つの門を持つてゐるので、東南西北の間に十六の門が町に向つて口を開いてゐる。門は鐵を以てつくられたものである。

私達は南の門より這入る。千八百年代のもので、佛蘭西政府がこの國の王に贈つた大砲が先づ人目を引いた。長さ二十間の以上もあるであらう。王宮も矢張り支那風の建築であつて、棟の傾斜の急な羽風の折れ曲つた屋根は默然として十二月の太陽の中に、弱々しい其の姿を峙立てゝゐる。住む人もないこの高檻朱殿、昔を偲べば行人はいなしに過ぎ去るこゝが出来ない。

先づライオン、ルームより這入る。チーク材の太柱には一面に金箔を置いてあつて天床欄間などには一面に精巧を極めた花鳥の彫刻がしてある。咳一つしても其の音がルーム一杯に響いて来るほどの靜けさである。十二月の生温かな弱々しい南國の日射は厚いギアマン板硝子の窓を通して流れ込んでゐる。正面一段高いところに玉座がある。その左右に、或は後室（後室は文武官の控への間にな



宮 王 マ ル ビ

つてゐる) 一面に文武百官、或は幾十人の女官を従へられて出御なされたその玉座、それが今は空しく立つてゐて、その昔を偲ぶ何物もなく塵埃の棟梁に委せられてゐる。このライオンルームこそ其昔ビルマ王朝時代には一世の權威を集めて、政務を嚮はした御座所であるのだ。御座所の前の右の部屋が女皇の居間で、居間に續いて女官の居間がある。御座所の左は王の居間で、王の居間に續いてオペラルームがある。すべてチーク材の太い柱や、細い柱には金箔を貼りつけて彫刻の美を盡してゐる。京都の足利義満の豪奢もこれに比べては物の數でもない。

王の居間には曾て美酒佳肴に酔ひ、幾百の寵姫を侍らせた寢臺は今は無慘なるその残骸を一室の傍に横たへてゐる。殊に王妃の居間は

哀れを止めたものはない。分の厚い古代硝子には當時の豪奢を偲ぶ花模様がついてゐて、脂粉の残つた大きな鏡が魔い眼のやうに呪ひの笑みを浮べてゐる。華美であつただけに、豪奢であつただけにその沈鬱な光景、陰暗な面影が旅人の心を擣る。おゝ見よ、そこには王の寢臺、王妃の寢臺はならべられてゐるではないか。何ぞした皮肉であらう。別室に印度巡査の立番してゐる部屋があつた。王の遺物を陳列してある博物館である。金の象眼を鏤めた王の着用の甲冑や、衣冠や、英國政府から贈られた勳章や、皇后の着用した召物なごが二百品ほご陳列してゐる。殊にその寶冠には莫大な價格のダイヤモンドが鏤めてあつたのを豫てよりこゝに駐屯してゐた英兵二人が窃み出し、犯跡を晦すためにそのダイヤモンドを宮城の濠中に隠して置いた。其の後にその二人は歸國を許され、一人は間もなく死し、一人は捕縛されて獄に投ぜられた。英國官憲は濠の中を彼方此方探して見たけれども、遂に其の所在が判明しなかつた。二百有餘萬圓のダイヤモンドは未だ分らないといふ。

表の出口に當つて六角の棟があつた。その屋根の色にも、赤い血の笑ひを思ひ出さず毒々しさがあつた。その一棟こそビルマ王朝時代の悲劇を包んだ唯一の舞臺であつたのだ。それは先帝は殊の外淫亂な人であつて、マンダレーの街へ出御あるごと、街の若い女は王を見んきて、沿道に出で、奉迎した。もしその中に王の氣に入つた美しい顔の一つでもあれば、王は其の娘をひいて宮女にして寵愛した。王妃はまた人並みまさつた嫉妬深い女であつた。王の寵愛してゐる女の足跡にまで呪ひの息氣

をふきかけるのであつた。寵姫は遂に監禁されてしまつて、この六角堂の中へ放り込まれる。投げ込まれたが最後、甦つては来ない。彼女は其處で鐵の鍵にかけられて慘殺されるのである。今は密鎖されてゐて縦覽を許されない。街に廣がつてゐる噂に聞けば床、梁の上に赤く錆びた鐵の鍵が打ちつけられてゐて、その鍵には美しい女の血液が黒く今もこびりついてゐるさういふ。家にゐる美しい女の父や母は彼女の宿入りを待つてゐる。併し、彼女は永遠に歸つては行かなかつた。ビルマの王宮、それは今もなほ謎語として民衆の前に立つてゐるのである。

四、ビルマ王宮最後の悲劇

十五六年前のこゝであつた。一艘の砲艦は細い煙をあげてイラワヂ河を溯つて來た。其の砲艦には英國の旗が翻つてゐた。前々帝の時から英國はビルマに對してある心持が動いてゐた。交易をしてくれと迫つても來てゐた。その頃から佛蘭西はビルマに對して非常な好意を示してゐた。前帝の時國を擧げて佛蘭西に併合されやうと望むやうになつた。

先帝は淫亂な方であつた。先帝には美酒と佳魚と美女以外何物もなかつた。その爲に政治は亂れ、重斂は行はれる。民の心は一日一日と王から、國から離れて行つた。宮内大臣は其頃から英國に歎を通じてゐた。英國の砲艦は丁度其の頃やつて來たのである。一日の清遊を艦でなされてはさいつて、

辭を低くして來艦を求めた。

ビルマ王には英國の眞意がのみこめてゐた。自ら一臺の牛車に乗られ、自ら馭者をなしてイラワヂの岸へまで行かれた。然るに王妃や、寵妾は既に英國の手で監禁されてゐたのである。

昨日の權威にひまかへ、今日の其の零落は通る人々をして眼を傍めしめた。王の車は靜かに無心の牛につて王宮を曳き出された。もうこれが我が家の最後の一瞥である。王の眼には涙が流れてゐた。拭いても拭いても涙が流れ落ちた。

王は此の時初めて生命に對する強い執著が湧いて來た。過去に對する悔悟の念すら起つて來た。惡かつた。俺の幸福のために、俺一個の幸福のために、最大多数者の最大幸福を踏み躪つてゐた。——もう併し、さり返しはつかない。放たれた矢は再び自己へは歸つて來ない。新しい革囊に新しい酒を満さうとしても革囊は既に破れてしまつてゐるではないか。

一輪、又一輪、動く牛車の轍の痕、軌る牛車の響、もう二度と俺のこの姿はビルマの國の何處へ行つても見るこゝは出來ないであらう。死の影を長くひく轍の痕、死の歌を悲しく唄ふ車の響。——

マンダレーの晨の鐘は陰慘餘韻を流してビルマの空に消えて行つたであらう。王の手綱を持つ手は慄へて、眉根の際には深い、深い二本の皺が刻みつけられてゐた。黒き衣をきた死の影がもう彼を捉へてゐた。

此の時マンダレー丘は身も世もあらぬ悲しみの聲をあけて鳴動したまふ。赤く燃え立つた猛火が王宮の上からマンダレー丘の上に飛んだまもいふ。今に口碑に傳へられて、民衆の涙の種となつてゐる。

辭を低くして王を迎へに行つた使者は、王の前に嚴然として立つて宣言して曰つた。「爾の國は英國の支配の下に立て」此の時艦の下層からは一時に「ルール、ブリタニア」の歌聲が洩れて來たのである。王は遠島に移され、昨日に變る様にて臨終の息をひきこつたまもいふ。

マンダレーの秋の日の下に、物憂げに立つ幾棟の王宮こそ、天の神の「永遠の歌」を唄ふまも共に、人の世の「假初の歌」をも奏してゐる無言のコンダクターであらねばならない。

襟に滿つる涙を拂つて旅人はそこを出た。——秋の日は黄色く弱く二人の姿をマンダレーの街の上に印して歸路を急いでゐた。

おゝ、太陽よ。——

ビルマの皇太子はマンダレーから、敵の毒手から遁れて、佛艦に投じ、佛領安南に亡命してゐるまもいふ。

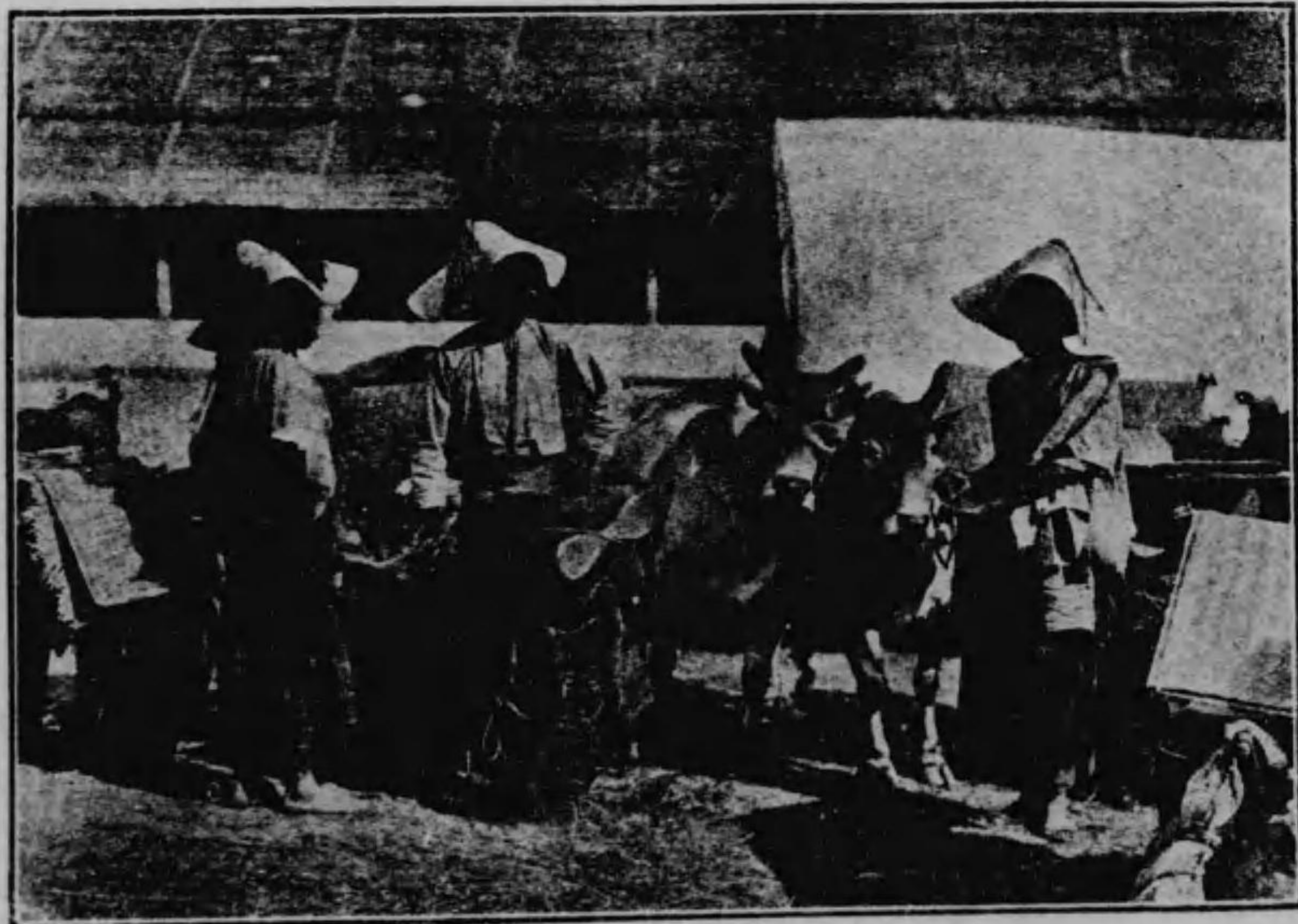
マンダレーは人口十五万ほごの町である。日本人でこゝへ來てゐる人は實に少い。福島まもいふ人が櫛の製造工場を起してゐるのまも、私の世話になつた山田雜貨店と女郎屋が一軒あるだけである。

此の町の購買市は有名なものである。遠く北部山中のシャン族を相手にしてゐる一大購買である。シャン族は隊商をつくつてこの町へ下りて來る。ビルマは金、及びルビーの名産地である。

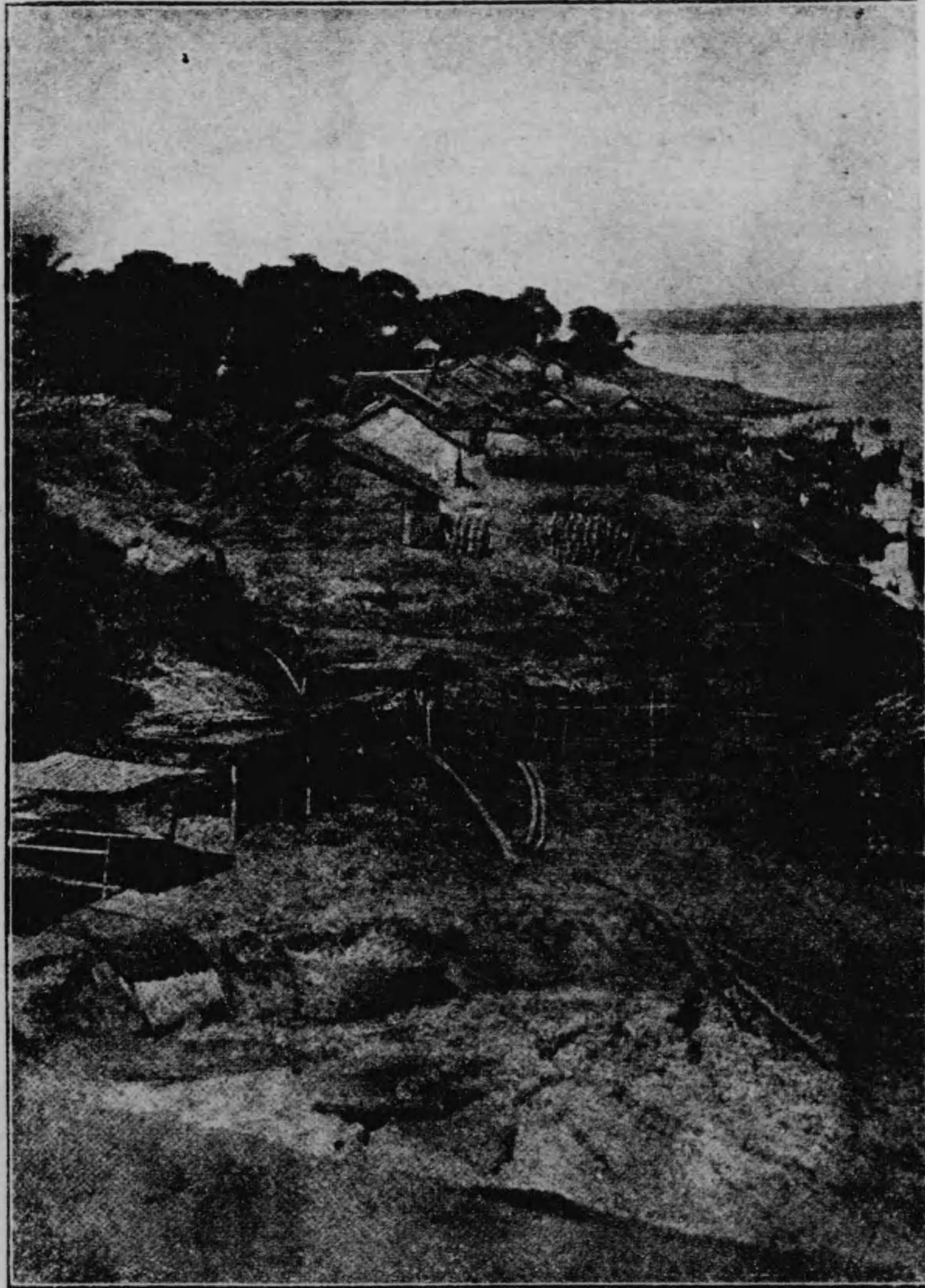
五、メミヨ

其の晩、私は山田氏夫妻に送られてマンダレーを出發つた。バモーマ、行く豫定であつたが、バモーマには殆ど見るものもないまもいふので、一つには印度行を年内にしたいまも思つてゐたので、汽車で立つてメミヨまで行くまもした。メミヨへ行く目的は當地に日本人で護謨園を經營して四十英反の土地に栽培を行なつてゐるまもいふまもを聞いたからである。

メミヨはシャン族の建てた小さな町であつた。



商隊の族ンヤシ



一 毛



ハ

シヤン王國の首府で、英國は此の地方にだけはシヤンの兵をつかつて自由權を與へてゐる。シヤンは勇猛な種族で、未だ野蠻の狀態をぬけきつてはゐない。馬の産地である。



(一) 女のシヤン

當のやうなものを拵へてそれをつけるのサ。そしてね、左手にもやはりその竹の割つたのを用ひるの

護謨園主は私を喜

んで迎へてくれた。

其の晩酒杯をあけて

快談に時を移した。

園主はシヤン族の勇

壯な虎狩りの話をし

て聞かしてくれた。

「君、シヤンの虎狩

つたらほんまうに興

味いぜ。それはね、

身體の全體に竹を割

つて日本の撃劍の胴

だが、上膊部と下膊部と曲るやうにしてね、下膊部の竹を指のさきへ一尺餘り出して置くのだ。右手には無論得物として鋭利な斧を持つてゐるのサ、斧の刃には毒をつけて置く。準備はそれだけで必要ない。

虎の來さうなところへ行つて

待ち設けてゐる。虎がいきなり

口をあけて飛びつく。その口を

あけて喰つてかゝる時逸早く件

の左手の竹のさきを口の中へ突

き入れる。虎の胴に毒が出来る

のを右手の毒ある斧で打ち擲く

——かうしてゐるのだ。勇壯ッ

たらないね。」

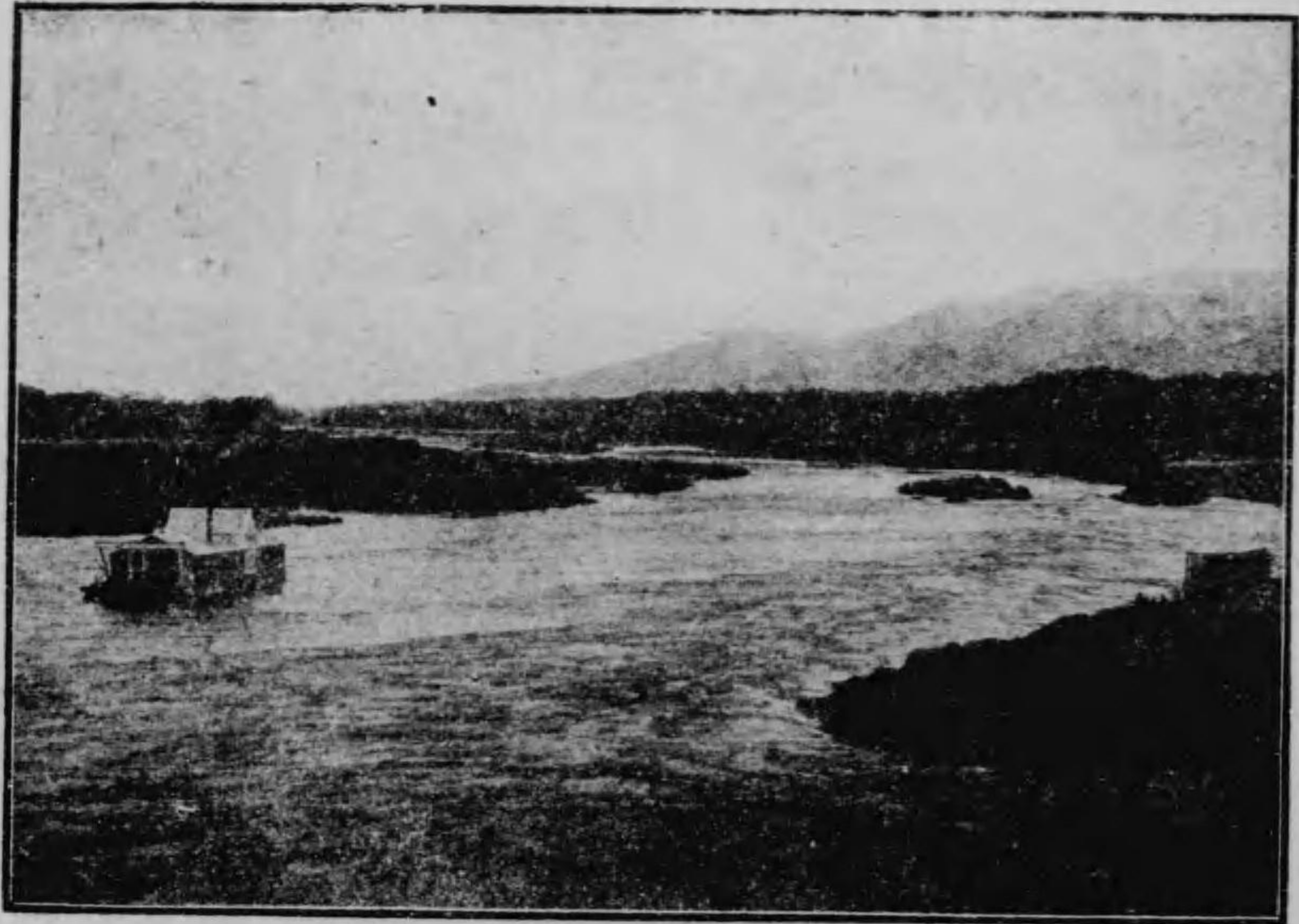
それから此の地方は護謨園を經營するには好適地であること、日本人の發展する餘地がありあまる

ことなごを話し寝た。

此の附近は緯度も餘程北によつてゐるので、夜になるに、殊に十二月なので寒い。附近に景勝の地



(二) 女のシヤン



る下を河チワライ

は少なくない。

翌日私はこの人達に別れを告げてラングンまでイラワチ河を下つて歸るこゝとした。谷の深い上流から下流へ私の船は下つて行つた。土人の女が河で洗濯してゐるのを見たり、バコダの岸に動いて行くのを眺めたり、椰子や、檳榔樹の茂つてゐる緒土の丘の走つて行くのを仰いだりして三日でラングンへ歸つて來た。濁流の水面に長い水路を残して、私はビルマの最後の足跡をラングン市へ印したのである。

其の日の夕方私は豫て依頼して置いたカルカッタ行き切符を買ひ整へて私は印度へ向けて立つて行くのであつた。

金光燦爛たる佛の國ルビマよ、お前に對する憧憬は永遠に私の心から離れ去ないのであらう

二二 印度 行

太陽は最後の餘光をバツミラングンの町に投げた後で急に色青褪めてしまつた。小鳥の優しい鳴き聲は夕暮の霧の中に隠れて、ラングンの空は大時計臺の魔の呪文のやうなボン、ボンといふ音に支配せられて、冬枯れの行路樹の蔭にはボツリ青白い瓦斯の眼が光を放つてゐた。地球は回期線の終點に歸らうといふ十二月二十四日の夕暮方、私は印度に渡らうとて、肩にも、腰にもいくつかのカバンをぶらさけて、やゝ俯首れ氣味で河端へ歩を急がせてゐるのである。見ればイラワチの水は黒くさんより澱んで、黒い水の上に黒い船體がいくつか浮んでゐる。川霧を破つて纜いた船からボツリ明りが洩れてゐる。遠くで苦夫の怒鳴る聲や、節の悠暢な南國の歌を流してゐるものもある。何處かで子供の泣き聲も聞える。ラングンの町からは夕暮の物の色が雜然と亂れて河霧の中へ消えて行く。

今踏んでゐるこのビルマの國の土も數時間の後には大洋の中に立つて踏むこゝを許されないのである。この一歩一歩、これが最後のビルマの印象である。なつかしいものに別れるやうな旅の愁を感じずる。瓦斯の青白い光り、孤燈のみづみづしい光り、それが船の波に亂れくゞて河面に浮んでゐる。解で十五分もしてからセイロン丸といふ母船についた。日本郵船のセイロン島までの定期船である。相變らず七盾でデツキバスを買つたのである。

事務長の部屋へ遊びに行く。「さうしてまたデツキバスを買つたりしたのですか。」と聞くので「金
なかつたからサ。」と答へる。大口開いて笑ひながら「食事だけは三等でなさい。拙いからね。」と
親切に言つてくれ。

船は其の夜の八時過ぎに長い汽笛を鳴んだ。ビルマの山河に残して除行し始めた。推進機の廻轉する
音、水を破る音が断えず船底の方にしてゐた。いよく私の船は宗教、詩、傳説を孕んで
三千年の太古より巖然として宇宙の萬象に謎語を浴せてゐる。スフィンクスの國印度へ向つたのであ
る。宗教と夢幻との憧憬國である。ビルマを後に遺して行くのは悲しいことには違ないが、今は行手
に力強い望みを抱いてゐる。お、印度よ、お前は一人のバカボンドに何を教へ、何を物語らんこ
するの。波の荒いと言はれる印度洋は今朝は波が靜かに揺いで波の頭を朝霧は滑つて動いて行く。
太陽の昇らうとする雲は赤く焼けて、後にはビルマの山々が見残した夢のやうに幽かに煙つてゐる。
生まれて初めての印度洋渡航である。旅行者で印度洋を渡らないといふことは一種の屈辱であらねば
ならない。

船中には邦人の會社員五六人、他は印度人のデツキバツセンジャ三十四五人しか乗り込んでゐな
い。三等待遇をうけてゐるのは私一人である。一等船客の一等國民の會社員は私の前に澄して威張つ
てゐるから笑はせる。威張るこの最大原因は一等船客である。一等國民であるといふ自覺以外何物

もない。これらの動物を見てゐるにつれ涙ぐましくなる。滑稽味を帯びた悲哀は人をして涙を催さし
める。これでは何時まで行つたつてジャツプは滑稽化して呼ばれるのは無理はあるまい。さうしてこ
の滑稽な動物にジャバンニスと呼びかけることが出来よう。ジャバンニスの私すらジャツプと呼
んで見たい心持である。

第一日はそれでもまだ朝の中は山も見えたり、ビルマと別れて来た新しい記憶も残つてゐるので
太平洋の中でもいくらか人間らしい感情に生きてゐることも出来たが、その翌日からは大海の最中
いふ感以外、行手に對する希望に生きることも以外何の思もなくなつてしまつた。ビルマのここ、スマ
トラのここ、半島のここも昨日あたりはまだ記憶に甦つて来たが、今日はそれすら思ひ出すのが臆
劫である。唯ボンヤリ甲板に出て、船に碎けて散る波頭を見てゐたり、遙か沖合に戯れてゐる鯨の
群を見てゐるだけで心に何の餘裕もない。かうした時にせめて一人の戀した女でもあつたら、其の面
影を偲んで、心持を濡らしてゐるものを。それも私にはなかつた。唯千波萬波に續くこの大海が眼前
に横はるのみである。

暇さへあれば、事務長のところへ遊びに行つたり、高等船員の人々旅行談に耽つて、断えず日本
酒の杯を口にしてゐた。日本の酒、日本の杯を口にしたのはもはや久しい以前のことであつた
新嘉坡で別れたあの大尉はさうしてゐるであらう。無事であるであらうか。あの女はさうしてゐるで

あらう。無事であるであらうか。甲板の上に酔ひ覺めの頭をさらして、星の降るやうに朗かに冴えた空を仰ぎくうつらくく心か眠りかけて来た。およい心持である。印度洋の最只中で天を伴ひ星を侶として眠る心地は何とも言へない。天使が耳元に來て歌つてゐるやうである。何處かの島の椰子の葉蔭に隠れてゐた熱を帯んだ生温い風が、夜になるに吹いて來る。まだ印度へは着かないであらうか。——夢は印度に遊んでゐる。

二十七日の朝、海上を染めて例の濁流が流れてゐる。陸が近くなつたのである。カンチス河の濁流である。そうだ。三千年の古、印度の大明を孕んだ聖母は實にこのカンチスの濁流であつたのだ。ヒマラヤの涓滴であつたのだ。カンチスの濁流よ、お前は何とこのバカボンに物思はずこゝであらうよ。白い鷗がひらりくく飛んでゐる。キア、キア急遽しい叫びをあげてゐる。

カンチス河は大きな三角洲を作つて流れ入る河である。一物の目に入るものもなかつた大洋の中心に着けば彼方、此方と指摘して細い煙ミ、幽かな船體を見るこゝが出来るのである。印度といふものを中心にして、こゝよりも寧ろカルカッタをこゝを中心にして諸國より集り來る船舶であるのだ。

濁流が濃くなればなるほど、鷗の数が多くなり、船の影も増して來る。——こゝ見よ、青螺のやうな印度の山々が模糊として波の彼方に見えるではないか。旅人の心は待ちあぐんだ期待に、高潮のやう

な心臓の鼓動すら感ずるのである。三千年の雪のヒマラヤ山よ。

いよく茫漫とした濁流のガンチス河へさしかかつて來た。八十餘哩を溯つて行くのである。例により水先案内が乗つた。一人は印度人であり、今一人は白人である。私は印度人に常に語つてゐた。南米ベル領事夫人は日本人である。その婦人とも語つた。水先案内の白人も大層日本好きらしく、私達の船に乗つて以來、私に水先きの説明をしてくれたりした。

ガンチス河は實に大陸の河だといふ感が深い。上流から流れ下つた土砂を推積した一望涯しない地平線の彼方に此方に薬鴉や、印度麻の緒柄なごの積み重ねたものが見える。椰子や、扇椰子なごが茂つてゐる。山一つ見えない。

三角洲を破つて處々に河が流れ込んでゐる。其の間を大きな船舶が出入したり、小さな三角の帆を張つた舟が出入する。處々に白人の建物や群がつかつてゐて、苦力の働いてゐるものも見える。

カルカッタへ着いたのが午後の四時頃、斜めの太陽は埠頭のものと一緒に黄金色に輝してゐた。

カルカッタ市

南國の雲は噪急に走つてゐる。埠頭から絶えず立ちのぼる埃芥にこめられて空は暗く陰鬱に見える海に落つる夕陽の日射は無数の船を宿した海の上に落ちて、入り亂れた小蒸氣や、スクリユーヨット

や、土耳其船の速い船脚によつて小止みなく擾される。鎖の滑り車の轟、鐵旋輪の輾、汽笛の音、人夫、水夫、苦力、税關吏等の叫び聲が雜然ミ夕暮の空に反響してゐる。

陸上からも絶えず新らしい騷擾が、こんより曇つた空に起つてカルカッタの街はいま夕暮の物の音に蕩然ミ酔つてゐる。夕焼けの空に星薄い大陸の雲が千切れくに見えるだけで、それも芥や埃の雲の中へ消えて行く。埠頭に一面に並んでゐる瓦斯の光りがボツリ、ボツリミ獸の眼のやうに光りを増して行く。

長く立並んでゐる倉庫の下を私はこの町の思つたよりも繁華なのに驚きながら、寢不足のほやけた顔で通つて行つた。

三階、五階、十階の建物が雜然ミ列をなして並んでゐる。屋根の丸いもの、角のもの、尖つたもの、電燈、瓦斯燈、弧燈、鐵道、電車、馬車、自動車、雜然、混然ミして一つの大きな管絃樂のやうな感じてあ



カルカ

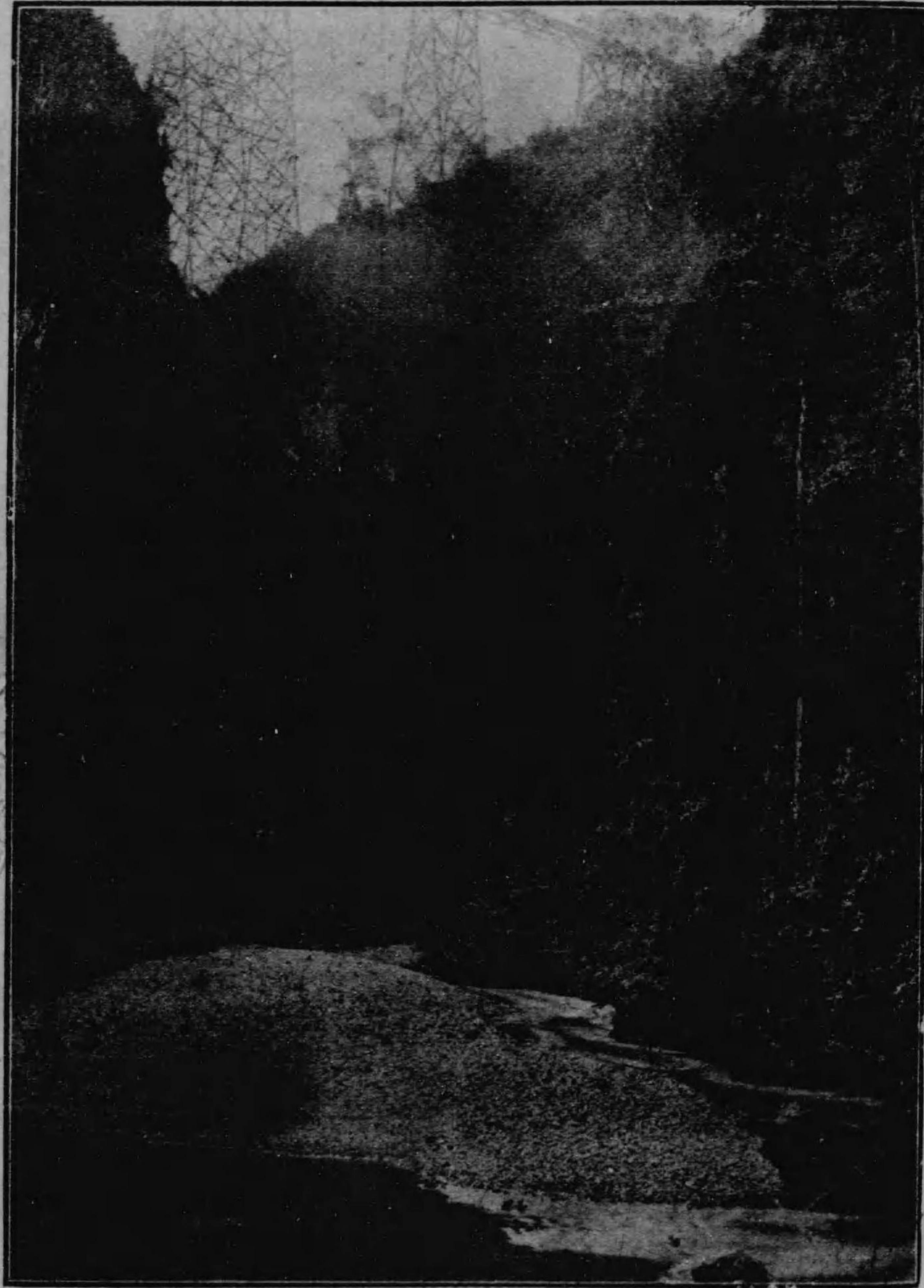
る。ビルマの静かな哀感のこもつた音樂の名残のやうな頭腦にこの強いテノルの管絃樂は先づ私を目まぐるしい混沌の境に壓倒した。大通りを東に辿つて行く。

當もなく歩いて見ても仕方がないので、交番へ行つて巡查にケダーポールは何方か訊いて見る。「知らない。」ミ突慳食にいふ。日本領事館へ行

つても夜は誰も居まいと思つたので、其の儘通り過ぎる。ケダーポールが知れないことになる。私の心は不安の念に襲はれた。懷中には殆ど旅館へ宿る金もない。アスファルトの舗道を私は俯首れて歩いて行く。小止みなく過ぎる電車や自動車は私の頭腦を疲らせ、神経を苛立たせた。眼を瞑つて聞くまいさへした。彼等は皆な住家を持つてゐる。無情にも彼等は知らぬ顔して過ぎて行つた。顧みもし



口 港 タ ヅ



(照参頁九八二) 景光の近附 - ヨシメ

—(302)—

ない。行路樹の蔭に眠りして瞬もしない瓦斯の光りを見ても、それにすら理性のやうな冷たさがあるではないか。大都會の紅塵の中に居て私は寂寞の底に墜へられない。遺瀨ない悲哀いふものは紅塵の中に住むものではあるまいか。

當もなく彷徨つてゐる中に私はまた河岸の方へ出てしまつた。夜目にも其處は船渠であるに知れた大きな船體がマンモスのやうな圖體を横たへて太古の儘の沈黙を續けてゐるやうである。河底に思はれる深いところに灯がして人の怒鳴る聲が聞える。薄い夜氣が四邊に霧つてゐる。足にまかせて其處いらを彷徨いて歩く中に、私の感情は急激に狂奔して來た。大聲して踊つて見たい。第一第二第三第四ミドックは連なつてゐる。物狂はしさで噪急さで私は其處を驅けて歩いた。

もう夜も更けたらしい。夜が更けて見るに、私の噪狂もながく續かなかつた。ケダーポールまで言つて思ひ切つて馬車を雇ふことゝした。其處に私の友人の紹介ある柔道家T君がゐる筈である。ケダーポールは餘り遠くはなかつた。馬の足で三十分たらずしかかゝらなかつた。其處は女郎屋街

であるにいふことも豫てより聞き知つてゐた。遺瀨ない寂寞の感情は華やかなものを求むる慾情なつて私を強ひたのである。二十九番いふ日本人の女郎屋へあがつた。ところが偶然にも其處の亭主は柔道家T君であつたのである。T君は喜んで私を迎へてくれた。やがて酒を出して私を款待してくれたりする。

ない。行路樹の蔭に眠りして瞬もしない瓦斯の光りを見ても、それにすら理性のやうな冷たさがあるではないか。大都會の紅塵の中に居て私は寂寞の塵に埋へられない。遺瀨ない悲哀いふものは紅塵の中に住むものではあるまいか。

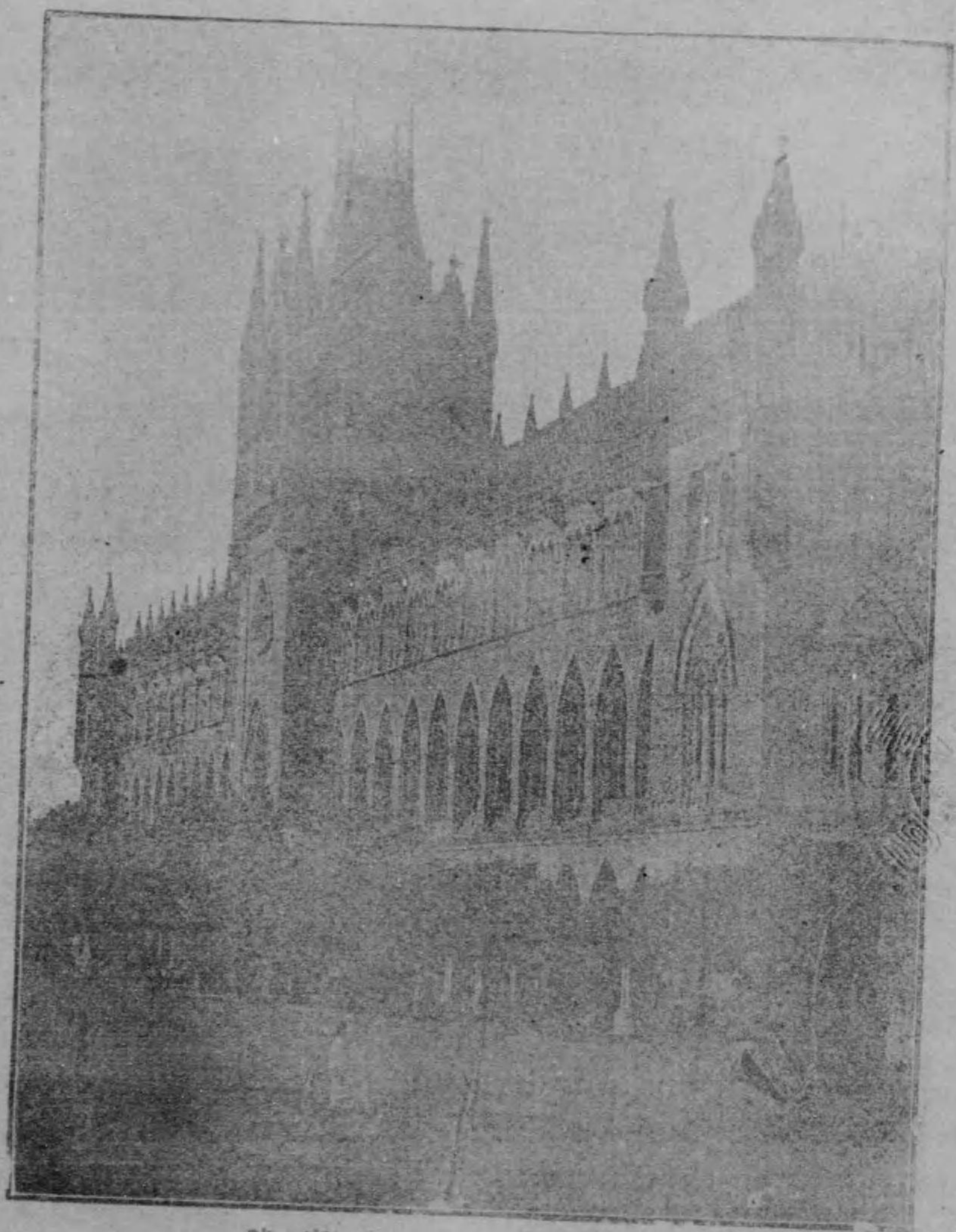
常もなく彷徨つてゐる中に私はまた河岸の方へ出てしまつた。夜目にも其處は船渠であるに知れた大きな船體がマンモスのやうな圖體を横たへて太古の儘の沈黙を續けてゐるやうである。河底に思はれる深いところに灯がして人の怒鳴る聲が聞える。薄い夜氣が四邊に霽つてゐる。足にまかせて其處いらを彷徨いて歩く中に、私の感情は急激に狂奔して來た。大聲して踊つて見たい。第一第二第三第四ドックは連なつてゐる。物狂はしさささ噪急ささで私は其處を驅けて歩いた。

もう夜も更けたらしい。夜が更けて見るに、私の噪狂もながく續かなかつた。ケダーボールまで言つて思ひ切つて馬車を雇ふことゝした。其處に私の友人の紹介ある柔道家T君がゐる筈である。

ケダーボールは餘り遠くはなかつた。馬の足で三十分たらずしかかゝらなかつた。其處は女郎屋街であるといふことも豫てより聞き知つてゐた。遺瀨ない寂寞の感情は華やかなものを求むる慾情なつて私を強ひたのである。二十九番いふ日本人の女郎屋へあがつた。ところが偶然にも其處の亭主は柔道家T君であつたのである。T君は喜んで私を迎へてくれた。やがて酒を出して私を款待してくれたりする。



(照參頁九八二) 景光の近附 - ヨシメ



院密大ツカルカ

「此處では何だか氣拙い。私の住宅へ行かうや。」

T君の後に私は歩いて行つた。T君は人のいゝ磊落な人である。カルカッタ在留中は私の家にゐるが、いゝ言ふので、其の好意の儘にした。

二十八日T君は私を方々へ紹介してくれる。ケターポールといふのは土人の穢い街で、場末の貧民窟と言つた風なところである。市中見物券々私は自動車飛ばして町の中央のスクエアまで出蒐けて行く。其處は此の町の目貫のところで日本の大商店が櫛比してゐる。三井物産、日本郵船、鈴木商店、益田商店、日本棉花等がある。

先づ三井物産を訪ふ。支店長代理の方に會ふ。カルカッタの商的概念を得んためであつたのである。三井物産では年に二千萬圓の貿易を行つてゐる。お暇して歸らうとするに、支店長代理は私に五十盾贈呈してくれた。郵船、正金、鈴木などを歴訪するに、私に同情してそれぞれ三十盾二十盾づゝくれて合計百盾ほどの寄贈があつた。歸途領事館に寄る。領事旅行の話をしたり、日本人の状況について訊いたりして、印度一圓に對する商業的智識を求めた。カルカッタで見なければならぬものは植物園、動物園、博物館などを覗いて見たらよいこのことであつた。印度内地の裏書などもして貰ふ。ボンペー領事宛に紹介状をもらえる。領事へ暇を告げてケターポールに歸つて来る。歳の暮に押しつまつた街には何もなく、慌しい氣分が動いてゐる。

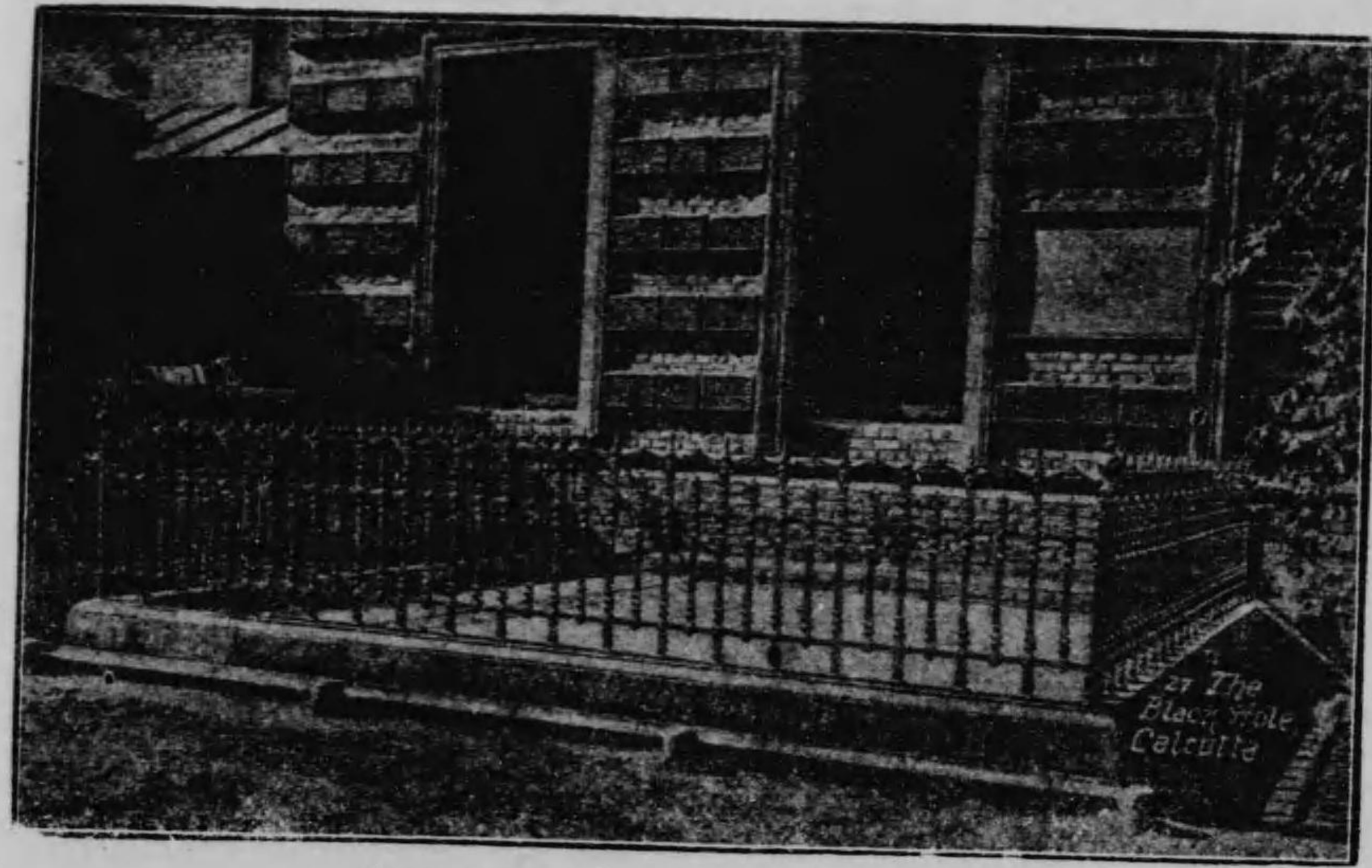


「此處では何だか氣拙い。私の住宅へ行かうや。」

T君の後に私は跟いて行つた。T君は人のいゝ磊落な人である。カルカッタ在留中は私の家にゐるが、いゝ言ふので、其の好意の儘にした。

二十八日T君は私を方々へ紹介してくれる。ケダーボールミいふのは土人の穢い街で、場末の貧民窟と言つた風なところである。市中見物旁々私は自動車飛ばして町の中央のスクエアまで出蒐けて行く。其處は此の町の目貫のところで日本の大商店が櫛比してゐる。三井物産、日本郵船、鈴木商店、益田商店、日本棉花等がある。

先づ三井物産を訪ふ。支店長代理の方に會ふ。カルカッタの商的概念を得んためであつたのである。三井物産では年に二千萬圓の貿易を行つてゐる。お暇して歸らうとするに、支店長代理は私に五十盾贈呈してくれた。郵船、正金、鈴木なを歴訪するに、私に同情してそれぞれ三十盾二十盾づゝくれて合計百盾ほどの寄贈があつた。歸途領事館に寄る。領事旅行の話をしたり、日本人の状況について訊したりして、印度一圓に對する商業的智識を求めた。カルカッタで見なければならぬものは植物園、動物園、博物館なを覗いて見たらよいこのこゝであつた。印度内地の裏書なごもして貰ふ。ボンベー領事宛に紹介状をもくれる。領事へ暇を告げてケダーボールに歸つて来る。歳の暮に押しつまつた街には何もなく、慌しい氣分が動いてゐる。



ル　一　ホ　ク　ツ　ラ　ブ

其の翌二十九日、もう年内には餘すところ幾日もなかつた。併し、家もなく、妻もない私には元且も晦日もない動物園へ観覧に行く。動物園はなるほど東洋第一と言はれるほどあつて、種々な動物が殆ど網羅されてゐる。タイガハウスなどは宏壯な建物である。日本から丹頂の鶴もこり寄せてある。歸途ぶら／＼と歩いて来るに、私の前を跋の英國の巡査部長が一人行く。何気なく通り過ぎるに、「ミストル、ミストル。」と言つて呼ぶ。何か用事かと言つて聞けば「ミストルは日本人か」を問ふ。もはや年も五十四五の胡麻鹽である。

「私の妻は日本人ですか、日本の方に會ふのを大層嬉しがります。私の處へ遊びに来て、旅行の話でもして下さい。そして妻を喜ばしてやつて下さい。」かう言つて彼は私の手帳に名前を書いてくれた

懐しい、いゝ人である。殊に外人からこんな親切な言葉をうけた私は心の中に甘い甘い滴りを感じたのだ。

あの人に今一度會つて見たい。未だ歸つてゐないことは知りながら、歸つてゐなければ奥さんにでも會つて見たい。日本人に會ひたがつてゐる日本人の奥さんに會つてみたい——かう思ひながら私は彼の書いて行つた住所の番地を引合せながら歩いて行つた。探し當て、其の人を訪ねるに、やはり跋のお婆さんが出て来た。間違ふ方なく日本人である。彼女に來意を告げるに喜んで「お這入りなさい」といふ。應接間に通される。其處へ彼女の夫のビー、ノルドオも歸つて来た。彼はウ井スキーや種々な酒を肴を持って来た。

三人で酒をのんで、ノルドオは私を伴つてブラックホールへ連れて行つてくれた。其のブラックホールといふのはカルカッタ市の史績の一つになつてゐた。それはブラックホール事件といふ史實のあつたところである。事伸は一七五六年ベンガル地方の土侯のスラージャ、ドウラーが兵をあげて英人の根據地であるウ井リアム城を襲撃して、英人百四十六人を捕虜にし、これを一度に僅か二十呎位ある穴の中へ投げ込んでしまつたのである。それは六月二十日のことであつたので南國の熱氣は、恰も猛火で炙らるゝやう、その狭ま苦しい穴の中は氣息奄々としたものがあつた。初めの中こそ、阿鼻叫喚の聲が聞えたが、夜は次第に更けるに共にその聲も次第に細つて、翌朝その穴

の扉を開いて見るに、殆どすべての人は窒息して、息も絶え／＼の人を僅かに二十三名見出した。いふ。その生存者の一人で高官に就いてゐたホルウエル氏は自らの命の救はれたのを奇特として百二十三人の死體の投棄せられた穴の上に記念碑を建て、その菩提を吊つたのである。後またガーゾン卿の印度總督時代に薪に改築して石棺を建て、その靈を記念するこゝとなつた。ダルハウゼー方街の北隅で、郵便本局の側に立つてゐるのはそれである。

ノルドオ氏はさういつて私に説明してくれた。その鐵柵をした一枚板の石棺の蓋が今にもこれらの怨恨をのんで死んだ人々の靈魂のために動きさうに見える。

歸途私はノルドオ氏の紹介でイングリツシユ、メエーン、ペーバアの記者に會つた。記者は私の旅行した動機及方面を聞いて私のこゝを翌日の新聞に出してくれた。ノルドオ氏の家に歸つてまた杯を重ねた。氏の家に宿まるこゝにした。

もう今年も餘すこゝろ今日明日となつた。朝早く氏の家をお暇して歸つて来るに、繁華な方街へ出て来た。私はその頃「十萬哩徒歩旅行者」を表明する懸章をかけてゐたので、其の方街を通り絶る私の後に「ヒー」「ヒー」「ヒー」さういふ聲がする。何か喧嘩でもあるのかと思つて振り返つて見るに大勢の白人が男も女も私のこゝろへ向けて突進して来る。手には一様に、イングリツシユ、メエーン、ペーバアを持つてゐる。

東京の須田町のやうなこゝろである。私に繪葉書で自分の寫眞を持つてゐないかといつて訊く。持つてゐるこゝいつて出す。

「サンキ、ユー。」と言にてポケットへ入れてサツサミ行き過ぎようとする。

「おい、貧乏旅行者のものをたゞで持つて行くのか。」

「オー、イエス。」と言つてポケット、マネーを五盾渡してくれる。

今までのこの光景を見てゐた他の白人も金で解決がつくこゝ心着いたものを見えて、我も我も三盾、三盾、五盾、七盾と贈つて私の寫眞と繪葉書を頒與してくれと言つて来る。後から後から来る。噂が噂を生んでゐるらしい。中には眼の綺麗な豊頬の美しい人もゐた。忽ち百盾ほどの金が出来た。金になるこゝは兎も角として、私はカルカッタのこの大道の中でこんな面目を施したのである。爾來電車に乗つても、自動車に乗つても「ウラー」を浴せかけたり、「ヒー」を叫んだりしてくれる。白人には何處かやはりいゝこゝろがある。

私は彼等の情に篤いのに感謝しながら道を急いでゐるに、一人の自動車の運轉手が私を呼びこめる。「何か」こゝきく。

「私の御主人の奥さんが貴方に何か承はり度いこゝがあるとお仰言るので。」

其處へにこゝこゝ笑つて、身體は華奢な衣眼をきた美しい英國人の女が来た。傍によつて来るのを

見るに、身體はほつそりこして、眉こいひ鼻筋の通つたところこいひ、小さい丸い顔こいひ、殊にその眼は夢幻的な輝きを放つて、何時でも涙を湛へてゐるこいつた風である。可愛い美しい奥さんである。直感的に私は自分の貧しい人ではないと知つた。運転手は葡萄牙人である。

「ミスター、トリイ、レッタス、ゴー、ツー、グランドホテル。」
かう言つて彼女は殆ど私の手をさらんばかりにして自働車に伴つて行つた。

グランド、ホテルは酒場をかねたホテルであつた。種々なものを注文して御馳走してくれる。夫に電話をかけて呼びよせたりした。

夫も人のいゝ温情に満ちた人であつた。何時でもニコニコ笑つてゐて、其の眼鼻立ちに何處かシーザーの塑像を思はせるやうなところがあつた。その時この夫婦はカルカツタの税關長であるといふことが知れた。

三人はシャンパンをのんだり、飯をしたゝめたりして其處を出た。植物園へ行くつもりで連絡線に乗り込む。

「トリイサン、貴方は何處にゐるのですか。」
「ケダーボールにです。」

「おゝ何をした侮辱でせう、そんなところゐるには日本のセントルマンの面目に關しますよ。私の家

でよかつたら幾日ゐてもいゝから居らつしやい。」言つて、妻を顧みて、

「お前お歸りには屹度お伴した方がいゝよ。」涙の出るやうな温言を聞かせてくれる。

カルカツタの植物園も見事なもの一つである。熱帯植物は繁るが儘に茂つてゐて、赤い花や、白い花、黄色い花などが處一面に咲いてゐる。立派な蘭科の植物もある。チークの技振りも見事である。殊に異觀を呈した周圍一哩ある榕樹と、高さ四五丈もある機欄の並木路である。いづれも翠色滴らんとしてゐる。

土地が亞熱帯である故に、日本の植物園なごのやうに温室の設備を要しない。歸途またカルカツタホテルに立寄つて夜の更けるまで酒をのんだ。一時過ぎに船渠近くの彼のところへ行つて宿まつた。

三百六十五日の最終の日は来た。あらゆる人々は今日一日の爲に生きてゐるこいふ風に慌しく動いてゐた。悠々として自ら身を處してゐる私なごには一年の最終の日でも、最初の日でも、故國の元旦でも、異國の晦日でもそんなこごには關係しない、つまり時間と空間を超越してゐるのだ。

故國で新年を送らうと思つたり、異國で晦日を暮すまいとしたりするほごでは旅行者になり得ない。——こ言ふよりも放浪兒は一定の時日や、一定の場所に執着するほごの心を持たないのである。無執着心——それが放浪兒の心理である。可愛い女が出来ても棄てて行く。魅するやうな山水があつても棄てて行く。行かなければならなくて行くのではない。唯何もなく動いて見たいのである。ある知ら

ない人が何時でも後方に待ち設けて私が一つのものに執着しはしまいか。監視してゐる。しかし思はれない。ブラリ／＼其處を離れる私の前にも見えない案内者が私を導いてゐる。

その見えない人のために、その見知らない案内者のために、私はまる三年の時日、東半球の一端を漂泊して歩いた、香港の夜の情緒の中に淡い霞を織り込んだのもその見知らない男のためであつた。千古の大密林の中にボルネオ黒奴と共に道を失つて、餓死しようとしたのもその見知らない黒い案内者によつてであつた。或時はガヨールの半月の下に、熱涙を揮つて巨人マンナムの面影を思んだのもその黒い男の指喉であれば、新嘉坡の夕霧の中に紅い灯を慕はせたのもその黒い男の道伴となつたまでである。

旅より旅へ渡り歩く巡禮者の心には定着がない、執着がない。骨の骨まで、髓の髓までしやぶつて味ふ。いふこゝをしない。淡泊にちよつと箸をつける。けである。如何に美味な膳羞でも骨の骨までしやぶらない。それだから鋭敏な直感力がいる。それだから執拗な記憶力がいる。それだから昨日は太平洋の波の上で東に昇る赤光の太陽を拜して過去の懺悔に涙ぐんだ私は今日は印度洋の夕に西に落ちる青白い月の影に興奮して未來の「タ、タ、アー、アラー（南無阿彌陀佛）の國」を戀うて來てゐるのではある。

おゝ涅槃の國よ。一年の最終の日の空は今日も晴れて三千年の歴史を物語つてゐる。七彩の雲を浮

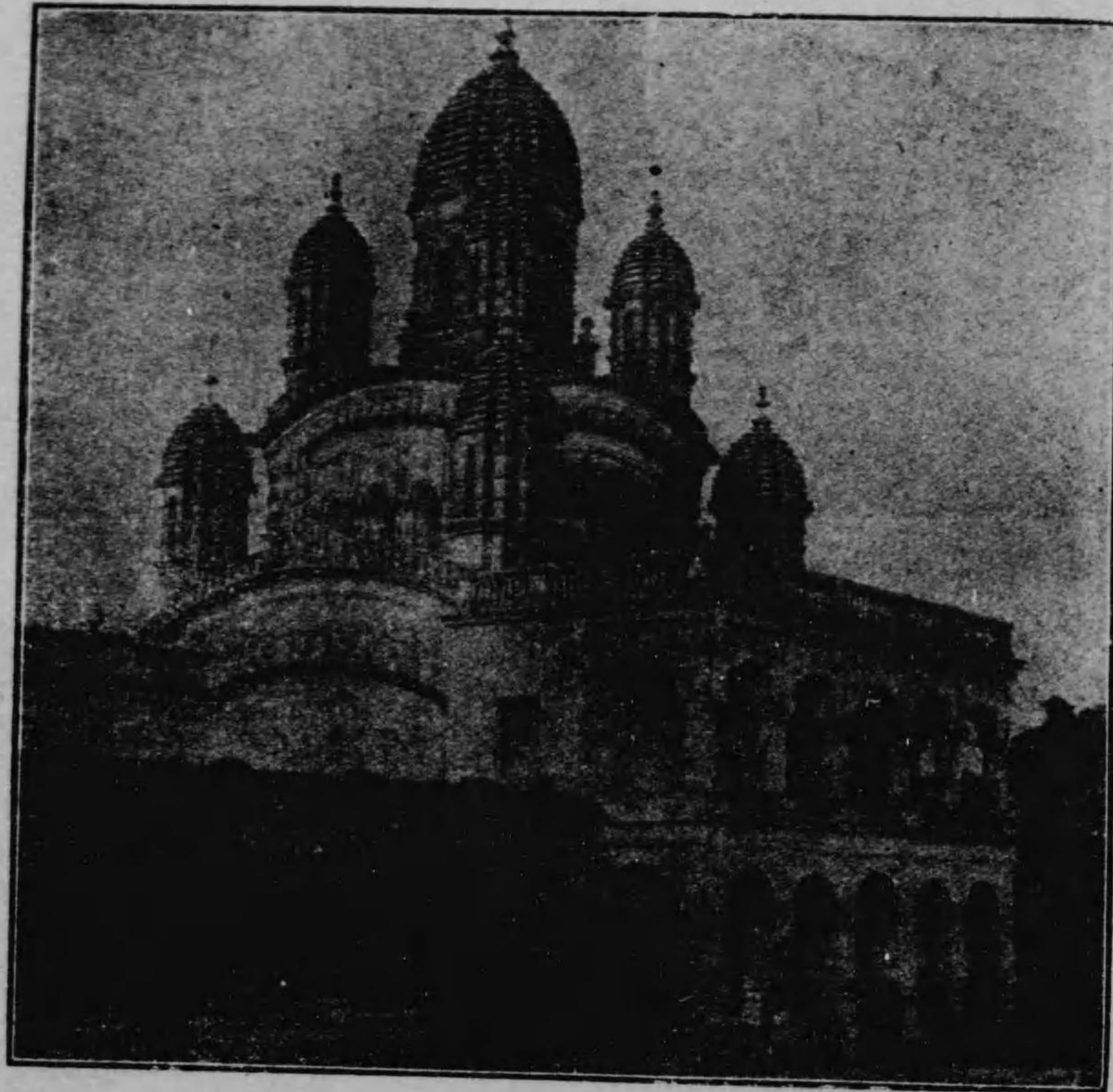
かしてゐる。

税關長は私に釋迦の遺跡である四大聖地について一通りの説明を與へて寫眞をくれた。旅の先き先きへ行つて手紙を送つて下さいとも言つてゐた。かういふ人の懐を離れるといふこゝは私には悲しいこゝの一つであつた。税關長は趣味の廣い人であつた。

三十一日の午後ケダーボールのT君のミころへ歸つて來る。もう押しつまつてゐるから、こゝ暫くは外出をしないで悠々、印度のお正月をして行くがいゝ言つてゐた。印度のお正月——その言葉を聞くに私は年によつて世界のあらゆる土地で送る新年のこゝを考へて、今更國を遙かに出てゐるこゝが思ひ出されて感慨が深い。

來年の正月、來々年の正月——私はその一里塚を何處に立てゝゐるこゝであらう。ニール河の砂丘に數千年の謎語を今も語つてゐるスフィンクスのほごりに立つて「人間は何ぞ」いふ問題に思ひふけつてゐるはすまいか。それとも、ヴェスヴィアスの噴煙を仰いでボンベ——最後の日を忍び「行人の運命」に思ひ及んでゐるかもしれない。まだ佛蘭西へは這入つてゐない。

「印度のお正月」は來た。T君に伴なつて方々日本人の家を廻禮に歩いた。三日間は馬券を買つて競馬會へ行つたり、例の老巡查部長を訪ねて酒を飲んだりした。寫眞帳や、カルカッタ十産を買ひ備へたりする。私の心はもうカルカッタ市から反いてゐた。曠世の天才釋尊を



ヒンズー教の寺院

あつたのを、一六九〇年英人ジョック、チャーノック初めて商館を設けて以来東印度商會もその貿易場に充てやうが爲にこの地點を選んで城廓を築いて以來、次第に繁華の土地になつた一七七二年ヘースチングス卿が、最初の印度總督として政廳をこゝに置いてから數年前の一九一年迄百四十年間の印度の首府であつた。カルカッタには他の大都市のやうに寺塔、舊蹟の見るものは少ないけれども

生んだヒマラヤの雪、ブツタガヤの大聖地に向て私の憧憬の念が動いて行つた。カルカッタ市には日本人が三百人餘り居る。こゝの日本人會も正業者も不正業者との間隔が甚だしい。正業者は不正業者を一笑に附して合はない。その癖、夜なごは正業者の紳士諸君が在五中將を氣取つてお忍びになる。中には嬪夫までしゝる中將もある。

カルカッタ市は人口百二十二萬を包んでゐる大都市で、英帝國の都市中倫敦に次いでゐる。そしてその人衆は實に三百九十七種の異人種及び異國人から出來てゐる。印度の都市としては比較的近代の建設に係つてゐる。此地は以前ガンヂス河三角洲地を流れてゐるフーグリー河の左岸にある沼澤で



印度の妖術

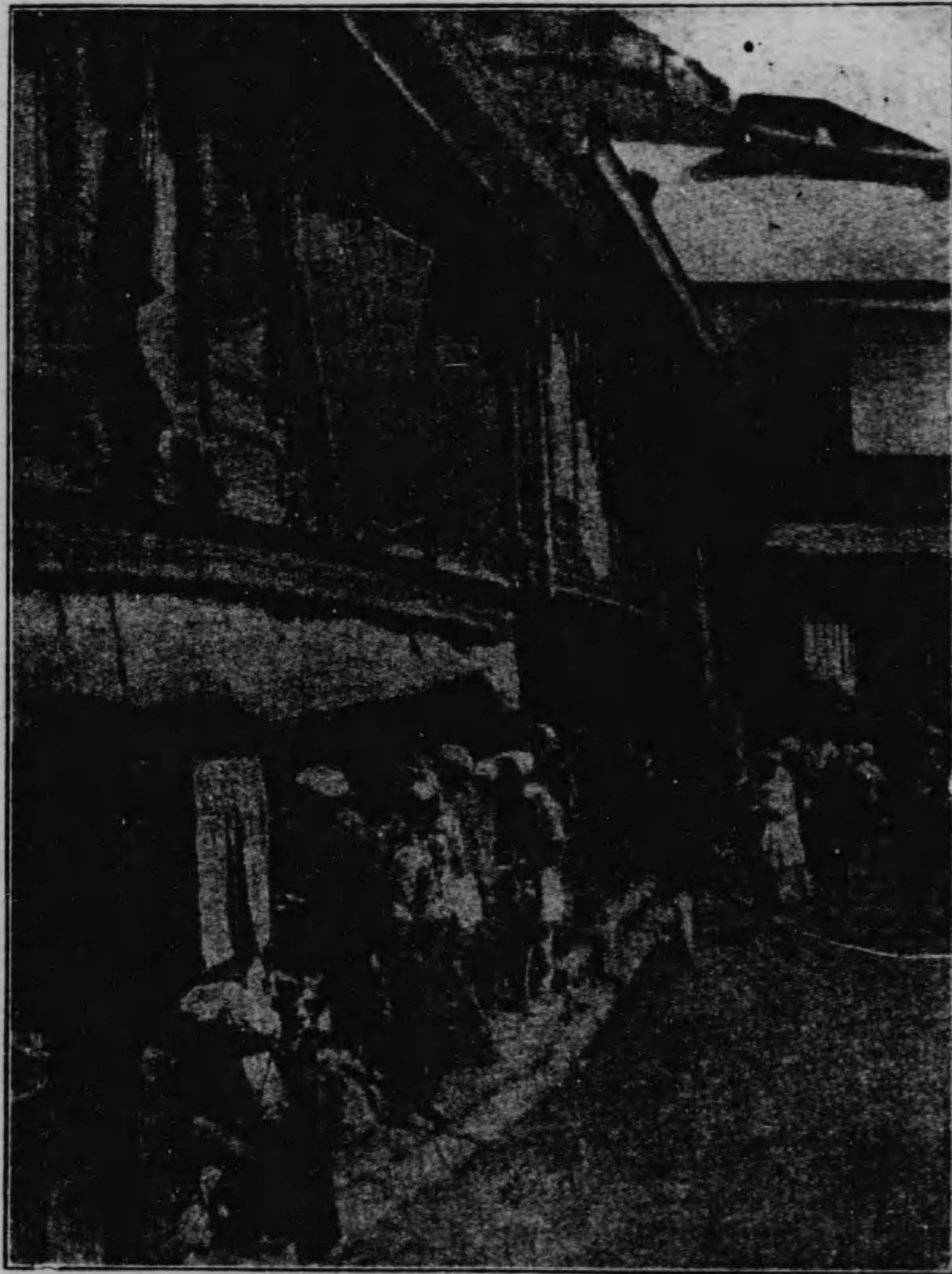
クライヴ卿時代のウィリアム城、ブラック、ホルルの舊蹟、文豪マツコレーの住宅、英國文豪サツカリーの生地等有名である。

二四 カルカッタ附近の奇習

印度の奇習は多くは宗教を中心としてゐる。土人町を歩いてゐるに著しく目につくのは牛である。幾何もなく街頭にうろついて歩いてゐる。或は店舗の野菜類を食ひ荒したり、塵溜なごをひつくり返したり、悠々大道の最中に横臥して通行の妨げをするなご言語同断である。そればかりではない、老爺や老婆は牛をお賓頭盧様と思つて、牛を撫でた手を以て額にかざして推し戴いてゐる。牛は印度人にまつては最も尊い動物で、之を凝神化して、之を殺すといふことは婆羅門を滅すことであるとして死罪に處せられたものであつた。

人糞を肥料にもしない印度人も牛の糞をいへば、地上に落ちてゐる牛糞は勿論のこと、牛の後に廻つて手をあて、牛糞をうけ、之を拜して額や胸や手なごにぬりつけ、之に水を加へ、灰を混ぜて家屋の壁や土間を塗りつぶし、日本の炭團のやうに丸めて家屋の外壁や垣根に押しつけ、その乾燥するのを待ちうけてこれを薪炭代用にするのである。また白い牛の尿をくみまつて、それを拜し、それで顔を洗つてゐるものなごもある。印度は實に牛の爲に滅び、牛の糞尿のために國を滅ぼしたのである。

こいつ
てもい
と程で
ある。
その
牛の尿
をのむ
こごを
パンチ
ヤガヴ
井ヤを
飲むこ
いふ。
これ頑
迷固陋



町人土のタツカルカ

なる婆羅門徒の罪障消滅の第一方便であることしてゐる。

第二方便は靈水に浴することである。ガンヂス河の流域へ行くに幾百幾千（殊に縁日には幾万）といふ人が出て水浴をしてゐる。カルカッタ唯一の奇觀である。

オーソドック、ヒンヅの考へによるに、彼等の一舉一動が總て宗教上の條規に従はなければならぬのである。さうしないに、八萬地獄の釜の中へ落ちるといふのである。ヒンヅの經典には大は天文物理、哲理のこゝから、小は居住座臥の瑣事に至るまで記されてゐる。糞便するには如何なる土を以て幾度尻を清めなければならぬか、甚だしいのは閨中の密事にまで書き及んでゐる。オーソドック、スヒンヅの日々の生活動作は、宗教儀禮の連鎖就中沐浴は最初の輪環をなしてゐるもので、一日一度は是非沐浴潔齋しなければならぬ。河川の岸邊は彼等の沐浴場で、河が遠ければ堀池でやる。印度國中みんな津々浦々でも寺に堀池のないところは無いといつても過言ではない。入浴して最も靈驗の著しいさせられてゐるのはガンヂス、ジャムナー、サラスワタダ、インース、ゴードヴリ、ネルブダ、カウヴェリ等である。若しこれらの河で沐浴が出来ない時には止むを得ず堀池や、家屋中で沐浴はすることを許してあるが、ガンヂスや、インダスで沐浴するに同じい心で、心に思念を凝らして毎朝沐浴しなければならぬといふことになつてゐる。

おゝ、ガンヂスよ。梵天の養に生じ、シヴの頭髮に下り、ヴ井シヌの足を經て、總ての人の罪

惡を洗ひ去り、彼等を清淨にし、彼等に祝福を授けんが爲に地上に流れ來れるガンヂスよ、卿は下界萬物の維持者にして、保護者なり。余は卿を思ひ、而して卿の神聖なる水中に浴することを心に深く念す。願くば余の罪惡を拂拭し、總ての災禍より余を救はんことを。さういふ風な讃歌を唱へて、後東面して太陽を拜し、手に三度水を掬つて捧げ、神の守護を祈念するのである。

これは如何にも衛生思想が發達してゐるやうにも見える。けれども、決してさうではない。唯宗教から來たまでのことである。

彼等が潔齋沐浴する河川堀池の上流では牛糞をぬつた顔や胸を洗つてゐるかと思へば、下流では食器を洗つたり、衣服を洗濯したり、飲用水を汲みこつたりして居るのである。而も其れ等の河川堀池は一般に混濁してゐる。

ビンヅは沐浴の前に身體に油を塗つて能く摩擦する。それは皮膚を軟弱にして、熱風に吹かれることによつて生ずる肌のを防ぐためである。多くは椰子油や、芥子油などを用ひる。

二五 寒月白きヒマラヤ山

一、ターチリンまで

印度へ旅行して来る人の一つの憧憬はヒマラヤ山に登るこいふことである。世界一の高峰ヒマラヤ山に登らないこいふことは旅行者にとつては大きな耻辱であらねばならない。

一月三日午前十一時三十五分發の汽車でいよくカルカッタ市を離れて、カルカッタ市の正北、シツキム國の南に當つてゐるダーヂリンに向けシャルダ驛をたつて行く。友人の一人が送つて来てくれた。それは徒歩するここの危険が今一つは南洋から来た私には防寒服の用意がなかつたからである。ダーヂリンは景勝の美を以て著はれてゐるのでカルカッタに寄港した旅客でこゝへ杖を曳かないものは殆どない位である。

ダーヂリンは一八三五年、印度政府が保養場の必要を名として、シツキム國から獲得したもので、カルカッタの北にあつて、三百餘哩、汽車で二十一時間を要する。

目も遙かに地平線が廣がり、赭土色の平野は平野に連なつてその涯は雲の中に迷つてゐる。處々にちつこ陰鬱に茂つてゐる森があるばかりで、冬の日の弱い黄色な光線がその平野や、森を所在なささうに照らしてゐる。平野の向ふからは白い厚い雲が天の半ばを埋めて亂れて来る。草より草に入るこいつたやうな生やさしい形容の這入る情景ではない。廣い野面を渡る風の音すら物凄くて詫しい。幾萬里の大陸を渡つた風である。木の葉の囁きや、牧笛の音を含めた内地の風を異にしてゐる。汽車はベンガルの大平野を北に走つて百十六哩のグムークデア渡船場まで行く。旅客の多くはネバ

ール人か、又は登山を志す人々のみである。

グムークデアの渡船場から白塗りの河汽船に乗つて對岸サラガットへ三十分で着く。ガンヂスの濁流は凄じい水音を立て、渺漫と流れてゐる。ドウ、ドウ、ドウと永劫から永劫に渡る呻き聲をあけてゐる。恰も大洋を渡る感である。

此處あたりで最も奇觀すべきは印度特有の降雨期が来るに、ガンヂス河の水量は益々増加し、水流が激怒して、時に河底を變じ、沿岸に氾濫して、昨日の淵は今日は瀬となり、最も甚だしきころは河岸の積土が増減して鐵道の終點を數百碼も伸縮しなければならぬといふことである。

着船場のサラ、ガットより再び汽車に身を投ずることとなる。此の時斜ける日射は漸く彼方の平原に沈まうとして、河流一面に黒と銀との皺を湛はせる。對岸、椰子や檳榔樹の蔭に日が落ちかゝつてくつきりこ黒く佇み、岸邊に囁く漣の音にちつこ聞き入つてゐる。三角の白帆がゆるりこ櫓の音を漲らせて夕霧の中へ消えて行く。——陽が落ちるに、寒さが犇々迫つて、身は深山に迫つて行く心地である。

平原の北端のシリグリ迄行くのである。悪臭、灰色、動搖がこの汽車の全體であつた。薄暗い電燈が濛々煙つてゐる。カーの中を陰鬱に照してゐる。乗客は西藏人やネパール人、ブータン人、混血兒である。私の隣席にゐる波斯人は親子とも人のいゝ人達で、私に種々好意を見せてくれた。

摘めと言つて椰子油やラードで拵へた菓子をくれたが、胸の悪い臭ひがするのでとても食べられない。可憐しがつて私の通つて来た土地々々について興味をそゝられて種んなこゝを訊いた。言葉が諒解出来ないので話すのに骨が折れた。遂に煩はしさすら感ぜられる。

軌道の廣さが非常に狭くガタガタと揺れる馬車のやうな鐵道である。一室には十四五人しか這入れない。それが高原の上を喘ぎく登つて行く。濛々煙つたカーの中、黒い色の顔や、白い頭巾をした頭がゆらく、悪鬼のやうに動いてゐる。時高調子の話聲がすると思ふミバッタリやんで、漸く疲れた色が顔を皮膚をゆるめて、細い月の冴えたベンガルの野は更けて行つた。

唯だ人間であるといふ唯一の點を共通して西亜の一隅に生まれた男、東亜の一角に生まれた男、一つの汽車の部屋を共通にして旅をする、一つの問題について話をするといふのは何と不思議な事であらう。釋尊はそれに縁といふ名をつけられた。その縁といふことを考へる私は涙ぐましい心地になる。文明といふものゝ光りもさゝないこれらの人々にすら人間的なものを認めることが出来るほのく、匂ふ林檎のやうな温みである。人類が可憐しみ合ふ心でもいふのか。

何でも小さな停車場へかゝつた時であつた。ドヤ／＼と闖を排して這入つて来た一連があつた。うつら／＼物思に耽つてゐる私の傍へ来ていきなり席を譲つて隣室へ行けといふ。見れば混血兒である。不常から我が物顔に印度を潤歩してゐる先生であるからムカツミした。何だと思ふ。

「おい、お前は無禮ではないか。俺は日本人だ。お前達が席を譲るのは當然ではないか。」と試みに怒鳴つて見るに、東洋の一等國民に畏怖を抱いてゐる彼等は、忽ち私の前に頭を俯せてしまつた。そうなるに、また氣の毒な氣も起つたので、寢ころんだ身體を擡けて、一人に席を譲つてやつた。

「有難う御座います。」

ミ丁寧に言つて、愛憎笑ひをしたりした。遂には携帶の例の油揚のプレットを私にくれたりする。彼等は私を印度土人に見たのである。人間といふものはやはり可愛いものである。此方から心持ちを温めて接すれば相手の頑な心持でも解かすことが出来るものだと思ふ。

パーシーは日本人に似て色が白く、寛濶な黒か又は白羅紗の上着を裾長く着て、頭には縁のないトルコ帽といふのを戴いてゐる。印度に居るパーシーの数は十萬に達してゐるといふ。多くはボンベイ市に居住してゐる。

「コーランか劍か」ミ叫びつゝ教祖ムハメットの前には何物をも犠牲にして止まないミ云ふ精神に動いた回教徒はその叫聲を續けて七世紀の中頃波斯へ侵入して来た。彼等はコーランを引ひる爲に先づ右手の劍を以て波斯古教の拜火寺院を破壊し、回教を奉ずるこゝを強ひた。そして國中に無數の回教寺院が建立せられてしまつた。改宗を強ひられて、改めるこゝの出来なかつた一部の波斯人は海を東に渡つて印度に來り、ボンベイの北部グヂラット地方に移住した。これが今のパーシーミ呼ばる

ものゝ始祖である。爾來此の地方に根據を据ゑて蕃殖し、一種族をなすに到つたのである。そのボンベイに這入つて來たのは十七世紀の頃であつた。

パーシー婦人はボンベイの交際場裡の花である。色は印度人に比して遙かに白く、身の廻りも華奢で、種んな縞の絹布を纏ひ、脂粉を凝して道を歩く。歩く時は誇がましく嬌をつくつて行く。中にはなかく美しい人もある。彼等は率先して立派な婦人の集團をつくつて、俱樂部を起し、種んな競枝會を催したりする。英國婦人で入會してゐる者も多いといふ。

窓から首を出して見るに、細い寒月が荒涼とした野を薄黒く照らして、其の間にはムククミした丘が横はつてゐる。荒野で見る冬の月ほゞ凄愴を帯びたものはまたさあるまい。

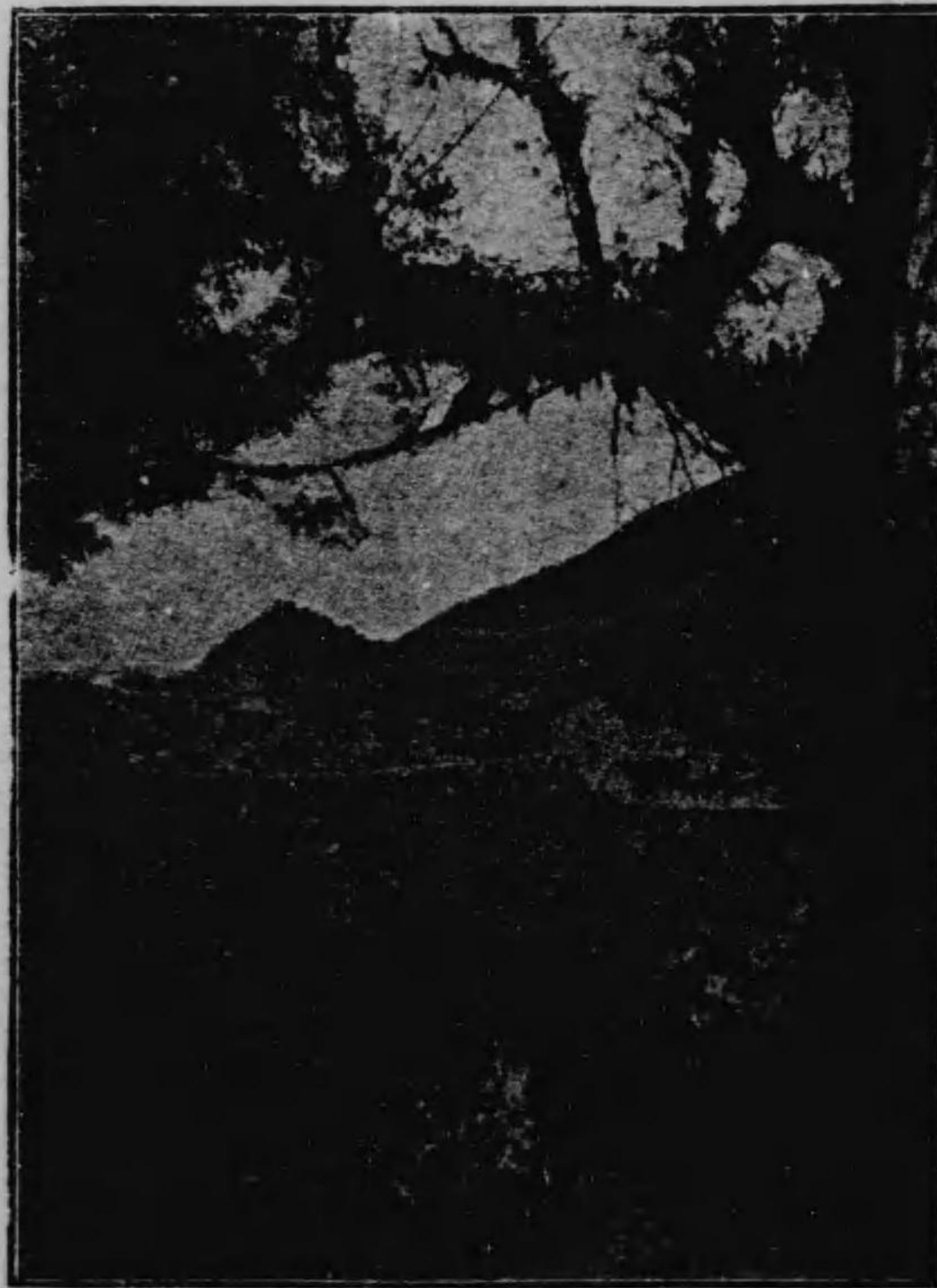
翌朝平原の北端をなしてゐるシリグリ驛に着いた。關を排し



シリグリー

て外へ出るに、早や北方には瑠璃色をした巒峯が列をなして連つてゐて、人をして勃々たる雄心をそゝらしめる。雪を戴いた山の巔は朝明けの陽に照り映えて、赤く輝いた美觀は何とも譬へ方もない。おゝヒマラヤの連峯よ。

シリグリーでヒマラヤの登山列車であるダーチリン、ヒマラヤ鐵道の人となるのである。軌道の幅は二呎ばかりで、ガタ馬車のやうな車輛を連結してゐる。一室には六七人しか這入れない。無論それで携帶品を置く餘地もない。有繋は英國であると思ふ。山を穿ち谷を埋めて單にヒマラヤ遊覽の爲に鐵道列車をこの世界的大名山を雲外より地上に住む吾人の手近かに提供する氣魄に至つては唯讚嘆の外ない。いよく汽車は平原を通り過ぎて高い山の間を喘ぎく通つて行く。山はいよく深く



登山列車

なつて谷はいよく狭くなつて行く。一望果しないブタインの平野の一部を瞰下すやうな高山の半腹を攀つてゐるかと思へば、千仞の谷底に泡立つて流れてゐる溪流の上を渡つてゐる。幾哩も続く大密林の中を通じるかと思へば、断崖飛瀑千尺の下を這つてゐる。大傾斜の断崖を攀するときはデツク、デツク形をなして逆行する。高山に登らうとするときはループをいって大旋廻をして前進する。嵐氣は奔々として私の膚を胃して来る。其の日の正午頃ダーヂリンの停車場へ着いた。海拔七千呎ほざあつて、近くの山の巔には霧が晴れたり曇つたりしてゐた。私の心は水のやうに透明にすんでゐた。熱い食物を温い人情に觸れたがつてゐた私の慾望は私を一軒の珈琲店に導いて行く。焚火に手をかざしながら私は自分の欲しいものを命じて食ひ食つてゐた。

そこへ一人の英國人が来た。その様子で見ると、巡査が慥に不常着で来たししか思はれない。私の様子をぢろくし見詰めてゐる。そうに疑ひない。ミ、果して彼は私に種んな雑談を挑んで来た。旅行の目的や、行程について突込んだ口のきゝ方をしてきゝ訊してゐる。カルカッタから電報で知らして来てゐましたので「ミいつて一通り聞き終つた彼は歸つて行つた。又もや軍事探偵の嫌疑をうけたのである。

ダーヂリンは近年開けた避暑地である。鬱蒼と茂つた緑の一丘陵の上に擴がつてゐる町で、ベンガル州の夏だけの州廳や印度貴族の宏壯華麗な別荘や、英人の別荘があつたり、兵營や、病院や、校舎



街市ンリヂーダ

教會等ある。商店の櫛比した町通りもある。その鬱蒼と茂つた緑樹の中に白い壁の家が三々五々群り立つてゐる。日本の輕井澤を大きくした感じである。印度人は白い家の澤山ある都市を好むと言つた人があつたが、如何にも成程と思ふ。

ダーヂリン市の最も繁華な時は夏季である。カルカッタよりもこの氣温が二十五六度は常に異つてゐる言ふ。夏季になるに、ベルガル一圓の紳士淑女が雲集して来て、此の地方一帯は一大公園のやうな觀を呈するのである。私の行つた時はこの時季を過ぎた最も閑散なときであつた。ホテルへ這入る。宿泊料なども安値だを考へてゐたのに、一泊が十五盾であつたので聊か驚嘆させられる。其の日はネパール